

FUJIKO

戦乱の囀り
翔の章



前置き 主な登場人物

・前置き

舞台は日本、警察組織に新たな課が設立されることになる、主な業務内容は密偵活動、これまでの警察組織とは異質の存在であった。新しい課が立ちあげられた理由として、機密情報漏えい、テロを未然に防ぐためである。

名は`警備部暗躍係、別名は秘密警察。公安課の管理下のもと、日本版スパイ機関として日々活動することとなる。職員（エージェント）はほとんど本部（警視庁）にいたることがなく、日本各地の身近な場所に潜伏、潜入して生活している。

エージェントの一人のアスカは、兵庫県に拠点を置く、女性で構成された大手歌劇団に所属していた。彼女が秘密警察の一員であることを知る者は限られており、先代トップスターであるリカの後任を任せられ、表と裏の世界で日々試練に直面していた。そして、アスカはある真相の接触を試みようとしていた...

・主な登場人物

アスカ

本作の主人公。歌劇団トップスターの一人で、もう一つの顔は秘密警察の一流女性エージェント。

ユリカ

アスカ率いる劇団班のナンバー2で裏の顔は秘密警察のエージェント。

マミコ

歌劇団トップスター兼秘密警察のエージェント。

アカネ

元歌劇団女優。アスカとは同期。現在は秘密警察の内務責任者。

セシル

元歌劇団スター。現在は秘密警察の備品開発係。

アヤカ

ベテラン勢劇団員で構成された班に属する現役歌劇団スター兼秘密警察エージェント。

トモコ

歌劇団ベテラントップスター。同劇団の理事も兼任し、歌劇団の伝統を守る第一人者である。

リカ

元歌劇団トップスターであり、秘密警察のレジェンド・の称号を得たエージェント。アスカにトップスの座を譲り、歌劇団を退団した。

剣崎ツトム

警備部暗躍係の若手捜査員、アスカの新たな相棒。

白林義一

警視庁公安課警備部暗躍係の捜査官の一人でアスカの上司。階級は警視正。

槍下守

警視庁サイバー犯罪対策課の課長。剣崎が尊敬する人物の一人である。階級は警視。

織藤尚也

民間軍事サポート会社C S S Oの代表。裏の顔は、闇の仲介人、。

御手洗栄進

元大阪府警巡查（前科あり）。現在はC S S Oの社員。

猪本雅隆

元海上自衛隊自衛官階級は曹長（当時）。現在はC S S Oの副社長。

ヴォルフ・ドラギエフ

元スペツナズアルファ部隊隊員。除隊後、過激派組織「チェルノボーク」を設立。

時代は二十一世紀に突入して、科学力は目まぐるしい進歩を遂げていつているが、本当に安全かどうか疑問視されている。まず、インターネットの普及により、生活は大きく変わろうとしていた。わざわざ足を運ばなくても欲しい物が手に入り、知らない者と交流を深めたり、世界のあらゆる情報が簡単に入手出来るのが日常になってきていた。しかし、進み過ぎた科学技術により欠点が見え始めた。素顔を明かさず、他人のコンピューターに侵入して、データを盗み、挙句の果てに破壊する、その影響で個人情報流出事件が多発して、利用者は不安に駆られていた。それでもネットは欠かせないツールであるため、利用者は日々対策を練るしか方法はなかった。

時代の流れで、見えない未知の世界で犯罪が起こり、やがてそれは個人の問題ではなく、国家を危険に陥れる問題に発展しようとしていた。

序章 筑前国の夜

二〇一六年五月某日 福岡市博多

二〇時四三分 博多某高級ホテル

その夜、ホテル内の宴会場では、あるイベントが行われていた。薄暗い場内にはきっちりとしたスーツや着物を身に纏っている女性が多く出席しており、ずっとある人物に見とれていた。その人物は大手歌劇団の劇団員の一人であった。

彼女の名はアスカ。歌劇団トップスターで、トップに就任してから一年以上経ち、ファンを魅了していた。宴会場では彼女のファン交流イベントが開かれており、場内は歓声や笑い声が絶えず、夢の世界に包まれていた。ちなみに丁度、アスカ率いる班は博多で地方公演をしているため、彼女は公演終了後にイベントを執り行っていた。

その時間、博多の中心街は仕事帰りの人たちで賑わい、このまま平穏な夜が続くのを望んでいた。しかし、叶いそうになく、暗躍する者が集まろうとしていた。博多の繁華街に位置する雑居ビルの一室に明かりが点いており、室内には大柄で強面の男たちが居て、黙ったまま誰かを待っているようであった。その一室は、九州を拠点にしている暴力団の事務所であった。

「……………」

暴力団事務所付近に一台の車が停まっており、車内の人間はじっと事務所を見ていた。それは

監視しているようであった。

二〇時五五分、アスカのイベントは、お開きになり、ファンたちは余韻に浸りながら会場を去ろうとしていた。

「...お疲れ様でした〜！」

アスカはファンが帰った後、イベントの司会やスタッフに元気よく挨拶して、宿泊部屋に戻ろうとした。

一方、張り詰めた空気の暴力団事務所では動きがあり、一人の男性がそこに訪ねて来た。

「.....目標確認...間違いなく本人ね...」

車内から事務所を監視している一人の女性が口を開き、マークしている人物と照らし合わせていた。車内は一気に慌ただしくなり、迅速に動こうと準備していた。

アスカの宿泊部屋

アスカは部屋に着いた途端、少しも休憩を取らず、イベントのために着たタキシードを脱いで、ラフなジャケットスタイルに着替えた。次に彼女は化粧を薄くして、眼鏡を掛けて、顔の半分以上を覆うマスクも着用するなど、地味さをアピールして、スターの煌びやかさを完全に消そうとしていた。アスカはせっせと裏稼業の準備をしていた。

「こちらコスモバード...現状を報告せよ」

「.....こちら、ウインド...目標を捕捉したため、今から全員で侵入するところです...」

アスカは無線イヤホンを装着して、誰かとコードネームで呼び合っていた。

「了解...私も今からそちらに向かうわ」

「...無理しないで下さい...公演に引き続き、ファンのイベントでかなりお疲れではないですか？」

「...なめないでもらえる？私は先輩だけど、年はそう変わらないわ...まだ力はある余っているわ」

「...失礼しました、それではお待ちしておりますので...ふふ」

アスカは通信相手の言ったことに少々苛立っていたが、実は本気で言ってないことを察していた。彼女たちは冗談が言い合える仲であった。アスカは、愛銃であるグロック18Cをホルスターに納めて仲間と合流しようとした。

二一時三二分、問題の暴力団事務所では怪しい取引が行われており、同時に現場には秘密警察である歌劇団が潜んでいるため、緊迫した時間が続くのであった。

「.....随分荒れているようだな...長年、関西を牛耳っていた組織ももう終わりだな...」

「...ええ、分裂して抗争が続き、勢力は弱まりつつあります...」

暴力団と取引相手は、きな臭い話を続けていた。彼らの会話内容は、室内に仕掛けられた盗聴器によって、全て歌劇団部隊の耳に入っていた。

「皆、準備は整っていますか？」

「こちらスノーミスト...了解した、こちらは裏から回る...」

「お願いします」

取引現場に派遣された歌劇団部隊は、二手に分かれて事務所内に突入しようとしていた。

「...！」

「...お待たせ～間に合ってよかったわ」

アスカは、雑居ビルの正面出入り口で先に待機していた仲間と合流して、呑気に挨拶をした。

「お～真打ち登場ってやつですね～」

「...そうでもないけどね、今回は先輩が多いから気遣うわ～...」

「本当に豪華ですよ～表の仕事では実現しませんよ～！」

アスカと合流したのは、歌劇団の後輩のユリカであった。

彼女は入団当時から注目を浴びて、名だたるスターが居る中でキャリアを積んでいき、実力ある舞台人に成長している。そして、入団十年目にして配置換えとなり、トップに就任したばかりのアスカと共に新境地を開こうとしていた。彼女たちは同じ九州出身のため気が合い、すぐに打ち解けた。裏稼業でもアスカの良きパートナーを務めていて、頼れる鉄壁を誇っていた。

今回、彼女はアスカと別グループに分かれて、自ら主演を務める公演を終えた後に博多に直行した。

「皆の協力もあって、成果が試される時が来たわね、それじゃあ、行きますか〜」

アスカとユリカは、気合を入れて得物を構えながら標的が居るフロアへと向かおうとした。

ところで、アスカたち歌劇団の捜査対象である暴力団の取引相手についてだが、名は門倉栄一（43）。彼は元暴力団であるが、特殊な経歴を持っていた。

まず、門倉栄一というのは偽名で、本名は佐山透。偽名で名乗っているのには理由があった。彼は高校卒業後、地元を拠点にしている小さな暴力団事務所で下っ端組員として働いていたが、何故かその期間は短く、当時属していた組を脱退した。

これで門倉（佐山）は裏の世界から手を引いたと思われたが、彼はいつの間にか別の暴力団組織に属していたのであった。門倉（佐山）は、少々変わり者ではあるが、組長や幹部に気に入られる存在であった。ところが、それが地獄の引き金になろうとしていた。ある日、彼は所属している組の軍資金を全額盗み取り、さらには組の重要な情報を盗んでい。組員たちが気づいた時はもう遅く、彼は行方をくらましていた。ここからが門倉（佐山）の野望の序章であった。

それから門倉（佐山）は、全国各地に存在する暴力団組織を転々として、所属している組の極秘情報を敵対関係にある組や警察、週刊誌の記者に売りさばっていた。その結果、抗争に巻き込まれていき、壊滅した組も少なくなかった。当然のことながら、門倉（佐山）は裏切った組から命を狙われる立場になるわけだが、彼はかなりの切れ者で、整形で顔を変えて、名前や経歴を偽ることで一切足取りを掴むことは出来なかった。彼は持ち前の頭脳で危機を潜り抜けていき、三十歳の時、暴力団の世界から抜けようとした。だが、堅気の仕事に就くことは考えておらず、今までの経験を活かして、裏の世界に詳しい情報屋やライターに転職したのであった。

アスカたち歌劇団部隊は、門倉（佐山）を長年マークしており、入念な捜査とタレこみで、福岡に潜伏している情報を入手して、本業の公演を兼ねて、門倉（佐山）を確保しようと考えていた。

アスカはエレベーター内で気持ちを落ち着かせて、ユリカと共に事務所へ突入しようとしていた。

「...ガン...ガガン...バガン！！！」

アスカたちは閉められた事務所の扉を強引に開けて強行突入した。

「.....な...何だ？何事だ...？敵襲か！？」

組員たちはアスカの奇襲で動揺が隠せない中、門倉（佐山）はいち早く危険を察してその場から逃げようとしていた。しかし、手遅れ状態で組員たちと一緒に包囲されることとなった。

「...仕事中に悪いね、ノックなしでお邪魔させてもらったよ～」

アスカたちは、銃を構えながら組員たちに挨拶した。

「...どういうつもりだ、お嬢ちゃんたち？もし、その突きつけているのが玩具なら承知しないぞ...ああ？」

組員の一人が前に出て、アスカたちに刃向おうとするが、彼女たちは顔色一つ変えなかった。

「...ドン...ドン...ドン.....！！」

その時、アスカは刃向う組員に向けて銃を発砲したが、それは威嚇射撃で足元を狙って、彼に醜いダンスを踊らせた。

「.....うちの無能な部下が失礼なことをした...わしの顔に免じて許してやってくれないか？」

「...あんた、組長さん？」

「ああ、そうだ、用件を訊きたい、お前さんたちは...警察...には見えないが、何者だ？」

「...詳しいことは言えないけど、やばい事件ばかりを扱っていてね...用があるのは、あんたたちではなく、その男よ...！」

門倉（佐山）は、アスカに指を差されて怖気づいた。

「彼が何しに来たか分かっているわ...情報屋でしょ？ワケありの...あんたの組は密かに関西進出を目論んでいるんでしょ...それで彼から関西を拠点にしている組の情報を提供してもらおうとし

ていた...」

「その通りだ...今の時代、情報が武器になるんでね...悪いが、彼を譲るわけにはいかないな...そちらで調査済みの取引がまだ済んでないんだよ...お引き取り願おうか...」

「...断ればどうなる？」

「言わなくても分かるだろう？二人のか弱い女性を相手に乱暴な真似はしたくないが...」

「.....二人じゃなかったら、相手をしてくれるの？」

「...何だと？」

「...ドシャン！！」

その時、事務所内の通気口のカバーが勢いよく外れて、突如、二つの影が姿を現した。その正体はアスカたちと同じく、秘密警察に属した歌劇団員であった。

一人目の名はマミコ。アスカより一年先輩の歌劇団トップスター。アスカと同じ九州出身で若手の頃から交流があった。本業の舞台では、小柄ながら迫力あるダンスと情熱的な演技、個性的なパフォーマンスを売りにして、ファンを魅了している。裏の世界では主に危険区域の潜入を任されて変装を得意としている。

二人目の名はヒコト。本業の舞台では自然体な表現力で注目を浴びて、実力ある中堅スターとして地道に活躍の場を続けて同班のマミコをサポートしていた。しかし、そんな中、彼女の本年で退団することが決まり、ファンに惜しまれつつ、歌劇団の世界から去って行った。退団後の活動は未定だが、裏稼業の密偵活動は継続して行っている。

組員たちは、マミコたちの突然の登場で精神状態が荒れていき、組長の許可が出たことでアスカたちを始末しようとしていた。

「...わしの事務所で好き勝手な真似はさせん！！全員殺せ！！」

「ドド...ドドン...ドババ...ドド...ド...！」

事務所内で銃撃戦が始まり、アスカたちは捜査を妨害する組員の相手をする事となった。

「...ガキン...ガガガ...キン...ガキ...ン！」

マミコとヒコトは、愛刀で迫りくる銃弾を弾いていき、峰打ちで次々と組員を倒して行った。

「...邪魔者は私たちに任せて、早く彼を捕らえて！」

「了解！」

アスカはマミコの指示に従って、門倉（佐山）を確保しようとした。しかし、彼の姿は見当たらず、どさくさに紛れて銃弾の雨が降り注ぐ事務所から脱出していた。

「...！！...逃がさないわよ！」

アスカはすぐに事務所を出て、エレベーターホールで門倉（佐山）を発見した。彼女はすぐさま門倉（佐山）に銃を向けた。

「...チャキ」

「...！！」

その時、予期せぬ事態が起きた。門倉（佐山）は銃を所持しており、容赦なくアスカに発砲、連射した。

「...そっちがその気ならこっちだって！」

アスカは条件反射で門倉（佐山）に発砲した。（使用している銃弾は特性麻酔弾）しばらくエレベーターホールで銃撃戦が続こうとしたが、突如、アスカに異変が起こった。

「...カシュ」

アスカの銃は撃っている途中、ジャムる（弾詰まり）トラブルが起こり、その隙に門倉（佐山）は非常階段を降りて外に逃げようとした。

「...ちっ、こんな時に...最近多いな...手入れはちゃんとしているのに全く...！」

アスカは調子の悪い愛銃に苛立ち、一丁を放り捨てた。そして、彼女はもう一丁の愛銃に弾を装填して、門倉（佐山）の追跡を続けた。

「私から逃げられると思うなよ...」

アスカはそう言って走りながら自分のスマートフォンを取り出した。画面には地図が表示されていて、点滅している部分があった。実は、アスカが門倉（佐山）に指を差した時、同時に小型発信器を弾き飛ばしていたのであった。彼女は仕掛けた発信器を頼りに門倉（佐山）の行方を追った。

博多 飲食屋台街。

夜も更けていき、福岡の夜は静まることなく、仕事の疲れを癒す者たちと観光客で溢れて盛り上がっていた。夜の街に転々と並ぶ屋台は福岡の名物でテレビやネットで多く取り上げられて、地元だけでなく遠方の人々も美味しい物を口にしようと訪れていた。

そんな屋台でお酒を飲んで自慢の料理を食べたりすることは、とても風情が感じられることだが、じき、その場は殺伐とした空間に変わろうとしていた。

「.....はあ.....はあ...」

門倉（佐山）は、息を切らしながら多くの人で賑わう屋台街を通っていた。

「...きゃ...わっ...！」

門倉（佐山）は後方をちらちら見ながら走り、周りの人とぶつかっても気にも留めず、ひたすら走っていた。彼はアスカのことを気にしており、追いつかれそうになっていた。

「...くそ！」

もう逃げ切れないと悟った門倉（佐山）は、急に走る速度を落として、近くの屋台に歩み寄った。

「ドン...ドンドン...ドン.....ドドド...ン」

追い詰められた門倉（佐山）は、自棄を起こして、辺り構わず乱射した。

「うわあああああああああ！.....」

門倉（佐山）の暴走により、屋台街一帯は錯乱状態となり、アスカは逃げ惑う人々に妨害されて、なかなか前に進めなかった。

「...きゃー！！！！」

門倉（佐山）は、一人の女性客を捕らえて人質にしようとしていた。

「...あんた、ほんと往生際が悪いね」

アスカは、人質を取った門倉（佐山）の前に立ち、呆れた表情を浮かべていた。

「.....そ...それ以上、近づくな、この女を死なせたくなければな.....」

門倉（佐山）の体は異常なほど震えており、アスカが思った以上に切羽詰まっているのが窺えた。

「人質取って逃げる手を考えるなんて時代遅れだよ...逃げられる確率は極めて低い...重ねて罪を犯すな！」

「...五月蠅い！何故捕まらなければいけない！？もう俺は組の人間じゃないんだぞ！今、事務所に居る連中が捕まるべきだろう！！」

門倉（佐山）はアスカに喚いて人質を放そうとしなかった。

「.....確かに暴力団は悪い連中だけど、今のあんたはさらに質が悪い...あんたが原因で多くの組員が儂く散ったわ...警察や一般市民だって巻き込まれた...あんた一人のせいで大きな犠牲を払ったのよ...それを自覚しているの？」

「...そんなこと知るか、俺のお陰で暴力団組織が減ってきているんだぞ...逆に褒めてほしいくらいだ...！」

「.....やはりクズはクズか...」

アスカは門倉（佐山）に呆れ果てて、躊躇いなく銃を向けた。

「...おい！この女が見えないのか？」

門倉（佐山）、アスカは引き金を引こうとした。

「...ドン！」

アスカが撃った弾は、人質の女性に少しも掠ることなく、門倉（佐山）の足に命中した。

「...ぐわあああああああ！！！」

門倉（佐山）は、銃弾を受けた足を押さえてもがき苦しんでいた。

「さあ、もう安心だよ、よく頑張ったね」

「...あ...ありがとうございます.....！」

アスカは、門倉（佐山）から解放された女性を優しく抱き抱えて安心させた。こうして、屋台街はいつもの平和な夜に戻ろうとしていた。

「.....！！！」

しかし、悪夢は終わろうとしなかった。撃たれた門倉（佐山）にはまだ意識があり、戦意を失っておらず、力を振り絞って銃を手にして、隙だらけのアスカたちに照準を合わせた。

「.....はっ！」

アスカは、門倉（佐山）の殺気に気づきだして、すかさず人質を庇って銃を撃とうとした。

「...ペキ！」

その時、妙な音がアスカに伝わり、銃を確認すると、引き金の部分が破損していた。普段二丁の銃を装備している彼女だが、もう一丁も調子が悪く、事務所での交戦中、つい苛立って放り捨ててしまっていた。

アスカは予期せぬアクシデントに見舞われ、窮地に追い込まれていた。時間は遡ることが出来ず、彼女はただ運命を待つしかなかった。

「.....ドドン！！！」

その時、銃声が鳴り響き、アスカたちは門倉（佐山）に撃たれたと思われたが、予想外のことが起こっていた。確認するとアスカと女性客に弾は命中せず、門倉（佐山）は銃を弾かれて、アスカの撃った麻酔弾で力尽きて眠っていた。

「ふー助かった～」

アスカの背後を見ると、人影があり、それはユリカであった。彼女は先輩の危機的状況を目撃して、咄嗟に得物のデザートイーグルを抜いて、門倉（佐山）の銃を弾いた。アスカは間一髪で後輩に救われたのであった。

「...これ、忘れ物ですよ」

ユリカはそう言って、アスカに不調のグロック18Cを渡した。

「...今日は厄日かな？本業の方は調子良かったんだけど...」

「やっぱり疲れてるんじゃないですか？ホテルに戻ったらゆっくり休んで下さいね～」

アスカは、ユリカの言葉に対して溜め息をついた。屋台街はアスカたちが現れたことで人だかりができて、警官隊や報道陣が駆けつけたりして騒々しくなっていた。アスカたちは警察やマスコミとの接触を避けるため、すぐさまその場から去って行った。

二三時 博多某高級ホテル内バー

アスカは、門倉（佐山）確保に協力した仲間と楽しく酒を飲んでいた。

「やっと終わった～今日は長い一日だったな～」

「あんたたちは偉いよ～二足の草鞋履いて頑張っているんだから～」

アスカに話し掛けているのは歌劇団OGのトモミであった。彼女は歌劇団に在籍した時、舞台映える個性的なスターとして人気を博していた。アスカとは同郷の仲で、歌劇団在籍中、二人で九州のイベントに参加した経験がある。ちなみにトモミはアスカの一年先輩で、トモミが歌劇団に入団したことがきっかけで、アスカが歌劇団に入団することを決めたのであった。また、マミコとは同期で同じ班に所属して退団した。（ヒコトも同班）裏稼業では本業の演技力が活かされて、完璧な変装で密偵活動を行っていた。退団後も裏世界に通じる仕事を続けており、今回はアスカに協力して標的と接触する暴力団の情報を集めようと組員に扮していた。

「トモミさんだって最近まで経験されてたじゃないですか～」

「何かかなり昔のことのようと思うね～今の方が結構楽だわ～嚴重な檻から脱出出来たって感じ～♪ヒコトちゃんもそう思わない？」

「...へ？私辞めたばっかなんでよく分かりませんが～」

ヒコトはアスカたちの会話をよく聞いておらず、眠たそうな表情を浮かべていた。彼女は普段しっかりしているようで、たまにマイペースな一面を見せることがあって、それがチャームポイントでもあった。

「...まあまあ、これだけ現役、OG関係なく、九州出身の歌劇団スターが集まることはないんだから、それに九州出身の歌劇団のネットワークを利用したことで大きな事件を解決出来たわけだし...祝いの乾杯しようよ～」

「...さっきから何回もやってるよ、あんたとは付き合い長いけど、いつまでもテンション高いよね～」

トモミは、同期のマミコを呆れた表情で見ている。

「んなことないよ～私は夜行性だからね～朝が辛くて辛くて～」

「同郷の先輩方と一緒に仕事が出来て光栄に思います、私と地元が一緒の歌劇団理事も皆さんに会いたいと嘆いていました...」

ユリカは目を輝かせながら、先輩のグラスにワインを注いでいった。

「...理事が来ると気を遣って変な空気になりそうだけど...」

同郷メンバー四人はアスカの発言にそっと頷いた。

「理事は、四月に起きた九州地震災害のチャリティーイベントに参加しているようです...」

先輩の同郷メンバーは、ユリカの意味深な発言で表情を曇らせた。

「.....あの時は本当に驚いたわ...私はその時、関西の自宅に居たけど...地震速報が何度も流れて...皆、家族や友達と連絡取れました？」

アスカは重い口調で同郷メンバーに訊ねて、まず、ユリカが口を開いた。

「家族はどうか無事で、地元の友人とようやく連絡が取れまして、自分の公演が終わって休暇が取れたので久々に里帰りするつもりです...」

「...そうなんだ、帰って元気づけてあげな」

次にヒコトが口を開いた。

「...私の地元もかなり被害でして、災害支援チームに参加しようと思います...」

「.....私たち、テロや犯罪、人災を阻止することは出来ないからね...自然災害の前では無力ね...」

マミコが嘆き、周りの同郷メンバーも彼女の言葉に同意して考えさせられた。ただ、アスカは少し気持ちが違っていた。

「...確かに自然災害に対して無力かもしれませんが、そんな私たちにももう一つの顔があります...舞台に立ち、不幸に見舞われた人を一人でも多く感動させる力があるじゃないですか...！」

アスカは前向きな言葉を発して、その場の重い空気を消し去ろうとした。彼女の言葉に心打たれた同郷メンバーは、自信を取り戻して凛々しい表情を浮かべた。

「...アスカの言う通りね、珍しく弱気になってしまったわ...私たちにも出来ることがあるわ...！」

マミコはアスカとがっちり手を握り合い、他のメンバーも二人の手に重ねて行って、絆を深めていった。そして、貴重な時間は流れていき、別れの時が近づいていた。

「...このまま楽しく飲んでいたいけど、明日早いでそろそろ失礼するよ～来月のツアーの打ち合わせがあつてね...」

マミコは同郷メンバーに一礼して店を出ようとした。

「私も明日、ここの公演があるから、そろそろ寝ないといけないわ～」

「ではこれで同郷祝賀会は終了ということで...お疲れ様でした～」

同郷メンバーは、名残惜しそうな表情を浮かべて解散していった。

アスカにはまだ本業の仕事が残っているため、しばらく福岡で過ごすこととなった。アスカ率いる班は博多座という劇場で公演を行っている。その劇場は、入り口の真っ赤な大提灯が特徴で主に歌舞伎の公演に利用されているが、多彩な舞台演目にも対応、ホールがリニューアルオープンされたことで、より快適に観劇することが可能となった。

アスカはそんな熱い劇場で奮闘しており、心を休める時はなかった。

ミッション1 先代からの進物

二〇一六年六月某日。アスカは主演を務める地方公演を無事に終えて、東京に戻っていた。秘密警察に属する歌劇団の住家は全国各地にあり、アスカは都内に位置する高級マンションで休暇を過ごしていた。ただ、本業の舞台の仕事が休みの間、副業である密偵の仕事に取り掛からなくてはならないので、彼女に息つく暇がなかった。

アスカの住居は天井が高いメゾネットタイプで、一人だけで住むには勿体ない広さである。内装はシンプルかつ大人の空間となっていて、部屋の至る場所には、優しい色（白、茶、ベージュ系）のインテリアが飾られている。（玄関には趣味で集めているリゾート地の雑貨が置かれている）リビングはウッドスタイルで大人向けとなっていて、家具なども茶系で統一している。アスカのお気に入り、買ったばかりのダークブラウンのL字型ソファとガラス円卓で、彼女は休日の時、そのスペースでほぼ生活していた。彼女の部屋は汚いわけではないが、物が溢れていて、仕事の忙しさあまり片づけられないのが悩みの種であった。理想は部屋全体をお洒落なカフェ風に表現することであった。

アスカは朝早く起きて、シャワーを浴びて気を引き締めていた。

「いただきま〜す♪」

アスカの朝食はご飯、味噌汁（祖母直伝）、卵焼き、焼き魚等、典型的な日本のメニューであった。彼女は豪快に食べていき、朝食を済ませて、出勤の準備をした。彼女のクローゼットにはメンズスーツやジャケットが収納されており、そこからスーツ一式、ライトグレースーツを取り出して、完璧に着こなしていた。それから必要な備品を適当に身につけていくが、長年愛用している銃を見ると、アスカの表情が少々曇った。愛銃であるグロック18Cは、一ヶ月前の博多での任務で不調を訴えてあまり活躍出来ずにいた。

「.....はあ」

アスカは深く溜め息をついた後、スランプ気味の愛銃を収めて家を出ようとした。

「...ブオオオオ...ンン！」

アスカは愛車のアウディR8（V10 Coupe 5.2 FSI quattro）のエンジンを掛けて、颯爽とマンション駐車場から出て、うっとうしい雨が降る中、職場へと直行した。彼女が向かう場所は、都内ビジネス街であった。

アスカの車は雑居ビルの地下駐車場へと入っていき、彼女は厳重なセキュリティーを通過していった。そこには秘密警察が所有しているオフィスフロアがあった。

「綺麗なオフィスだな～」

アスカは、出来たばかりの職場に派遣されて胸を躍らせていた。メインとなる大部屋には、スーツを着た男女がせっせとパソコンやデジタル機器で仕事をこなしていき、何処にでもある一般的な会社の光景が広がっていた。

「.....私はどうすればいいの？」

アスカは、馴染の無い場所で一人ぽつんと立っていた。

「.....あの...すみません」

アスカは周りの者に声を掛けようにも、無視されていき途方に暮れていた。

「.....あれ？アスカじゃないの...」

その時、殺伐とした環境で困り果てたアスカに救いの声が届いた。

「.....あんた、まさか...アカネ...？」

アスカの前に現れたのは顔見知りの女性であった。

名はアカネ。学生時代、音楽関係の部活に所属しており、自然と歌劇団の世界に溶け込むこととなった。アスカとは同期で歌劇団入団前から親しい仲であった。彼女は主に大人の女性を演じていき、数年でヒロインの座へ就き、華々しく退団した。裏稼業では現場経験がなく、デスクワーク、オペレーターを務めて労働担当であるエージェントのサポートに回っていた。現在は結婚して女優業を続けて、裏稼業を再開しようとしていた。

「...そういえば今日だったわね、あなたが派遣されるのって...歓迎するわよ...ってこの状況じゃ説得力ないけど...悪いわね、新しい仕事場だから何かとバタバタしているのよ～気にしないで～」

「...あっうん、それにしても久しぶりね、アカネちゃんはここで何を？」

「...副業を再開してね、ここで捜査情報の分析や捜査員のスケジュールの管理をしているのよ、この中を簡単に案内するわ」

「ありがとう、助かるわ」

アスカはほっとして、アカネについて行った。

「...責任者に会わせたいけど、生憎、外出中でね...出張は多いからあまり顔を合わせることはない...私が責任者のだいをやってるのよ～」

「そうなの、大変だね...」

アスカは、アカネに一つの部屋へと案内された。

「あなたに紹介したい人が居るの、さあ中に入って...」

「はいはい...」

アスカはそう言われて部屋へと入るが、そこはつい口が開く空間であった。室内は思った以上に奥行きがあり、至る場所に近未来的な機材が設置されていて、電子音がかすかに耳に残った。この場所は何かの開発スペースのようであった。

「お～い、連れて来たよ～」

アカネは、奥で作業している一人の女性に声を掛けた。

「あら、お早うさん～久しぶりやね～」

アカネに声を掛けられた女性は、ほんなりした関西弁で挨拶をした。

「あっ！」

アスカたちの前に現れた白衣が似合う女性は、またもや顔見知りであった。

名はセシル。所属していた歌劇団では、地道に経験を積んで実力をつけていく一方、クールな青年、包容力がある男性などを演じてきた彼女に転機が訪れて、安定期に何故か準ヒロイン役に徹することとなった。これは異例のことで、それを機に芸の幅が広がって再び注目を浴びることとなった。セシルは力を出し尽くし、一年後輩のヒコトと共に歌劇団を退団した。裏稼業では敵地の潜入捜査を任せられ、変装のレパートリーは好青年から妖艶な美女までと豊富で、本業が大いに活かされている。今後の表稼業の予定は未定であるが、裏稼業は継続となり、現在は現場から離れて、秘密警察の備品管理開発係を担当している。兵庫県出身。性格は陽気でマイペース。趣

味はお茶を飲みながらお喋り。

「一応紹介するわね、秘密警察の備品を扱っているセシル博士よ」

「博士って柄じゃないけど、よろしくね～」

「つい先月、ヒコトと退団したって聞いたけど...あんたも裏稼業を続けているのね」

「そうや～現場担当は余るほど居るからね～デスクワークに興味あったし、丁度良かったわ～ここには役に立つ物が揃ってるで～何でも言うてや～」

セシルがそう言うと、アスカは救いの手を求めようと口を開いた。

「...武器のオーバーホールを任せられる？」

「...大丈夫やで、専門やから...」

アスカは、セシルの応答で表情が和らいでいき、机上に愛用している銃二丁を置いた。

「.....この子たち、最近調子が悪くてね、診察してほしいの...」

「ええで、今日中に結果を出すわ、その間、丸腰になるけど...落ち着かへんやろ？」

「代用出来る物ある？」

アスカがそう訊ねると、セシルは得意げな表情を浮かべながら近くの武器庫から一丁の銃を取り出した。

「これはどうやろ？使いやすいと思うけど...」

「どれどれ...」

「シグサウアーP226...長時間、水や泥に浸けた状態でも確実に作動するほど耐久性が高いのが評判で海上自衛隊や各国の軍隊、特殊部隊、警察機関が使用している優れものやで～」

「...成程、なかなかいいわね～」

アスカは、代用銃を気に入った様子で早速手に取って構えだした。

「実戦向けやし、たまには別の男に乗り替わるのもいいやろ～」

「何、その言い方～？」

アスカはセシルの冗談でつい笑みがこぼれていた。アカネもつい釣られて笑っていた。

「...もう一丁用意した方が良くないかな？」

「一丁だけでいいよ、今日は特に仕事はないし...そうでしょ？」

「ええ、今日は初日だから挨拶回りがメインよ、そろそろ行きましょうか？」

アスカは、案内役のアカネと共にセシルの仕事場を後にしようとした。

「それじゃあ、またね～」

「うん、またお茶しようね～」

アスカはセシルと別れて、メインの仕事場に戻った。

「...ここがあなたのデスクよ、丁度、一人転勤になってね、片づけてあるから好きに使って～」

アスカは専用の椅子に座ろうとするが、どうも落ち着かない様子で苦笑いを浮かべていた。

「...やっぱり駄目だな～こういう環境慣れていないから...現場の方が楽だわ～」

「まあ、じきに慣れるでしょう～...見学は終わりにして、次に移りましょうか...」

「次って？」

「あなたに渡したい物があるの...」

アカネは、一変して真剣な表情でアスカをある場所に連れて行こうとした。その場所は保管庫のようであった。室内はいくつも金庫が並べられており、アカネはその中の一つの金庫の鍵を開けようとした。開けた金庫の中には三つ折りにしたA4の用紙が入る長方形の封筒が一封あった

。アカネはその封筒をアスカに渡そうとした。

「...これは何？」

「あなたにとって大事な物...そうなるはずよ...」

アスカは、謎の封筒とアカネから意味深な一言を受け取り、誰も居ない個室にうつることとなった。アカネはアスカに自慢のコーヒーを勧めて本題に入ろうとした。

「...封を開けてもいいの？」

「ええ、どうぞ...あなたしか開けられないものだから...」

謎の封筒の中身を確認しようとする、一通に手紙と一つのUSBメモリーが入っていた。

「...私宛に手紙？」

アスカはまず花柄の可愛らしい手紙が気になり、差出人を確認しようとした。すると、彼女の表情が一変した。

「.....その手紙とUSBは、うちで十ヶ月ほど保管していてね...やっとあなたに渡すことが出来たわけよ...」

「...そうだったんだ...」

「...後任のトップスターとなったあなたへの最後の贈り物よ...」

アスカに手紙を送ったのは、彼女の先輩であり、先代のトップスターであるリカであった。

「.....」

その時、先輩からのサプライズでアスカは歓喜すると思われたが、そういった素振りを見せず、アカネは彼女の反応に疑問を抱いていた。

「...どうしたの？嬉しくないの？」

「...いえ.....まあ嬉しいんだけど、実はさ～...退団された後に一度会ってるんだよね.....」

「...え？ そうなの...それはいつ...？」

「去年の夏くらいだったと思うけど...任務で潜入している時にばったり会っちゃって...何か...うちとは別の秘密組織に属しているみたいだった...」

「へえ...偶然って怖いわね...彼女、この贈り物のことを口にした？」

「いいえ、何も話されてないと思うけど...合同捜査になってばたばたしていたし...」

「...そう、何か渡すタイミングが悪かったみたいね...」

「え？ 別にいいのよ、私もトップになってから忙しかったんでね...裏稼業だって必死だったし、私たちらしくていいわ...はは」

アスカは、落ち込むアカネをどうにか励まそうとした。

「...感動は薄れたかもしれないけど...一応読んでみたら...？」

「そうね...でも一人になった時にじっくりと読むことにするわ...それに気になるのがもう一つあるし...」

アスカは封筒に入っていたUSBを手にして、思い詰めた表情を浮かべた。

「何が保存してあるか見てみる？」

アスカは軽く頷き、アカネは専用のパソコンにUSBを挿入した。

「これって.....」

USBを調べると、膨大な量のデータが保存されており、いくつかのフォルダに分けられていた。フォルダ名は`担当事件`、`指示`、`おまけ`。

「...凄いわね、リカさんが解決させた事件、捜査資料が事細かに載っているわ...」

「...ざっと目を通すと解決したものばかりではないわ...怪しいと思われる組織のことも調べ上げている...うちのデータベースにない情報もあるかも...」

アスカたちは「担当事件、フォルダに目を通して感心していた。」

「...でもどうしてこんな物を私に...？」

「.....確か秘密警察を退職した者は後任の捜査員に所有物を託す義務があるそうよ...歌劇団と同じく伝統が次の世代の人間に受け継がれるわけよ...」

「仕事に関する情報も分類されるわけね...犯罪者のリストは役に立ちそう...捕まっていない悪は大勢居るからね...」

「このデータは必ず役に立つわ、今後、裏の世界で生き抜くあなたの助けになることでしょう...」

「そのようね、情報が無くては何も出来ないからね...他のフォルダにも重要なことが...？」

アスカは次に「指示、フォルダを開こうとした。」

「これは...住所のようね...場所は横浜...ここに何が？」

「横浜は確かにカさんの地元よ...興味深いわね...！」

「指示だからそこに行けってことじゃないの？行ってきなよ...」

「え？いいの？」

「別に構わないわよ、さっきも言ったけど、今日は暇だから～」

「じゃあお言葉に甘えて行ってくるわ～」

「ただ夕刻までには戻って来てね、一人会っておかないといけない人物が訪ねてくるわ...」

「私に...？その人ってお偉いさん？」

「...上層部の人間じゃないわ、あなた今、パートナー居ないんでしょう？」

「ああ、そういえば昇進したことでコンビ解消になったのよ...そいつとはエリート気取りで気が合わなかったわ...そのうち新しい相棒を合わせると言ってたけど、今日だったのね、どんな人？」

」

「さあ...メールで連絡を取り合っているから私も顔を知らないの...会ってからの楽しみじゃないの？」

「素性を知らずに直接顔を合わせるのも悪くないかもね...今の時代らしいわ...」

「それじゃあ手筈通りに戻って来てね～」

アスカはリカに導かれ、横浜に向かおうとした。

横浜 新港ふ頭

新港ふ頭は横浜港のほぼ中心に位置し、舢舨（本船と波止場の間を行き来して乗客、貨物を運ぶ小舟）を利用せずに陸から船へ人や物資を積み込める横浜港初の近代的ふ頭として、明治後期から大正にかけて建設された。さらに再開発により、商業施設が充実しており、観光名所の一つである赤煉瓦倉庫は、映画やドラマの撮影でよく利用されている。

アスカの目的地はその近辺を示しており、彼女は一旦、愛車から降り、のんびりと歩いて探索しようとした。

「横浜か～ツアーで訪れたことあるけど、あまり詳しくないのよね～リカさんとは中華街に行っただけだし...」

土地勘のないアスカは、まるで道に迷う外国人観光客のようであった。記された住所とスマートフォンに表示された地図を頼りに歩いて行くと、彼女はヨットハーバーのエリアに辿り着いた。そこにはお洒落な店が建ち並び、アスカは休憩出来そうな店を選んで入ろうとした。

「あ～疲れた、なんか冷たいの飲もう～」

アスカは、`GALAXY、という米国の長閑な田舎町にありそうなカフェバー店に入ろうとした。

「カララン～♪」

店内を見渡すと、様々なお洒落なインテリアが置かれており、ジュークボックス スロットマシン、ピンボール、ダーツ、ビリヤードと、昔懐かしい物や大人が楽しめる物で溢れていた。

「いらっしゃいませ～...」

その時、客であるアスカと一人の店員の目が合った瞬間、妙な空気に包まれた。

「...あれ、もしかしてチヒロ？」

「え？アスカじゃないの...どうしたの？」

アスカが入店したカフェバーのマスターは、彼女と同期の元歌劇団の一人であった。

彼女の名はチヒロ。歌劇団時代、スレンダーな体格、安定したダンスで中堅実力派スターとして注目を浴びた。そのままスターの階段を駆け上がって行くが、急遽、自身の都合で退団を決意した。現在は舞台の仕事の続けながら裏稼業も継続して、地元である横浜でレトロなカフェバー `G A L A X Y` の経営者兼マスターを務めている。

「.....ちょっと野暮用でね...あんたなら話せるかな...」

「...まあ何か飲みなよ、暑くなってきたからね～冷たい方が良いでしょう？」

「そうね、アイスコーヒーお願い出来る？」

アスカの気持ちは高ぶり、カウンター席に座り込んで注文した。

「はいはい～かしこまりました～♪」

チヒロの蝶ネクタイ、ストライプベストは様になっており、歌劇団時代の名残があった。彼女は慣れた手つきでアスカに注文した物を差し出した。

「ありがとう.....そういえばチヒロもここ...横浜が地元だったね～」

「そうだよ、のんびりと暮らしてるけど...あんたは何しにここに？プライベートじゃなさそうだけど...裏の仕事？」

「裏の方なんだけど、どう言ったらいいのか...実はリカさんから贈り物を頂いたの」

「へえ～リカさんから何を頂いたの？」

「...トップ後任の私への励ましの手紙とこのUSB...指示書が保存されていて、横浜に来るように記されていたわけよ...リカさんも地元ここよね？」

「ええ、そうよ、歌劇団メンバーって横浜出身者多いからね...どれどれ...！」

チヒロはアスカのスマートフォン画面の地図に目が行き、表情を一変させた。

「どしたの？」

「いや...あんたの目指している場所、近所だなんて思って...」

「え？まじ...？場所知っているのね？丁度良かった～この辺詳しくないから迷っていたのよ～案内出来る？」

「...出来るけど」

チヒロは、アスカの願いにすぐ返事をしたが、どうも浮かない顔であった。

「.....カララン♪」

その時、新たな客が訪れたようであったが、どうも異様であった。そろそろと強面の男たちが入店していき、最後にサングラスを掛けた長身の男性の姿があった。

「予約した者だが...」

「...はい、奥の席へどうぞ～」

チヒロは、顔色一つ変えずに謎の団体客を迎え入れた。アスカの方は、突然のことで少々顔が強張っていた。

「.....席外した方が良いかな？」

「いいよ、すぐに済むから...待っててよ」

アスカは気を遣おうとするが、チヒロは彼女に意味深な言葉を言い残して、謎の団体客の対応をしようとした。

「いらっしゃいませ～ご注文はお決まりですか？」

「...そうだな、酒は飲めるか？」

「はい、アルコールの方ご用意出来ます」

「では麦酒が飲みたい、少しだけで構わんが...」

「かしまこりました、小さいサイズの瓶麦酒でよろしいでしょうか？」

「ああ、それで頼む、座っている者の分だけでいい...あんたも付き合うか？」

グループの代表らしき人物は、向かいの席に座っているサングラスを掛けた男性に注文について訊ねた。

「ええ、お付き合いしましょう...お願いします...」

「かしこまりました、ご用意しますので少々お待ち下さい...」

チヒロは冷静に接客をこなし、アスカが待つカウンターへと戻った。

「...ワケありの客ね？」

「ええ、これも仕事でね、帰らず待ってて」

アスカはチヒロに従って、これから起こる一部始終を大人しく捉えようとした。

「.....契約通り、高値で買ってくれるんだな？」

「...ええ、ちゃんと用意しています、振り込みはお嫌いでしたね...？」

「...ああ、うちはアナログの組織でね...直接現物を見ないと信用出来ないんだ...」

「...成程、では品を拝見させてもらいましょうか...」

謎の長身男性と謎の組織は、何やら怪しげな取引を始めようとした。アスカたちは何食わぬ顔で様子を窺っていた。

「.....これは新作でね、芸能界など多方面に出回っている代物だ...」

代表の男は、立っている部下たちに指示をして、机上有る物を並べさせた。それは白い粉が入ったポリ袋であった。

「...少量でも高価なんですよね？」

「ああ、入手困難だからね、問題ないか？」

「ええ、大丈夫です...二億ほど用意していますが...それでよろしいですか？」

「...充分だ、良い顧客に巡り合えた、ところで君はヤクをするのかね？」

「...いいえ、興味ないので...流通の方が専門なもので...」

「そうか、これをまた高値で売り捌くわけか...儲かっているか？」

「ええまあ、最近は政治家や若者の利用者が多くて...儲けさせてもらっています...」

謎の集団が行っているのは取引の内容は、麻薬の売買であった。強面軍団の正体は横浜を牛耳る暴力団で、長身の男性の正体は麻薬商人、闇のバイヤーであった。

「ではこちらの契約書にサインを.....！」

その時、代表である副組長がふと近づいて来る気配に気づいた。

「お待たせしました、ご注文されたです...」

チヒロは、自然と暴力団幹部に瓶麦酒を差し出した。

「...おお、そうだった、お祝いに乾杯しようじゃないか！」

暴力団幹部は、愉快地に瓶麦酒を手にして麻薬バイヤーと乾杯しようとした。

「.....」

その時、暴力団幹部はぐびぐびと飲んでいくが、麻薬バイヤーは飲んだ振りをしていた。彼は静かに何かを待ち望んでいるようであった。事態は大きく変化しようとしていた。

「.....ダダダダ！！！！」

その時、店内に大勢のスーツ姿の男たちが押し寄せて、麻薬の取引をしている者たちを包囲した。彼らは銃を構えていた。

「.....何だ？お前たちは！！？」

副組長は突然のことで錯乱状態となり、店内は騒然となっていた。

「.....ずっと追っていたのさ、あんたたち組織を...ようやく尻尾を掴んだ...逃げ場はない、観念しろ！」

店内に押し寄せたのは神奈川県警の麻薬捜査官であった。チーフを務める捜査官が覇気のある声で暴力団員を威嚇するが、その場に居た麻薬バイヤーは微動だにしていなかった。

「.....どうしてそんなに落ち着いてられる？」

組長が麻薬バイヤーの様子に疑問を抱く中、彼はゆっくりと席を立って、軽く笑みを浮かべた。

「.....悪いね、実は彼らと親しい仲でね」

麻薬バイヤーはそう言って、徐にサングラスを外した。

「え？」

その時、アスカの表情が一変して、どうやら麻薬バイヤーの顔に見覚えがあるようであった。

「どういうことだ？麻薬商人じゃないのか？」

「ええ、勿論よ、私はおたくらを一網打尽にするための餌よ...まんまと騙されたわね...お馬鹿さん」

麻薬バイヤーの正体は、囹捜査のために派遣された女性であった。

「...取引の内容は全て記録されている、証拠は揃っているからな...事務所の方にも捜査の手が回っているしな...表組長が青ざめているのが目に浮かぶ.....連行しろ」

副組長は気が動転して、抵抗しようと思わず、そのまま部下と共に連行されていった。

「ようやく片付いたわね...」

「ああ、君のような人が居て助かるよ、また頼むよ〜」

チーフは、囮となった女性に感謝の意を述べて、チヒロにも笑顔のまま手を振って店を後にした。

「ふ〜これで一件落着だね〜アスカちゃん、もうその物騒な物に触れなくて大丈夫よ〜」

「...え？ああ！...私ったらつい癖で...」

アスカは安堵の表情を浮かべて、使い慣れていない代用銃を納めた。

「.....あれ？珍しいお客さんね〜♪」

囮捜査に協力していた女性は、アスカの存在に気付いた。彼女は警察関係者ではなかった。

「...見事な変装ね、全然あんたって気づかなかったわ...」

忽然とアスカたちの前に姿を現したのは歌劇団OGのミサトであった。彼女は歌劇団時代、恵まれた容姿と心に染み渡る歌唱力を武器に中堅スターとして活躍しており、同期のアスカ、チヒロと共に歌劇団の一時代を気づいた。そして、結婚を理由に退団して、その後は芸能活動を続けながらフリーで裏稼業を行っている。

「昔とった杵柄よ、副業にも大いに活かせるわ〜」

「本当に今日は同窓会みたい、よく同期に会うわ〜」

「辞めた同期メンバーとはちよくちよく会うけどね〜今、辞めた方が多いんじゃない？」

ミサトがアスカの隣に座り、同期による座談会が始まろうとしていた。

「そうね～つい最近もセシルちゃんが辞めたし...今は同僚になっちゃって...アカネちゃんも...」

「ふーん、辞めても縁があるんだね～...ところで何でここに居るの？」

ミサトは注文したメロンソーダを口にした後、アスカに疑問を投げ掛けた。

「...えっと話せば長くなるんだけど、実はリカさんの指示で来たのよ...」

「へえ～リカさんか～今でも付き合いあるんだ～最後に会ったのは去年の冬くらいだったかな～ほら、都内でテロがあったでしょう...あの時、かなりの数の歌劇団員が参戦したよね...」

「...私はその後に一度会ってるのよ...裏稼業で偶然一緒になって...それつきりよ...実は彼女からの贈り物を受け取ってね...その中に指示書があって指示された場所に何かあるようなの...」

「...それでその目的地が近所なのよ、だから案内してあげようと思って...」

「何か面白そうね、私もついて行っていいかな？」

「いいけど...チヒロ、店の方はどうするの？」

「大丈夫よ、昼間はほとんど客来ないから...常連客は夜に来るのよ...戸締りしたら早速行きましようか～」

同期三人組は仲良く謎の目的地に向かおうとした。

前任トップスターであるリカが指示した場所は横浜港に近い旧倉庫エリアであった。その場所はほとんど機能しておらず、たまに貨物車が通り過ぎる程度であった。

同期三人組は、無人の倉庫エリアに足を踏み入れて、恐る恐る一つの倉庫で足を止めた。

「...ここに間違いはないわ、なんか怖いけど入ってみましようか...」

同期三人組は立入禁止となっている倉庫に入ろうとした。出入り口の鍵は壊れており、まるで歓迎されているようで彼女たちは奥へと進んだ。

「.....これって...！！」

中に入ると、同期三人組は驚愕することとなった。

「ただの廃墟かと思ったけど...違うようね」

チヒロの言った通り、倉庫の中は予想とは違う空間が広がっていた。埃を被っているが、高価な機材や家具が設置されて、同期三人組にとっては見慣れたものであった。

「...ここは秘密基地のようね、妙に落ち着くわ...アスカ...」

ミストは大体の意図を把握して、アスカの方をじっと見た。

「.....所有者の正体が分かったわ」

アスカはテーブルに置かれている一冊の本を手にとって、チヒロたちに語りかけた。彼女が手の取っている物は台本のものであった。

「...リカさんの隠れ家に間違いないわね」

同期三人組はリカの隠れ家だと気づき、自然と笑みをこぼした。

「...！」

その時、アスカはテーブルに張り紙があるのに気づき、記された内容に注目した。

「ここ、好きに使っていいよ リカ、

何ともシンプルなメモの内容だが、まさしくリカの筆跡であった。アスカたちはしばらく笑い続けることとなり、ようやくリカの指示の意味を読み取った。

「...回りくどいことする人だね、探偵になった気分だったよ...」

「でも良かったじゃん、今日からあんたの隠れ家だよ！...ちょっと掃除しないとイケないけどさ...」

「うん、それは良いんだけど...ずっと放ったらかしにしていた割には綺麗だと思わない？きちんと整頓されているし...まるでまだ使っているみたい...」

「...確かにそうね、他の誰かが使っていても不思議じゃないね...」

「...ちょっと気味の悪いこと言わないで変なこと想像しちゃうよ...！」

ミサトは周りを見渡して、体を震わせていた。アスカたちはそんな彼女の姿を見て無邪気に笑っていた。そして、同期三人組は興味深く隠れ家の至る場所を物色した。

「...リカさん主演作の台本がいっぱい...全てコピーした物ね...多分、副業の最中もここで熱心に台詞を覚えていたのね...」

アスカは印だらけの台本を目にして、リカが台詞を覚えている光景を想像した。

「あれ？ちょっと～！」

チヒロはあることに気づき、アスカを呼び出した。

「どうしたの？」

「...ほら、ここ、また何かのメモが貼ってあるよ」

チヒロの言った通り、一つの収納棚に眼者が貼られていて、それにはこう書かれていた。

「アスカ君以外開けてはダメ！」

「...注意書きみたいね、開けてみなよ」

「...うん」

アスカは、不安げな表情で問題の棚の中を調べようとした。すると、中には手頃なサイズの黒い箱が置かれていた。

「...中身は何だろう？リカさんのお気に入りのアクセサリーとか？」

「そんな物、置いて行かないでしょう～」

興奮しているチヒロに対し、アスカは冷めており、彼女はそっと謎の箱を開けようとした。

「...！！」

アスカたちは箱の中身を確認して、思わず呆気にとられた表情を浮かべた。箱の中には銃一丁が入っていた。

「この箱...ガンケースだったのね...この銃はリカさんの...」

「...そう、私も彼女に勧められてグロックを使うことにしたの...でも確かりカさんの愛用銃は26だったはず...これはひと回り大きい17ね...」

「...色んなシリーズ集めていたんじゃないの？」

アスカはリカが使用していた銃に触れようとするが、ある異変に気付いた。

「.....何これ？重い...！」

アスカは、予想以上の重さの銃を手にとって驚愕していた。

「...あれ？銃の他に何か入ってるよ...」

チヒロは箱の中にある紙切れに気づき、アスカと一緒に確認しようとした。それはまたメモのようであった。

「その銃は私が新人の頃に使っていた銃よ、少しじゃじゃ馬だけど、アスカ君なら使いこなせるでしょう、大事にしてね、」

「...そうか、新人時代に...これは貴重な代物ね...ありがたく頂戴しよう~♪」

「.....ちょっと~こっち来て~！！」

ミサトの声が奥の方からして、アスカたちは彼女が呼んでいる場所へと急いで向かった。そこは格納庫のようであった。

「ミサト~どうしたの？」

ミサトが指差す先には、数台の高級車がずらりと並んでいた。

「ここにある車全部、リカさんの愛車よね？」

「...ええ、裏稼業ではアルファロメオによく乗っていたけど...プライベートではフェラーリやポルシェにも乗られてたのね」

「愛車まで放置しておくとはね...まさかこれ全部、あんたに譲る気かな？」

「...そのようね」

チヒロの予感は的中したようで、格納庫の壁にまたリカのメモが貼られていた。

「いいな～あんた、車やドライブ好きだもんね～確か国内のA級ライセンス持っていたよね？」

「うん、レーサーに憧れていた時あったから」

「素晴らしい贈り物ね、私たちも来て良かったわ～折角だから一台試乗してみない？」

「...何言ってるの？もう二年近く放置しているのよ、ちゃんと動くわけが...」

アスカはチヒロの突拍子もない発言を呆れて聞いていたが、予想外のことが起ころうとしていた。

「.....ブオオン...ブオ...ン...！」

その時、美しい白のフェラーリ・カリフォルニアのエンジン音が鳴り響き、アスカとチヒロは啞然とした。エンジンを掛けたのはミサトであった。

「...あんた、何やってんの？」

「...ごめん、ごめん、この車のドアが開いてたもんで...つい乗り込んじゃって...キーもあったから試しにエンジンが掛けちゃった...」

「...車、問題ないみたいね、燃料は？」

「満タンよ、ちゃんと走れるんじゃない？」

アスカは、同期二人の誘いに乗って運転席に座ろうとした。

「...！！」

アスカは運転席に座った瞬間、違和感を覚えるが、同期二人に悟られないよう振る舞った。彼女は気持ちを切り替えて車を発進させようとした。

「...ところで何処行こうか？私、道詳しくないもんだから...」

「私、地元だから案内するよ、中華街でご飯食べよ～」

チヒロは道案内するために助手席に座り、ミサトは後部座席に座って出発の準備が整った。同期三人組は、先輩の愛車で横浜の観光名所をドライブしようとした。

アスカはしばらくの時間、過酷な生活から解放されて普通の女性の休日を過ごした。同期三人組が乗車しているフェラーリはオープンカーで、梅雨時期ではあるが、天候が回復して雨が止んだことから港町の爽やか風を浴びて、気持ちよくドライブすることが出来た。楽しい時間はあっという間に過ぎ、夕刻になろうとしていた。

「...おっと、もうこんな時間か～そろそろ戻らないと...人と会う約束があるのよ」

「私も店戻らないといけないわ...」

「それじゃあ今日はこれでお開きということで～...」

同期三人組は再会を誓い、しばしの別れを告げた。アスカはオーディに乗り換えて、急いで秘密警察オフィスに戻った。

アスカがオフィスに着いた頃、空は薄暗く、まだらな雨が降っており、フロアを歩くと昼間と違ってがらんとしていた。

「...お帰りなさい、アスカさん」

その時、アスカは見知らぬ女性に声を掛けられた。

「...あの...あなたは？」

「アカネ副部長の助手の者です、パートナーの方がお待ちなので案内します...」

「やっぱり遅刻か～...アカネはもう居ないの？」

「先ほど帰られました、なので代わりに私が対応しますので...」

アスカは、アカネの助手に新しい相棒が待っている場所まで先導された。

「...コンコン」

アスカは少々緊張しながら扉をノックして、ついに新しい相棒と対面することとなった。

ミッション2 未知なる攻防戦

新しい職場に派遣されたアスカは、尊敬する先輩からのサプライズを受けたり、親友と会ったことで満足していたが、まだすべきことが残っていた。それは新たな相棒と対面することであった。彼女は珍しく緊張しており、相棒が待つ部屋の扉が重く感じてぎごちなかった。

「.....すみません、お待たせしました...！」

アスカはまず、遅れたことをお詫びして、待っていた相棒に深々と頭を下げた。しかし、彼女はそこで予想外の展開に遭遇することとなった。

「.....」

部屋に居たのは、眼鏡を掛けた大人しそうな青年で、彼はアスカを無視して、黙々とノートパソコンの操作をしていた。

「...あの、もし？」

アスカは目の前に座っている相棒らしき青年にそっと声を掛けた。

「.....あっどうも」

相棒らしき青年はアスカに愛想の無い挨拶をした。

「.....あなたが私の新しい相棒なの？」

「ええ...まあそうですけど.....」

「...ごめんなさい...何かイメージしていた人と違うから...」

「...どういったパートナーを想像していたんですか？」

「...そうね、もっとう紳士的なおじさんとか屈強な男の人とか...」

「...勝手な想像はしない方が良いでしょう、これでも警視庁の刑事なんですけどね...」

「...ああ、そうなんだ...ちょっとお聞きしたんですけど...あなたの年齢は...？」

「二十五ですけど...」

「...そう、やっぱり年下なのね.....あっ一応自己紹介しておきましょうか...私の名は〇〇アスカ...よろしくね...」

「僕の名は剣崎ツトムです、よろしくお願いします...」

秘密警察に属している歌劇団員は数年在籍すると、捜査員の一人が相棒に就き、協力して捜査することとなる。歌劇団員の相棒は裏の相方と呼ばれ、主に情報提供や裏稼業のスケジュール管理を任せられるため、マネージャーの役割も果たしている。（歌劇団員同士で捜査することもあり、力量や歌劇団側と警察組織側の都合で捜査体制は変化する）

剣崎は、アスカの二代目の相棒に就くこととなった。

剣崎は一旦、自己紹介をするが意外と背が高く、一八一センチあり、アスカは一七二センチあるため、見た目はバランスが取れたお似合いのコンビであった。

「...キャリアといっても、まだ新人のようだから分からないこと結構あるんじゃない？現場の経験は？」

「...現場に行ったことはありません、このパソコンやデジタル機器さえあれば、捜査が出来ますので...」

「.....ああ、うちの仲間にもパソコンとかに詳しいの居るけど...確かハッカーだっけ？相手の情報をこっそり盗み出すの...映画に出てくる悪党みたいな...」

その時、無愛想な剣崎の表情が一変して、何かアスカに言い返そうとしていた。

「言っておきますか、ハッカーは悪の象徴ではありません、映画なのではたまたまハッカーの人間が悪に扮しているだけで、本当は味方なんです！」

「へえ、そうなんだ...」

アスカは、剣崎の反論する姿に押され気味であった。

「そもそもハッカーというのは、コンピューターの仕組みやプログラムに精通した人物のことを

意味していて、いわばプログラマーのスペシャリストです、ちなみに悪意を持ってハッキングを行う者は「クラッカー」と言います...奴らは無断で他人のコンピュータからデータを盗み、仕上げに破壊します...」

「へえ～そうなのね、私、そういうことに疎いから...勉強になったわ～」

アスカは、年下の男性の前で小刻みに頷いて感心していた。

「あの...アスカさんの本業は歌劇団の劇団員ですよね？そこのトップスターをされているとか...」

「ええ、そうよ...観劇したことあるの？」

「...いいえ、特に関心がないもので...ネットニュースで関連の情報を目にするくらいです...」

「あっそう...」

二人の会話は全く弾まず、険悪な空気が漂いつつあった。

「...あの特に質問が無ければそろそろ失礼したいのですが...」

「ちょっと待って！まだ訊きたいことがあるわ...どうして私の相棒に？」

「...若いうちに色々と経験しておいた方が良く...ボスに言われました」

「...成程、やはり自分の意思で決めたんじゃないのね...現場経験がないとなると、銃をちゃんと撃った経験はない...ということね？」

「ええ、訓練は受けていますが、おっしゃる通り、実戦で撃ったことは一度もありません...」

「...基本、私は現場担当で、あなたは情報収集担当だけど、何が起きても不思議じゃない世界よ...もし、出世のことだけを考えると嫌々でやっているのならお勧め出来ないわ...」

「どれも理由に当てはまってないので、大丈夫ですよ、銃は練習します...時間がある時にご指導願います...それでは失礼します」

剣崎は淡々とアスカに返答して、颯爽とその場を去って行った。

「...やれやれ」

アスカは、取り残された部屋で深く溜め息をついて、疲れた表情を浮かべた。何はともわれ、彼女の内容が濃い一日はこれで幕を閉じようとした。

翌日、アスカはアカネに出勤初日にあったことを報告していた。しかし、それは油を売っているようにも見えた。アカネは自慢のコーヒーを淹れて、アスカとの雑談を楽しもうとした。

「...それで新しい相棒はどうだった...？」

「.....剣崎ツトム（25）A型、東京都世田谷区出身、ハッキング技術が長けており、サイバー犯罪対策課で一年配属して、その後、警備部暗躍係に異動となり、何度も本国に不法入国した外国人テロリストを確保した経験があることから、功績が認められてテロ対策のエキスバートとして活躍...」

アスカは、相棒となった剣崎のプロフィール、経歴リストを棒読みで読み上げた。

「優秀なお坊ちゃんのようなね...」

「確保したといっても、直接出向いているわけじゃないでしょう...現場の人間を派遣して、犯人が捕まる様子を呑気にモニタリングしている彼の姿が目浮かぶわ...」

「彼にとってはゲームみたいなものね...上手くやっていけそう？」

「さあね...忠告はしといたけど...いつでもコンビ解消していいって...じき、頭を下げてくるでしょう...」

「...劇団の後輩より厳しい対応ね...」

「当然よ、うちの後輩の方がしっかりしているわ...大体、最近の男性は弛んでるわ.....趣味はオンラインゲームにネット通販...ネットの世界以外は全く関心がない...いくら優秀でも私たちから見れば、ただのお子ちゃまよ...」

アスカは剣崎に対して毒を吐き続けて、アカネはそれを平然とコーヒーを啜りながら聞いていた。

「.....それでリカさんの方はどうだったの？」

「そっちは完璧よ、色々と収穫があつてね...偶然懐かしい仲間にも会えたし...チヒロとミサトがよろしく言つといてくれって...」

「そう...皆、離れ離れになつたけど、元気にやっているようね...一度同窓会を開かないとね...」

「.....にしても退屈ね、何か仕事ないの？」

「...今のところないわ、それにあんたには頼れる相棒が居るじゃないの...彼は？」

アスカは、アカネの皮肉った発言に対して苦い表情を浮かべ、気分を害して残りのコーヒーを口に含んだ。

「...本庁に戻ったきり帰って来ないけど...連絡も一切ないし...何考えているのやら.....！」

アスカが憂鬱な表情を浮かべる中、そこに一人の女性が姿を現した。

「...ここで油売ってたんかいな、ちょっと来てもらいたいんやけど、ええかな？」

太陽のような温かい笑顔でアスカたちの前に現れたのは、セシルであつた。

「いいよ～どうせ暇だし～」

アスカはそう言って、散歩している犬のようにセシルの後をついて行った。アスカが連れて来られた場所は、セシルたち研究者が使用している専用ラボであつた。

「ちょっと散らかっているけど、適当に座ってや～」

セシルはそう言って、アスカの分のカップを用意してコーヒーを注いだ。

「...雑談ならさっきの場所でも良かったんじゃない？」

「ちゃんと用があるんや、あんたに渡したいものがあつてね...」

セシルは作業テーブルに置かれた手ごろなサイズの黒い箱を持ち運んでアスカに中身を見せようとした。

「これって...！」

箱の入っていたのは、二丁の自動拳銃でアスカの愛銃であった。

「ご依頼通りオーバーホールしといたで」

「ありがとう～それでどうだった？」

「銃の方は特に問題ないわ、原因はあんたやな...」

「え？私...？」

アスカは、思わず首を傾げた。

「整備状況は悪くなく、大事に使っているのがよく分かる...ただ、あんたの身体能力のリストに目を通すと驚くことがあった」

「私の身体能力...？」

「うん、新人の頃と比べて、かなり向上している、瞬発力、筋力、握力が特にね...つまりこの銃はあんたの射撃能力に耐えられなくなったんや...もう寿命やわ...」

「...そう、今の私に合っていないのね、付き合いが長いからね...無理させたこともあったし...」

「あんた以外の人間なら問題なく使えるわ、この銃どうする？」

「.....もう使うことはないでしょう、でも処分しないで、新しい隠れ家に持って行くから...」

「分かった...一応こっちの方もオーバーホールが済んでいるで...」

セシルはまた別の黒い箱を棚から出して、アスカの中身を見せようとした。

「...新しい相棒ってわけね」

二つ目の箱の中にも銃二丁があり、それは代用で携帯していたシグサウアーP226とリカが使用していたグロック17であった。

「...シグの方はあなたの能力に合わせて調整しているけど、グロックの方はどうする？前の持ち主専用のままやで...」

「...耐久性を重視して、通常より重い引き金なのが特徴ね...良いわ、そのまま...使いこなしてみせるから...」

「分かった、じゃあ受け取って...それとまだ見せたいものがあるねん...」

「え？そうなの？何を見せてくれるの？」

すると、セシルは段ボール箱を運んで収納されている物を出そうとした。

「まずはこれや...」

セシルがアスカに見せたのは、何の変哲もない眼鏡であった。

「その眼鏡が何なの？」

「うちのチームで開発した特殊な眼鏡や」

セシルはそう言って、さりげなくコンタクトレンズを装着して、謎の眼鏡を掛けた

「コンタクトしてんのに眼鏡まで掛けるの？変なの～」

「まあしばらく黙って見ててや...」

アスカが不思議そうな目で見ると、セシルはせっせとなにやら作業を始めようとした。

「何が始まるの？.....あれ？」

アスカはセシルが不可解な行為を起こした途端、ある異変に気付いた。彼女たちの近くに居る研究スタッフが使用しているパソコンの画面にアスカが映っていたのであった。彼女は驚きが隠せずにいた。

「...どうや？びっくりしたやろ、この眼鏡とコンタクトレンズの影響や...」

「説明してもらえます？」

セシルは、得意げな表情でアスカに謎の眼鏡について説明しようとした。

「...この眼鏡のレンズとコンタクトは特殊な素材で出来ていてね...ナノマシンってご存知？」

「...何か映画やドラマでよく耳にするけど...はっきりとは...」

「簡単に言えば、肉眼で見えない超小型の精密なロボットや...このレンズの中にそれが一億個以上詰まってるんや...」

「い...一億個...!!!？」

「ナノマシンはどんなコンピューターよりも高品質、高性能と言えるほどで、近い将来、これで科学技術や医療技術が著しく進歩するでしょうな～」

「あんまりピンと来ないけど、とにかくその眼鏡は凄いのね？」

「そう、名称はナノ・カメラゴーグル、カメラ機能搭載眼鏡や...」

「.....その眼鏡、カメラなの？」

「そうや、最新鋭のカメラやろうね、婦御付属品のコンタクトレンズを装着すると、眼鏡のカメラ機能が起動する仕掛けや」

「あのパソコン画面に私が映っているけど、その眼鏡が撮影を？」

「フレーム部分が送受信アンテナになっていてね...リアルタイムで撮影された模様が外部の特定のコンピューターやデジタル機器に配信されるんや、高画質なため、外部の人間も撮影された現場に居るような感覚になるわ、暗視装置も搭載されていてから夜間や暗い場所でも問題なく撮影出来るで...それとレンズが汚れたり、破損した場合でも瞬時に修復されて元の状態に再生されるわ」

「へえ、何かハイテク～♪潜入する時に便利そうね～」

「そうやろ～...ただ、長時間使うと目に疲労が溜まって、体調を悪くなる欠点があるけど...まあ、それ以上の害はないから大丈夫や...これ、あげるわ～」

「え？いいの？」

「あんたたち肉体労働班のために造ったんや、是非、任務で活用してほしいわ」

「ありがとう」

「詳しい操作方法は、またゆっくりと教えるわ...次は...」

「まだあるの？」

「うん、これは自慢の品や」

セシルがそう言って、アスカに見せたのは見慣れた物であった。

「これ...スマートフォンよね？」

「ああ、そうや、紛れもなくスマホや...」

「これはどういった仕掛けが？」

「実はこのスマホ、私がプロデュースしたものでね...名称は私の名前から取って`CECIL`、特徴は通話、通信機能がないこと...」

「え？それじゃあスマホとは言えないでしょう？」

「まあ特殊なタブレットやね...」

セシルが言った通り、普通のスマートフォンと違い、画面を見ると四つくらいしか使えるアプリがなかった。

「どんな機能が？」

「一番の特徴は、端末内部に強力な爆弾が仕込んであるってことやね...この爆弾のイラストが記されたアイコンを開けば、カウントが始まって起爆するわ...磁力発生アプリがあるから仕掛ける時に便利や...どんな怪力の持ち主でも、くっついた端末を取り外すのは不可能や...ちなみに一度、起爆装置が作動すると解除出来ないから注意して...」

「...いざっていう時に使うわ...他は？」

「あとは暗号解読アプリくらいかな～デジタル機器にだけ対応や...」

「成程、ありがたく頂くわ...まだ何かあるの？」

「まだまだあるで、次はこれや...」

次にアスカが紹介した備品は、黒のベストであった。

「防弾ベストか、何か？」

「このベストを着て、高い場所から落下すると、衝撃を感知して炭酸ガスによりエアバッグが作動、体を保護するようになっているんや...」

「...エアバッグベストか、うちの仕事は危ないからね...備えあれば憂いなし...どのくらいの高さまで耐えられるの？」

「高度五〇〇〇フィート（一五二四メートル）までならちゃんと作動するよう設計されているけど.....」

その時、セシルの表情が曇りだし、何か言いたげそうであった。

「...どうしたの？何か問題が？」

「ちゃんと作動するかどうか実験したんだけど、人形でね...実物ではやってないんよ...」

「...成程、気持ちは分かるけど...ぶっつけ本番ってわけね...」

「...だからあまりお勧め出来へんわ...使うかどうかはあんた次第ってこと...」

「...一応置いといてよ、使う機会があるかもしれないし...」

「まあ保留にしておこう、次で最後や...こっち来て...」

アスカはセシルに誘われて、別の場所に一緒に移った。そこは広いスペースでガレージのよう

であった。

「へえ、高級車がずらり...リカさんの隠れ家みたい...全部、公用車なの？」

「...そうや、ここで点検、修理をしているわけや...ちょっと待っててや...」

セシルがそう言うと、奥から何か気配を感じた。

「...あの車は？」

アスカたちの前に徐行する一台の車が現れて、やがて、その車は適当な場所で静かに停車した。

「この車はあんた専用や、ようやくオプションの調整が済んでね...」

「私専用...あれ？運転手居ないけど...」

「自動運転システムが組み込まれているんや...車体に搭載された四つのカメラ、十二個の超音波センサーで障害物を感知してデータ化されて自動的に走行するんや...実用化されるのは四年後の二〇二〇年やけど、うちのチームに力でいち早く実現させたわけよ...」

「映画の世界が実現するのね、でもやっぱり自分で運転したいものだけど...」

「勿論、自らの運転も可能や、自分の判断で切り替えたらいいわ...あと、スマートフォンで遠隔操作出来てね...半径三十キロメートル圏内に車があれば、GPSを頼りに所有者が居る場所までやって来るわ...」

「ハイテクなのは分かったけど、これ、乗ったことない車種だわ...」

「マセラティ・クワトロポルテ...イタリアの高級車ブランドのスポーツカーや、フェラーリやランボルギーニに比べたら知名度は低いけど、子会社が日本にあってね、市場に大きく貢献していて、快くメーカーから提供してもらったわ...あんたの班、イタリア車好きやろ？」

「まあね、先輩は特に...」

その時、アスカの頭の中にリカの顔が過った。

アスカの新たな愛車となるマセラティ・クワトロポルテは、ダークブルーカラーのボディーでスポーツカーでありながら四人乗りのため長身であった。`クワトロ`はイタリア語で`4`、`ポルテ`は`扉、門`を意味する。ボディーラインは一見大人しそうに見えるが、犖猛さを秘めており、ドイツ車のような重厚感があり、かつ独特の美しさも漂っていた。エンジン音は割と静かで、巨体でありながら小回りが利くのが自慢であった。車内は四人乗りのため、圧迫感が微塵も感じず、快適なドライブが出来るよう設計されていた。車のロゴマークはネプチューンの持つ三叉の銜`トライデント`がモチーフとなり、神秘さを物語っている。

「まあ、試乗してみてよ、音声案内機能が付いているから、どんなオプションがあるか説明してくれるから...あと、車に異常があった場合、詳細を知らせてくれるし、運転手に異常が起きた場合、自動運転に切り替わって、近くの医療設備が整った場所まで送ってくれるから...」

「...気が利くわね、試しに帰りに乗ってみてもいい？」

「ええで、アウディはこっちで預かってくから...新車やから大事に乗ってや〜！」

アスカはセシルから頼もしいアイテムを受け取って有意義な午前の時間を過ごした。

それから時間は過ぎていき、アスカは午後の緊急対策集会に出席しようとした。アカネ、アスカ、セシルと仲良し同期トリオが横一列に着席して、まるで女子大の字授業風景のようであった。

「...あれ？」

アスカが集会のために使用された大部屋を見渡すと、相棒である剣崎の姿があり、相変わらず、無表情のままパソコン操作をしていた。室内の席は半分ほど埋まり、オフィスの責任者である白林部長が着席する部下たちの前に立って仕切ろうとした。

「.....本日は忙しい中、集まってもらい感謝する...集会に内容はかなり重要なのでちゃんと聞いてもらいたい...では始める...」

白林が口を開いた途端、室内は静まり返り、緊急集会が始まろうとした。職員や捜査員たちは手元に置かれたタブレットを操作して保存された集会のマニュアルを開いて目を通そうとした。

「マニュアルに沿って話を進める...まずテーマについてだが、`本国に迫る犯罪、テロの脅威`、だ...ここ、数年、世界の各地でテロが起きているわけだが、そのうち日本もテロになりかねない...そこで君たちに現状を知ってもらいたい...既に耳に入っている情報があるかもしれないが

、最後まで聞いてくれ...そもそもテロや戦争は、無差別で大衆を傷つけて苦しめる残虐極まりない犯罪行為であるが、現在は銃や爆弾を使用しなくても争いを起こせる...今の時代、科学が発展して便利となったわけだが、同時にリスクも伴っている、最近よく耳にするのがコンピューターネットワーク内で起きている犯罪...サイバー犯罪だ...詳しいことは今から紹介する担当者に説明してもらおう...」

白林がそう言うと、室内に設置された大型モニターが作動して、画面には一人の男性が映っていた。

「...彼は警視庁サイバー犯罪対策課の槍下課長だ...彼に色々と説明してもらおう...ではお願いします」

「...それでは順番に説明します、今や生活、社会はコンピューターネットワークで成り立っていると云っても過言ではありません...」

爽やかな雰囲気を出す槍下は、アスカの相棒である剣崎の元上司であった。彼はまだ四十代前半であるが、優秀でスピード出世でサイバー犯罪対策課のナンバー2の地位に就いた。

「.....ネット社会において、大人数で武器を使って破壊活動を行うテロ行為は古いとされています...もっと効率的なのは身近となったネットワークを利用することです...ネット社会で重要なのは情報です、報道番組で企業や機関の個人情報流出のことを耳にしますが、これがもっと巨大な組織...国家の機密情報であれば存亡の機に陥ってしまうわけです...これが目に見えないネット世界で起きた戦争...サイバーウォーズの実態です...」

槍下は専門分野であるサイバー犯罪について、事細かに説明しようとした。

サイバーウォーズは世界を巻き込んだ問題となっているが、狙われる側も黙って見ているわけではなかった。国際刑事警察機構（インターポール）は、サイバー犯罪対策国際組織をシンガポール箏曲に設置して、世界中のサイバー犯罪を監視している。なお、収集した情報は各国の警察機関に提供される。

また、米国のサイバーセキュリティー企業の幹部がある報告書を提出したことで波紋が広がった。その報告書の内容は、米国に対する中国のサイバー攻撃の実体であった。

報告作成者は、二〇〇六年以降、百四十以上の企業や政府機関から大量の機密情報が中国によって盗みだされたという指摘した。犯行に及んだのは中国人民解放軍のサイバー部隊であった。報告書が公開された途端、その部隊は拠点としている上海から姿を消した。しかし、米国司法省はサイバー攻撃による企業へのスパイ容疑で関係者が起訴されて非難したのであった。

中国にとって、関心のある物なら組織、業種問わず、狙って情報を盗み取っていた。

報告書作成者は、日本も中国のサイバー犯罪に巻き込まれる恐れがあると警告した。中国のサイバー犯罪の技術は、非常に高いので彼らは確実に侵入が出来て、しかも日本の対策は米国の十年前のレベルのため、危険性は高まっている。報告書作成者の言った通り、日本はサイバー犯罪の被害を受ける対象国となった。

「.....次に一般社会にもサイバー犯罪の魔の手が迫っていることをお教えします... I o T、モノのインターネットというの

がありまして、それはコンピューターなどの情報・通信機器だけでなく、世の中に存在する様々なものに通信機能を持たせて、インターネットに接続したり、相互に通信することにより、自動認識、自動制御、遠隔計測を行うことです...つまり、生活用品が意思を持つこととなるわけです...」

槍下が丁寧に話す中、アスカだけ興味を示さず、退屈で眠気に襲われていた。

「...所有物が他人に乗っ取られる恐れがあり、自分のモノではなくなる...例を挙げればまだ先の話になりますが、車は自動運転が可能となります...ネット経由で交通情報や路面情報を入手して自動的に運転されるため、一見、便利に思われますが、そこにもリスクがあります...パソコンのように外部から侵入されて車を制御するコンピューターが乗っ取られる恐れがあります...遠隔操作されて車は暴走することとなるでしょう...まさに走る凶器だ...」

槍下が報告した通り、日常の生活にもテロにつながる危険が潜んでいた。自動車を遠隔操作することが出来れば、事故に見せかけることが出来て証拠は残りにくく、I o Tを利用するテロ行為とされる。最近の防犯カメラや身近にある生活家電も外部からの遠隔操作が可能となれば、安心してはられない状況となる。（現在のところ、I o T機器のセキュリティー管理は不十分な点が多い）

さらには、ライフライン（生活を支える電気・ガス・水道等の公共公益設備、電話やインターネット等の通信設備、圏内外に各種物品を搬出入する運送、物流機関、人や移動に用いるバス、鉄道、船、飛行機等の交通機関）が乗っ取られることとなれば、国は正常に機能せず、崩壊につながる結果となる。ライフラインを悪用したテロは映画で描かれた世界は、現実の世界でも起きている。また、自動車の応用で、無人偵察機、爆撃機などハイテク兵器が何者かによって遠隔操作された場合、自慢の軍事力が逆手に取られ、世界大戦の引き金となってしまうわけである。

「.....次にサイバー犯罪の犯人たちについてですが、見方が変わってきています、ハッカー

、という言葉をよく耳にするとおもいますが、その実体は犯罪者ではありません...彼らはコンピューターの仕組みやプログラムに精通した者で善意的な技術者です...悪意を持ってネットに侵入する技術者の正式名称は`クラッカー、です...奴らは不正アクセスでデータを盗んだり、破壊、改ざんするネット犯罪者です...マスコミがクラッカーのことをハッカーと呼んだり、映画やドラマの影響でハッカーが`悪、のイメージとなったのでしょうか...」

アスカは、剣崎にクラッカーのことを教わっていたので、その時だけ得意げな表情を浮かべたのであった。

ここ数年でハッカーの姿は変わっていき、恐れられる存在から頼られる存在になっていた。また、サイバー犯罪に関わっていたハッカー（クラッカー）は、悪行から手を引いて、サイバーセキュリティー会社を設立している。米国ではハッカーの転職が当たり前となり、一般企業からスカウトされ、表舞台での活躍が期待されている。

「.....本国もサイバー犯罪の対策に目を向けており、東京五輪が開催される二〇二〇年にサイバーテロが起こったと想定して、各分野の企業、団体、機関が集結して合同演習を行いました...攻撃側は常に進化しており、守る側も全力を挙げて撃退しなければなりません...」

それから時間が流れて、サイバー犯罪に関する緊急対策集会は質疑応答等で二時間以上続いた。そして、最後に白林が締めようとした。

「.....槍下課長の説明でサイバー犯罪の脅威がよく分かったと思うが、相手は少人数精鋭で手強い...監視体制を強化する必要があるわけで...そこでだ、各国の警察機関で情報を共有する計画が進められ、守るネットワークを広げることでテロの弱体化を狙っている...是非とも本国のために協力してほしい...質問が無ければ以上だ」

こうして、内容が濃い集会在終わり、出席者は一息つけるのであった。

「あ〜やっと終わった〜」

アスカは慣れない環境にくたびれた様子であったが、そこにアカネが歩み寄った。

「...アスカ、悪いけど、一時間後に部長室に来て...」

「え...何で...?」

「あなた、うちの部長とちゃんと喋ったことないでしょう?今日は時間があるようだから是非会

いたって...」

「分かったわ...」

アスカは少々、表情が強張り落ち着かないまま一時間経つのを待った。

「...コンコン」

一時間後、アスカはアカネの付き添いのもと、白林の部屋に訪れた。

「失礼します、彼女を連れてきました...」

「...ああ、よく来てくれたな、アスカ君...だったかな？さっきの会議は随分とウトウトとしていたね...寝不足かな...？」

「.....！！！！」

その時、アスカは顔色が悪くなり、脇汗がびっしょりであった。

「彼女、難しい話を長時間聞くことが苦手です...集中は途切れてしまって...真面目な方なんです...」

アスカは、どうにか親友をフォローした。

「...別に構わんよ、君は現場担当だから動いている方が楽だろう...？」

「ええ、まあ...」

「それに体で実力を表現する者にとっては経験が役に立つ...今度、舞台を観劇させてもらうよ」

「あ...ありがとうございます！」

白林は一見、怖いイメージがあったが、思った以上に気遣いが出来る温和な男性であった。アスカは一気に緊張がほぐれて表情が和らいだ。

「.....実はさっき、集会場内に仕掛けられた監視カメラを使って君たち出席者の様子を観ていた...こそこそと覗くのは趣味ではないが、重要な仕事だ...ただ、我々も常に監視される対象となる

わけで、居場所を失って生きた感じがしないものだ...身を守るための物がいつの間にか支配される物に変わってしまった...便利なのは良いが、使い方を誤れば地獄から抜け出せなくなる...見えない脅威に苦戦しつつあるが、希望はある...」

「...はい？」

その時、白林はアスカたちを澄んだ目でじっと見た。

「...君たちはまるで全く濁りがない水だ、周りのものをこそこそと嗅ぎ回る仕事なのに迷いなく純粋な姿勢で立ち向かう...本業のモットーが副業にも行き届いているように思える...さすがだ...！」

「いえ...そんな...」

「素直に喜ぶんだ、アスカ君、君のような人が居て本当に助かる...ネットやデジタル技術に頼り、情報がいくつも行き交うが、その中に`真、はいくつかあるか...正解はないのに等しい...」

「...情報は足で稼ぐ...ですか？」

「その通りだ、警察の現場担当のしきたりだ...キャリア組には響かない言葉だ...手強い敵に対抗出来るのは信用出来る部下と指揮官だ...私を信用出来るかね？」

「ええ...勿論...！」

「...私は現場経験が長くてね...今でも国内だけでなく、世界のあらゆる場所の闇を覗いてきた...真実を知ることは現場のことを知ることだ...今後の活躍に期待しているぞ...！」

「...はい、期待に応えられるよう努めていきます...！」

白林は、アスカの肩を軽く叩いて頬を緩めた。

「それじゃあ、お疲れ様〜♪」

アスカはアカネと別れて、帰り支度をしようとする場所に向かった。そこは新しい愛車、マセラティがある専用ガレージであった。

「あ...もうボスの説教終わったん...？何をやらかした？」

マセラティの車内を覗くと、セシルが運転席に乗り込んでおり、タブレットを持って何か作業をしていた。彼女はアスカの気配に気づき、挨拶代わりにからかった。

「...見間違いよ、期待されているみたいよ、私...まだろくな仕事してないからね...早く実力を披露しないと...」

「...何やしようもない、集会の時のあんたの不細工な寝顔、ボスに見せたいわ～」

「...その必要はないわ、彼は全てお見通しみたい.....それで私の車で何を？」

「...最終調整や、車よりも中の装備の費用の方が高いからね...最高傑作に仕上がったわ、帰りは快適やで～」

「それは楽しみね、もう乗っても大丈夫？」

「うん、完璧や、色々と仕掛けがあるから教えるわ...」

セシルは、そう言って車から降りて、アスカが代わって運転席に乗り込んだ。

「...で普通の車とどう違うの？」

「...車と言っても、テクノロジーが詰まったマシンと思ってくれたらええわ...まず、この車はあんたにしか運転、操作出来ないよう設定されているんや...ハンドルを軽く握ってみて...」

アスカは言われた通り、ハンドルを握ると車内に異変が起きた。搭載されたオプションに電源が入り、エンジンが掛かった。

「.....これは？」

「本人認証機能が付いているんや、掌紋で本人かどうか確かめて一致すればエンジンが作動するわ、鍵は不要や、音声ナビも声紋認証をクリアしないと反応しない...」

「...もし、偽物が私に化けていたら？」

「心配無用や、車載カメラにあんたの情報が記録されているから...仕草や精神状態を分析してすぐ見破るわ...この車は、プログラムを変更しない限り、あんたにしか従わへんで～忠実な番犬や

」

「お利口ね、自動運転でちゃんと家に帰れるの？」

「勿論や、試してみるとええわ...」

「分かったわ、ありがとう、じゃあお休み」

アスカはセシルに別れの挨拶をして、地下駐車場から車を発進させて外に出ようとした。彼女はまだ自ら運転して、新しい愛車の性能を確かめていた。

「...ヴオオオオオ...」

アスカが運転するマセラティは、あっという間に地下通路を抜けて夜の公道を走行していた。当車のエンジン音は迫力があるが、決して耳障りではなく、バイオリンの名器のような音色を奏でるようで魅力的であった。

「.....さて、お手並み拝見と行くか...あの...今晚は...家に帰りたいんだけど、任せても大丈夫？」

「.....アスカ様...カシコマリマシタ、ゴ自宅ノ場所ハ、登録サレテイマスノデ、コノママ指示サレタ通りニ走行シマス...渋滞ナドトラブルガ無ケレバ、到着時刻ハ...」

車内ナビは地図を表示して、自宅までのルートのアスカに見せた。

「...さすがね」

「オートモードニ切り替エマスカ...？」

アスカがナビに訊ねると、お淑やかな女性の声を発して、彼女の指示に従った。

「ピ...」

運転席に搭載されたモニター画面を見ると、Manual DrivingからAutomatic Operationに表示が替わった。また、座席のリクライニングも自動的に傾いた。

「...気が利くね～」

「...ゴ自宅ニ到着スルマデ、オ休ミクダサイ...到着シタラ、オ知ラセシマスノデ...」

「...ありがとう、今日は何かと疲れたわ...」

アスカはナビに頼り、安心して体の力を抜いて目を閉じた。

「.....」

アスカはこのまま安らぎの時間を過ごそうとしたが、それは長く続きそうになかった。

「.....！！」

アスカは、突然の車の揺れに反応して目が覚めた。

「...あれ？」

アスカは車内から外の様子を確認しようとしたが、まだ自宅には着いていないようで走行中であった。

「.....何だ、まだ着いてないのか.....ここはどの辺？」

「.....」

音声ナビは、何故かアスカの質問に応答しなかった。さらに彼女はある異変に気づきだした。

「...ここは何処？知らない道だけど...ちゃんと家に向かっているの？」

アスカは音声ナビに再び訊ねるが、応答することなく、無言のまま豪雨の車道を走行し続けた。

「...故障したのか.....！！？」

アスカは車内の異常に気づき、予期せぬことが次々と起ころうとした。

「...ちょっと.....スピード出し過ぎよ！」

現在走行中のマセラティの速度を確かめると、疾うに制限速度を超えており、ずっと一〇〇キ

口以上で走行していた。

「...どうしたのよ、調子悪いなら私が運転するわ...！！？」

アスカはアクシデントに陥り、すぐに自らの運転を試みるが、装置は作動しなかった。解決する手立てがないアスカであったが、次なる恐怖がそこまで迫っていた。

「...え...そんな.....！！」

アスカは愕然とする物を目撃した。前方を見ると交差点があり、進行方向の信号は赤の状態、左方向からは何台もの車が通行していた。

「.....お願い...停まって！！！」

このまま直進すれば大事故になるのは明らかで、アスカはブレーキを何度も踏んだが全く効果がなかった。

「.....駄目...ぶつかる.....！！！！！」

アスカは頭の中が真っ白になり、彼女を乗せた暴走車は吸い寄せられるかのように信号を無視して、通行中の車道に衝突しようとした。

「.....！！！！！！？」

その時、アスカは謎のまばゆい光に包まれて、しばらくすると暗くなり、目が開けられるようになっていた。

「.....？ここは.....！？」

「.....サマ...目的地に到着しました...起きて下さい...アスカサマ、目的地に...♪...」

アスカは現状を確認しようとする、衝突事故に遭っておらず、アラーム音が鳴り響く車中に居た。車が停まっている場所は、アスカの自宅マンションの専用駐車場であった。

「.....あー良かった...」

車内の音声ナビは正常に作動していて、アスカの目的地に着いたことを何度も知らせていた。彼女はマセラティの暴走事故が夢だと分かって胸を撫で下ろした。

「...血圧、心拍数が正常値に戻りました...体は異常は無いみたいですね...」

「...ええ、何かとスリルがあるドライブだったわ...明日からもよろしくね～」

「ハイ、ソレデはお休みなさい...」

「.....」

アスカは車の機能が停止した途端、心の中で便利と危険は紙一重だと思った。実は、アスカの悪夢は恐ろしい現実を予知しており、直面しつつあったが、まだ彼女に知る由はなかった。

ミッション3 漆黒の仲立人

二〇一六年六月某日 大阪市北区

一九時二六分 グランドフロント大阪

「グォロロロロロ...」

雷鳴が轟き、激しい雨が叩き付けられる中、大阪市北区に所在する複合商業施設内のオフィスフロアの一室で、ある取引が行われていた。ただ、まともな取引ではないようで室内は張りつめた空気であった。取引をしているメンバーを見ると、人相が悪い人物が多く明確なことであった。売り手は三十代前半の好青年で、もう一人、がっちりとした男性たちが鋭い目つきで彼の後方に立っていた。買い手は関西の暴力団組織のようで、そこの若頭が取引に応じていた。

「.....おいおい、話が違うやないか！」

「...納得して頂けませんか？」

「当たり前やないか！品物が手薄すぎる...こっちは約束通り金払ってるんやぞ！」

若頭は取引の内容が気に入らない様子で、乱暴な関西弁を青年に浴びせていた。

「...今用意出来るのはこれだけです、申し訳ありません...」

取引場所として利用している部屋には、銃火器がずらりと並べられ、暴力団組織はそれを買収しようとしていた。しかし、商品内容と金額が一致しないようで、買い手側は気分を害していた。

「戦争するには足りんわ！もっと強力なのをよこせ！！」

若頭は青年に苦情を訴えたが、彼は少しも狼狽えておらず黙って聞いていた。

「.....あんたにこれ以上のことは出来ない...！」

「...何やと！？」

その時、青年の口調に変化があり、若頭は啞然としていた。

「...あんたらのような格下の連中を優遇する気はないと言ってるんだ...立場を弁えろ...」

「...貴様...言わせておけば！」

若頭は、青年の挑発的な発言で怒りが頂点に達しそうになっていた。

「納得出来ないのなら今回の取引は中止だ...契約を切ってもらってもいい...他を当たれ...うち以上に期待出来る提供者が居たらの話だが...」

「...く！」

青年は、低姿勢から打って変って本性を表して若頭を脅そうとした。

「...バン！」

その時、取引現場の扉が開けられ、他の部屋で待機していた青年の仲間が姿を見せた。売り手と買い手の睨み合い、険悪な雰囲気はしばし続いた。

「...選択肢は二つ、このまま黙って金を渡して取引を成立させるか、金を払わず俺たちを殺してブツを奪い取るか...さあ、選ばせてやる」

若頭は青年に決断を迫られ、思わず懐にある得物から手を放した。また、部下たちも彼に従ってじっと待機していた。

「.....ちょっと待て」

若頭は沸騰した頭を冷やして、専用のスマートフォンを取り出して誰かに電話を掛けようとした。相手はどうやら彼らのボスのようであった。青年たちは大人しく若頭の電話が終わるのを待った。

「.....話はまとまったか？」

「...ああ、親父は納得しているようだ...商談成立...余計な手間が省けた...」

「それは良かった、こちらも暴れられては困るので助かりましたよ、それでは契約書にサイ

ンを...」

青年はまた表情を変えて、にこやかに取引相手に応じた。

「...それじゃあこれで失礼するわ、また頼むわ...」

「ええ、勿論ですよ、何かあれば力になりますよ...」

「...ふん」

若頭は青年の気遣いに愛想笑いを浮かべ、部下と一緒にその場から去って行った。「.....」

青年は顧客に深く頭を下げるが、それに誠意は籠っていなかった。

「...どうにか片付いたな、啖呵を切るのが上手くなる一方だな...」

護衛役の同僚の男は、お世辞を言いながら洋酒が入ったグラスを青年に差し出した。二人は乾杯して取引成立を軽く祝った。「...こっちも商売なんでね、ヤクザだろうが関係ないさ...」

「...経営難だからな、黒字続きだった頃が遠い昔のように思える...」

「...堅気じゃない仕事はスリルがあっていいが、どうしても許せない事態だ...」

「ああ、まさか一番頼りにしていた得意先が潰れてしまうとはな...あの時のダメージは拭えない...解決策は見つかったか?」「.....まあな、禁じ手だが実行に移すつもりだ...協力してもらえるか?」

「いいぜ...今さら片木には戻れないからな...皆もついて来るだろうよ...」

「全員集まったら話すよ...東京に出張中だったな...?」

「東もかなり荒れているようだな、大きな組織も分裂してクーデターが盛んに起きている...うちらにとっては景気のいい話だが...」

「...今年の夏は忙しくなるぞ...やることは山ほどあるが...それであの件はどうなっている?」

「調べているが難航中だ、よほど憎いらしいな...」

「当然だ、俺たちを地獄に陥れた元凶だからな...どうしても顔を拝みたい...」

青年はオフィスに設置されたパソコンでネット検索して、ある記事を表示させた。その内容は昨年、香港で起きた謎の爆破事件であった。青年はその記事をじっと睨みつけて、怒りを露わにしていた。彼は見えない標的に報復することを誓い、想像絶する陰謀が渦巻こうとしていたのであった。

それから数日後、東京

一四時三三分 秘密警察都内エリア第二支部 地下射撃場

秘密警察の現場担当者のためにある射撃場は最新鋭の設備で、一〇〇メートル以上の射程距離がある他、仮想映像で現実味がある射撃シミュレーションを体験することが可能であった。

「...ドン!...ドン!.....ドドン...ドド...」

昼間の時間は利用者が少なく、場内で黙々と射撃練習をしている者が一人居た。

その利用者はアスカであった。彼女の足の周りを見ると空薬莢が数えきれないほど転がっており、長時間利用しているのが窺えた。

「ふー.....!？」

アスカは、ゴーグルと激しい銃声から耳を守るイヤーマフを外して、ひとまず休憩しようとするが、自分の近くで射撃場を利用している者が居ることに気づきだした。

「ドドオ...ドゴオン...ドドオン...ドゴ!」

もう一人の利用者の銃はアスカの銃より威力があり、五〇メートル先の的の中央部に全弾命中していた。

「...お見事」

アスカは、撃ち終った利用者に歩み寄って軽く褒めた。もう一人の利用者は彼女と親しい間柄であった。

「...どうも、ご無沙汰です～」

もう一人の利用者はユリカであった。彼女は愛用している自動拳銃のデザートイーグルを置いて、先輩であるアスカに挨拶した。

「...里帰りしてたんでしょ、それで...皆、無事だったの？」

アスカは、そっと九州で起きた震災について触れようとした。

「...ええ、両親や祖母の無事が確認出来て、現地に行って言葉を失いましたが、幸い実家には大きな被害はなく、ライフラインも無事でした...友人とも連絡が取れて...」

「...そう、良かったわね、もう戻ってきて大乗なの？」

「ええ、家族や地元の親しい人の無事が確認出来ましたし...ほっとしています...アスカさんは大丈夫なんですか？」

「...うちは震源地から離れているからね...家族や知り合いに連絡してみたけど、問題ないみたい...被災者の傷が癒えるのはかなり時間が掛かりそうだけど...私たちは力になれそうにないしね...」

「そうですね、悔しいですが...」

「...落ち着いたら歌劇団がチャリティーイベントに参加するようだから、その時を待ちましよう.....それに私たちにはその前にやることもあるしね...」

「ええ、指令が入ったんで駆けつけました.....銃、替えたんですか？」

ユリカは、アスカの新しい二丁の愛銃に興味を示していた。

「ええまあ、前のは引退してね...」

「...あの、撃ってみたいんですが良いですか？」

「え？いいけど...どれにする？」

「そのグロック...撃ってみたいんですけど...」

「はい、どうぞ～」

ユリカはアスカにグロック17を借りて、的に照準を合わせた。アスカは黙って彼女の腕を見

ようとした。

「ドン……ドドン…ドン…ドドン……」

ユリカは、獲物を狙う鷹のような眼をして引き金を引き続けた。彼女が撃った弾は見事に的へと命中していた。

「……！」

その時、ユリカは一瞬集中力が途切れて、表情が緩んだ。そして、彼女は弾を撃ち尽くして無言でアスカに銃を返した。

「…どう？使い心地は？」

「…うーん、そうですね…命中精度は素晴らしいですが、連射となると少々きついのかも…リズムが崩れるでしょう？」

ユリカはグロック17の欠点を見抜いて、アスカは彼女を誇らしく思った。

「…今まで同じ銃を使っていたからね…こっちのシグは馴染んできたけど、17は扱いづらいわ…」

「…何故、その銃を選んだんですか？」

「…リカさんから譲ってもらったのよ、新人時代に使っていたもののようだけど…」

「…成程、耐久性を重視して、自分の能力に合わせて引き金の強度を調整してるわけですね…彼女らしいですね」

「…そう、ちゃんと撃てないのは力量不足だから…まだ彼女の足元にも及ばないってこと…」

「焦らなくても大丈夫ですよ、アスカさんの実力はこんな物じゃないって分かってますから…！」

「ありがとう、ただ、褒めても何も出ないわよ～……！」

その時、アスカたちが居る射撃場に近づく気配があり、慌ただしくなりつつあった。「…あっ

ここに居たのね！何やってんの？ボスがお待ちよ！剣崎君も一緒だから早く行きなさい！！」

アスカとユリカはアカネに叱咤されて、急いで指揮官である白林の待つ場所へと向かった。

「...失礼します！すみません、お待たせして.....」

アスカたちは白林に深々と頭を下げて、年下の剣崎の前で恥を搔いたのであった。「別に構わないよ...君は初めてだったね？確かアスカ君と同じ班の...」

「...はい！ユリカと申します、本日からこちらに配属になりました！」

ユリカは声を張って、礼儀正しく白林に挨拶をした。

「よろしい...成程、女性だと分かっているけど、男性に見えてしまうな...もっと言えば男性以上に男の色気がある...よろしく頼むよ」

「はい！」

ユリカは白林に褒めちぎられて、頬を赤く染めていた。

「...それでは役者も揃ったところだし、始めるとするか...副部長...」

白林はアカネに合図を送って、部屋のブラインドを閉めさせた。

「本題と入ろう、ここに配属されてからの初めての指令となるわけだ...」

アスカ、ユリカ、剣崎は白林、アカネと向かい合わせでソファに座って、話を聞く体勢を取った。

「...それで標的は何です？」

「早速だが... `蒼龍会、という暴力団組織を知っているかね？」

「...ええ、昨年、急激な速さで勢力を伸ばしている原因を突き止めるために捜査しまして...それで中国の軍事産業とつながっていることが判明し、取引現場に潜入、関係者を一斉逮捕して組織壊滅寸前まで追い込みました...何か関係が？」

「...実は最近、壊滅したと思われた`蒼龍会、に不審な動きがあつてね...残党みたいなんだけど...」

アカネが話を進めて、アスカたちにある資料を見せた。

「...奴らはまだ活動しているの？」

「密かにね...内部抗争が起きて分裂したみたいよ...そこから新勢力が誕生し、シマ荒らしを始め、徐々に規模を拡大している...その組織の名は`武龍会、この男がそのボス...」

アカネは、`武龍会、の組員たちが映った写真をアスカたちに見せた。

「...若造ね、周りに居る部下や護衛も青臭いお子ちゃまばかり...本来あつた組織と比べるとガラツと顔ぶれが変わつた...」

「...裏社会も高齢化が進んでいてね、内紛は頻繁に起こり、若い組員が抜けていくのが現状よ...古い仕来りは消えつつある...」

「...こんな青二才たちが裏社会でのさばれるはずがない...必ずバックに大きな力が働いているはずだ...それを探してほしいんだよ、君たちに...」

白林は頬杖を突いて、任務内容の核を述べた。

「...奴らは危険薬物も売つていてね...買い手は学生や新人の社会人が集中している...自分と同世代の人間をターゲットにして、独自のネットワークを利用して市場を拡大しているわ...どうにか流れを止めないと...」

「...それも食い止めるわ、何が有力な情報は？ 奴らの居場所は？」

「...事務所の場所は分かっている...いつでも攻められるけど、まず、どういった者と接触しているか知りたいから...今夜に取引が行われる...現場に向かつてもらうわ...」

「場所は？」

「...タレコミで取引現場の情報を入手したわ...住所は...」

アスカたちは、アカネから標的の情報を隈なく訊いていた。

「...この世界が長いから念入りに言う必要ないと思うが、例によって、情報提供、捜査協力をするが、あくまで極秘捜査だ...秘密警察としての君たちは存在していない...我々以外の警察関係者との接触は避けるよう心がけてほしい...」

「はい、慎重に捜査を進めます、お任せ下さい！」

「では、良い返事を待っている...剣崎君、しっかり彼女たちをサポートしてやってくれ...！」

「はい...お任せ下さい」

剣崎は感情がない返答をして、部長室から退室しようとした。続いてアスカが愛想笑いを浮かべてユリカと共に退室した。

「.....あの三人で大丈夫でしょうか？どうも息が合っていないようですが...」

「...力が発揮されるのはこれからだよ、新鮮味があっていいじゃないか...どんな化学反応を起こすか楽しみだ...」

アカネがアスカたちに対して一抹の不安を覚える中、白林は目を輝かせて期待に胸を膨らませていた。

アスカは新チームを結成することとなり、今日が初顔合わせであった。

「...ユリカ、紹介するわ、私の新しい相棒の剣崎ツトム君よ」

「そうですか、この人が...若く見えますが...歳は若いんでしょうか？」

「ええ、私どころか、あなたより下よ、歳は二十五だったかな？」

「はい、そうです...」

「へえ~私の弟と同じくらいですね~よろしくね~♪」

「.....どうも」

剣崎は明るく振る舞うユリカに対して、無表情で挨拶した。

「ごめんね、彼暗いのよ、今時の人はこうなのかね〜？」

「...何かアスカさん、おばさん臭いですよ、私たちも充分若いですから...」

「そうだけど、どうも別の世界の人に思えて...一応、渾名を考えたんだけど...」

「渾名？」

その時、クールな剣崎の表情に変化が表れて、アスカの付けた渾名を心待ちにしていた。

「あなたの渾名は、`ハッカーボーイ、よ」

「え...？」

その時、剣崎はアスカが考えた渾名を耳にして、しばらく顔が引きつっていた。

「...あなた、ハッキングがご専門のようだから、決して悪口じゃないわよ...何か不満？」

「...いえ、別にいいんですけど、ボーイっていうのがちょっと...青臭く見えても、一応大人なんで...」

「...確かにそうね...じゃあハッカー...ヤングマン...何かダサイヒーローみたいね...えっと〜」

「... `ハッカーガイ、っていうのはどうでしょう〜？」

「...おっ！」

アスカは、ユリカの案に乗ろうとした。「...もう何でもいいですよ」

剣崎は、呆れた顔で付けられた渾名に賛同した。

「...じゃあ決まりね、早速三人で現場の様子をちらっと見に行きますか〜一応私たちも警察機関の人間だからそれらしいことしないとね...私の新車で行きましょう〜♪」

かくして、アスカたちは暴力団組織の新勢力 `武龍会、の動きを探るために動こうとした。

「...へえ～これが先輩の新しい愛車ですか～カッコいいですね～普段はアウディ乗ってるんですよ？」

「ええ、プライベートで乗り回しているわ、ユリカも車好きだったね～」

「ええ、温泉巡りの時によく運転してます」

「渋いね～...さて、あんまり乗ってないから慣れとかなないとね...さあ乗って頂戴～」

「剣崎君は助手席と後部座席、どっちにするの？」

「え...?そうですね...出来れば後部座席の方が良いですが...」

「分かった、じゃあ私は先輩の横に...」

「...ちゃんとシートベルトしてよ～では出発～♪」

アスカはユリカ、剣崎を愛車に乗せて、取引現場となる場所に向かった。

アスカたちが向かった場所は、神田駅から東京駅方面、煉瓦のアーチ下のコンクリートブロックの壁。コンクリート打ち放しの架梁、きちんと割り付けられたPコン。穴あきブロックの通気口が特徴の高架下貸倉庫であった。

「...ここに奴らが現れるわけか、昼間は平和な下町だけど...夜になれば一変するわけね...取引の時間は...?」

「タレコミ情報によると、人気がない夜更け...はっきりとした時間は不明です」

「張り込みしないといけないわけね...日が暮れるまで時間がある...どうする?一旦帰る?」

アスカたちは、車中で夜になるまでどう時間を潰そうかと考え込んだ。そして、一人が一つ提案した。

「東京の町をドライブしませんか?こういう機会ないと思うんで...」

「ちょっと何を言って...」

「それいいね～採用～♪」

ユリカの提案に反対しようとした剣崎であったが、アスカがそれをかき消そうとした。

「お二人本気ですか？任務中ですよ！」

「だって標的が現れる気配がないだもん～暇じゃん！本部戻ってもしやーないしね～」

剣崎は、ただただアスカの言動に呆れ返っていた。

「...この車、追尾装置が付いているんじゃないですか？」

「そんなの大丈夫よ、どうせ仕切っただのアカネだから上手く言っとくわ～」

「...僕は知りませんからね」

剣崎は腑に落ちないまま、後部座席に腰を下ろし、アスカは気分良く愛車を発進させた。

「何処行きましょうか？近くは秋葉原ですけど...」

「...確かオタクの聖地でしょう？あんまり興味ないな...それに雨だから気楽に外ぶらぶら出来ないし...他に候補は？」

「...あっそうだ！劇場の方に行ってみませんか？剣崎君も行ったことないと思いますし...」

「そうだね、私たちの本業の仕事場見せてあげよう～今何か公演してたっけ？」

「...明日から始まるみたいですけど...」

「まあ、とりあえず行ってみようか、ちょっと遠いけど...」

「先輩、安全運転をお願いしますね！」

「分かってる、分かってる～」

かくして、アスカたちは時間を潰そうと、東京歌劇団劇場へと向かった。劇場がある場所は千代田区の都市部で、歌劇団以外にも大手劇団の劇場が存在して、映画館、百貨店など娯楽、商業

施設も充実していた。アスカたちは駐車せず、車中から劇場の様子を見ようとした。

「今日は静かな方ですね～」

「平日だしね、明日は混雑するでしょうね」

「何故です？」

剣崎は、アスカたちの会話に疑問を抱いていた。

「開演時間前、出演者が楽屋口に行くためにここを通るからよ、ファンたちが入り待ちしてるのよ...」

「成程、ファンクラブとかもあるんですね？」

「ええ、ファンクラブによるイベントも盛り沢山よ...入り出待ちは恒例行事みたいなものね...！」

アスカは、会話中にあるものを見つけたようであった。

「パッパー！」

アスカは突然、クラクションを鳴らして、外の傘を差している二人組に気づいてもらおうとしていた。

「よっ、久しぶり～」

「...あれ？どうしたんですか？」

アスカたちと偶然出会ったのは、同じ境遇の歌劇団スターの二人であった。

一人はサヤカという歌劇団スター兼秘密警察要員で、長身に恵まれた体型と身体能力を発揮して順調にキャリアを積んでいる。ちなみに彼女の母親も歌劇団の舞台女優であり、遺伝子を受け継ぎスピード昇進で所属している班のナンバー2の位置に就いた。裏稼業でも主力として活躍している。アスカとは五年後輩、ユリカとは一年後輩で互いに共演の経験がある。

もう一人は、歌劇団兼秘密警察要員のアン。彼女は一見クールであるが、熱いものを内に秘めており、遅咲きではあるが、実力を伸ばし、目立つ存在となっている。裏稼業では、隠密として

危険な区域に潜入するのを専門にしている。アスカとは四年後輩でユリカは同期であった。アスカとは接点がなく、ユリカとは初舞台以降、別の班に配属されることで同じ舞台に立つことはなかった。

「...ちょっと副業の方で時間が空いたから寄ってみたのよ...あなたたちはどういった用件で劇場に？」

「明日から始まる公演の打ち合わせですよ、丁度終わったところで...」

「...あなたたちの班だったのね、観に行けるかどうか分からないな...色々取り込んでね...」

「...時間があれば是非観に来て下さい、それでは...」

サヤカとアンは、先輩に別れの挨拶をして、ファンたちが待つ場所へと移った。しばし、アスカたちはサヤカたちとファンとの交流をそっと覗き見していた。

「.....！」

その時、剣崎は表情には出さないが、初めての光景を目に焼き付けて興味を持ったようであった。彼の気持ちはアスカたちにも伝わっており、彼女たちは軽く笑みを浮かべていた。歌劇場から去って行った三人は都内のドライブを楽しみ、空が薄暗くなるのと同時に取引現場となる高架下の倉庫街に戻って行った。

「...駅前には居酒屋に行くサラリーマンとかで賑わっている...もぐ...現場に近づく怪しい人物はまだ現れていないようね...ばぐ...ポテト取ってくんない？」

「気長に待つしかないようですね...もぐ...剣崎君、ハンバーガー食べないの？」

「...ええ、お腹空いてないので...コーヒーだけ頂きます...」

アスカたちは、車中で買い込んだファーストフードを頬張って張り込みを続けていた。時間が経つにつれて、街を歩く人の数は減っていき、ついに標的と対面する時が訪れようとしていた。

「.....張り込みはやっぱり退屈だね~情報はガセだったんじゃないの？今日は平和そのものよ」

「...タレコミ情報は更新なし、他に捜査手段はないんでしょうか？」

「...!？」

アスカと剣崎が張り込み捜査に飽きる中、ユリカはあることに気づき出した。取引現場とされる倉庫街に動きがあった。怪しげな四人の男たちが貸倉庫の中に入っていき、それから間もなくメルセデスベンツSクラスクーペ一台とメルセデスベンツコンセプト・クーペSUV二台が停まり、強面の男たちが現れて同じように貸倉庫の中に入って行った。

「...やっとお出ましか、面白くなりそうね」

「どうしますか？現場の状況を確認しますか？」

「勿論よ、偵察は私一人で行くわ、二人はここで待機してて...」

「お一人で大丈夫ですか？」

「ええ、全員で行く必要はないでしょう...それにこれがある...！」

「何ですか？その眼鏡は？」

「セシルからもらったハイテク眼鏡よ、私が見た物があなたたちも見れる優れもの...ハッカーガイ、現場に着いたら映像送るからパソコンの準備しといてね~」

「分かってますよ、早く行って下さい」

剣崎は渾名で呼ばれるのが気に入らず、アスカには無愛想に返答した。アスカが視察に行ったことで車中は一気に静かな空間となった。

「.....カタカタ」

剣崎が専用パソコンに齧り付いて操作をする中、ユリカは彼の方に振り向き、何か言いたげな表情を浮かべた。

「...何か？」

「...忙しそうだね、ちょっと話をしても良い？」

「ええ、どうぞ、作業しながら聞きます」

「早速なんだけど... 剣崎君さ、うちのリーダーには慣れた？」

「...え？アスカさんですか... まだ数日しか会ってないんでよく分かりませんが...」

「...確かに上手くいってるとは言えないよね、傍から見てもよく分かる... ちょっと言葉きつくなるけど..... あんた、うちのリーダー舐めてるの？」

「.....！！？」

その時、ユリカは穏やかな性格が豹変して、剣崎に鬼の形相で睨み付けた。

「さっきから二人が接するのを見ても、お互い好きなことを言いたい放題... 子供同士の会話以下ね... アスカさんもぶっきらぼうな方だけど、あんたも酷いよ、警察のキャリア組か何か知らないけど、うちらには関係ないからね、口の利き方、気をつけた方が良いよ...！」

「.....す...すみません、気の強い女性は苦手です... ユリカさんも怒ると怖いんですね...」

「...私はまだ優しい方だよ、基本、うちの組織は上下関係が厳しく、だらしない人が嫌いでね... あと、積極性がなくて暗い人も嫌い... ちゃんと相手の目を見て話した方が良いよ... まあ徐々に態度を変えていくことだね...」

「...了解しました、以後気をつけます」

「分かってくれれば良いの、剣崎君が変われば、絶対に最強のコンビになるよ」

ユリカは普段の穏やかな表情に戻り、剣崎を激励したことで彼は少し心を開いたようであった。

一方、アスカは雨水を浴びながら怪しげな男たちが集まる貸倉庫に潜入しようとした。古びた扉を開けると、二階につながる階段と一階倉庫につながる扉があり、倉庫の扉を開けると一台のBMW i 8が駐車されており、彼女は抜き足差し足忍び足で階段を上っていき、例の眼鏡を掛けて二階に向かおうとした。

「...あっ映像が来ました、アスカさん、ちゃんと映っていますよ」

「そう...良かった... 何かあんた雰囲気変わったね...」

アスカは剣崎の異変に気づき、ユリカは二人の会話を聞いて安堵の表情を浮かべていた。

「...先輩、気をつけて下さい、中の様子はどうですか？」

「一階には誰も居ないみたい...今、二階に向かっているところ...現場の映像観れるようにしているから、連絡の取り合いは後程...それでは報告終わり...」

アスカは待機している仲間に指示をして、単独の捜査を行おうとした。

二階に着いたアスカであったが、廊下は薄暗く老朽化のせいか、ぎしぎしと音が出るため注意して部屋まで歩いて行った。

「...ゴシヨゴシヨ」

灯りが点いた部屋に近づいて行くと、何やら話し声が聞こえてきて、アスカは割れた小窓を見つけて、そこから室内の様子を見ようとした。するといくつか人影があり、張り詰めた空気の中、取引を行っているようであった。

「.....」

アスカは、しばし息を殺して闇の取引を偵察するのであった。待機するユリカたちもアスカから送られた映像であたかも現場に居るような雰囲気を感じていた。

「スッ」

アスカは、カメラ搭載の眼鏡のレンズをズームアップするなど巧みに操作して、可能な範囲で取引現場をしっかりと目に焼き付けようとした。確認すると多くの銃火器が並べられ、机上には札束が入ったアタッシュケースが置かれていて、順調に取引が行われているようであった。

売り手はカジュアルジャケットを身に纏った男たちで、その中でも最年長の四十代の男が仕切っていた。買い手の「武龍会」の組員たちは買い手の話に対して小刻みに頷いていた。

「.....約束の金額より少ないんじゃないか？」

「...分かっていますよ、こちらはオプションです...」

買い手の代表は、そう言って部下に別のアタッシュケースを持って来させた。

「...成程、かなり値打ちがありそうだ」

後から置かれたアタッシュケースの中身を確認すると、謎の白い粉が詰められたポリ袋があった。それは危険薬物であった。「新型が手に入りまして...そちらのルートで上手く売り捌いて下さい...」

「ああ、また売り上げの数パーセントを差し上げよう...いつも悪いね...」

「いえいえ、こちらこそ、我々はその世界ではまだまだ新参者なので、力を見せつけるには強力な武器が必要です...相手は衰えた老人ばかり...天下を取るのもそう遠くありません...」

「極道の世界も世代交代ですか、その方が良いかもしれないね...若い方が話しやすい...我々も新たなルートを開拓中でね...応援するよ」

「ありがとうございます、織藤さんによろしくお伝え下さい...」

「ああ、組長にもよろしく...」

アスカのカメラ搭載眼鏡は遠距離の音声も拾うことが可能で、彼女は取引の様様をずっと録画していた。アスカたちは、織藤、という人物が気になっていた。取引の方は交渉成立となり、彼らは穏やかな表情でお開きにしようとした。

「...よし.....!？」

アスカは、ひとまず引き揚げようとしたが、その瞬間、背中に気配があった。

「.....ゆっくりと振り向くんだ、余計な真似をするなよ...」

「...分かったよ」

アスカは、背後に立つ男の指示通りに行動した。男の正体は、武龍会、の組員の一人で拳銃を突きつけて彼女を脅した。

「...どうしますか？」

「...そう焦らないで、下手に動かない方が良く...彼女に任せて、しばらく様子を見ましょう...」

剣崎は非常事態により動揺していたが、ユリカは妙に落ち着いていた。

「...兄貴、変な奴が紛れ込んでいました」

アスカは、自らのミスで闇取引に関わっている者たちと対面することとなった。

「...女か、お前は一体何者だ？」

「スパイと言っても信じないでしょう？」

アスカは、複数の強面の男たちに囲まれながら冷静に対応していた。

「...ふざけるな、警察でも容赦しないぞ、ずっと覗いていたのか？」

「ええ、仕事なんでね、ただ、あんたらよりも、そっちの売り手の方に興味があつてね...巢を絶たないと害虫は消滅しない...色々話を訊かせてもらいましょうか？」

アスカは売り手の男たちに目を向けるが、彼らは口を開こうとしなかった。

「好き勝手にほざいているが、立場を考えろ、他に仲間が居るなら呼び出せ、無事で済むと思うな...」

買い手代表の組員は、安定した口調でじわじわとアスカを追い詰めようとした。しかし、彼女に通用しそうになかった。

「...銃に薬物、危ない取引のオンパレードね.....！」

「どうしました...？」

アスカは室内を見渡すが、その時、彼女の表情が一変した。また、ユリカもあることに気づき始めた。

「...そこに並べてある長身のライフルに見覚えがある...」

その時、アスカの意味深な発言で現場の空気は変わりつつあった。

「.....何故知っている？いつ、何処で見た？あまり出回ってない代物だ...詳しく話せ...」

突如、売り手の代表が口を開き、アスカに歩み寄った。

「...去年の夏、横浜の工場だよ...元々は勢力を伸ばしていた`蒼龍会、を追っていたんだけど...ある取引をされていてね」

`武龍会、の組員たちは、`蒼龍会、と言うワードに対して鋭敏な反応を見せた。「その件は関わっていない...`蒼龍会、の取引相手は何者だ？」

「...えっと確か...中国の軍事産業よ、その連中が同じライフルを持っていたわ、何だっけ...弾は実弾ではなく、プラ何とか...」

「...プラズマだ、荷電粒子弾...最新技術が備わった武器だ...」

「そうそう、試しに使ってみたけど、結構気に入ったよ...どうやってそのライフルを手に入れたの？」

「...うちはワケありの品の売買成立の支援を請け負っている...闇取引のパイプ役...」

「...暗黒街の仲立人ね？」

「...そういうことだ、初対面だが何かと縁がありそうだな...実に興味深いが君は色々と知り過ぎた...生かしてはおけないかもしれない...」

「あ~やっぱり~」

今のアスカに微塵も恐怖感はなく、標的に明るく振る舞った。

「そうやってヘラヘラしてられるのも今のうちだ...楽には死なせないぞ...たつぷりと可愛がってやる」

「...彼女の始末は任せるが、別の所でやってくれないか？そろそろホテルに戻りたいんでね...」

「分かりました、それでは彼女と一緒に失礼します...ついて来てもらおうか」

武龍会、の組員はアスカを外に連れ出そうとしたが、予期せぬ事態が巻き起ころうとしていた。

「...！...ぐ...え...」

その時、うめき声がかすかに聴こえて、気がつけば一人の武龍会、組員が苦しそうに倒れていた。

「...何だ？どうしたんだ？.....！！？」

武龍会、幹部は突然起きたことに対応出来ず、地獄の光景を見ることとなった。「...バキ...バゴ...！バシン...ベゴ！」

武龍会、の組員数人は、アスカの華麗な格闘術を受けて派手に倒れ込んだ。彼女はその隙に逃げようとした。

「...に...逃がすな！追え！！」

武龍会、幹部は血相を変えて、アスカを追跡するよう部下に命じた。室内は慌ただしくなったが、それは一瞬の出来事で嵐のように去って行ったのであった。仲立人の男たちはその光景を呆然と見ていた。

一方、待機していたユリカたちもアスカをサポートしようと動こうとしていた。

「...先輩を迎えに行かないと！車運転しようか？」

「それは無理です！この車はアスカさんにしか運転出来ないようにプログラムされています...」

「それじゃあ私たち何の役にも立たないじゃない.....！」

ユリカが苛立つ中、独りでの車のエンジンが掛かり発進しようとした。アスカは逃げながら愛車を遠隔操作していた。

「ドド...ンドドン...ド！」

アスカは銃弾の雨を潜り抜けて、外の仲間と合流しようとした。

「先輩！」 「アスカさん！」

ユリカたちは、脱出したアスカの姿が目に入り、咄嗟に声を上げた。

「お待たせ～！」

アスカは疲れた表情を見せず、迎えに来た愛車に飛び込んだ。

「ブオー」

アスカたちを乗せたマセラティは、速度を上げて `武龍会、の追手から逃げ切ろうとした。 `武龍会、組員は、しつこくアスカたちに迫るのであった。

かくして、この追跡劇がきっかけで秘密警察と暗黒街の住人たちとの対決の火蓋が切られたのであった。

ミッション4 因縁の寄生

静寂に包まれた東京、問題なく夜が更けようとしていたが、それに逆らう者が現れようとした。街灯で鮮やかな黄赤に染まった車道には力強く心地いい音色を奏でるイタリア車、マセラティが走っていた。それには追手から逃げるアスカ、ユリカ、剣崎が乗っていた。追手は暗黒街の新顔で、威勢のある若い力が売りの`武龍会、の組員であった。彼女たちは`武龍会、の怪しげな取引現場を偵察していたが、その最中、捜査していることがばれてしまい、命を狙われる身となっていた。

「...わざと見つかったんでしょ？」

「ええ、勿論よ、ちゃんと標的の顔が拝みたかったからね...ばっちり映っているでしょう？」

「はい、アスカさんが撮影、録画した映像は僕のパソコンにちゃんと送られていますよ...」

「これで捜査を進める材料が大体揃ったでしょう...それより口の利き方ましになったね...私が居ない間、何かあったの？」

アスカが剣崎の急激な変化に対して気になる中、剣崎は照れ顔で頬を赤く染めて誤魔化し、ユリカは不気味な笑みをかすかに浮かべていた。

「オホン...今は僕のことはどうでもいいので、追手の対応のことを考えて下さい」

「そうね、後ろのベンツ、しつこいわね」

アスカは、車内のモニターで後続車の動きを確認していた。そして、ユリカはあることに気づき出していた。

「...何か追いつかれそうですけど、大丈夫ですか？」

「確かにそうね...もうちょっとスピード上げれないの？」

「自動運転デハ、制限速度ヲ守ルヨウ、プログラムサレテイマス...雨ノ影響モアリ、慎重ニ運転ヲ行ッテイマス」

「...つまり、手動じゃないとスピードが上がらないわけね...私が運転しても構わない...？」

「ハイ...マニュアルモードに切り替えて、音声ナビの電源を切らせて、運転も他、オプション操作も全部自身でサレナイトイけません...」

「結構よ、しばらく休んで...」

「了解しました、ソレでモードを切り替えます...」

「...悪いわね、こういう時って自分の腕しか信じないから...」

手動運転に切り替わった途端、アスカは鋭い目つきでハンドルを握り、シフトレバー操作して、アクセルを思い切り踏んだ。「...何かアスカさん、人格変わってませんか？」

「運転は超プロ級だからね...カーチェイスは任せて大丈夫よ...」

剣崎はユリカの忠告を耳にして、アスカに命を預けようとした。追跡車のベントスは撒かれまいよう、アスカの愛車と一定の距離を保っているが、密かに罠を仕掛けようとしていた。

「.....あれ？一台足りない...？」

「...！」

アスカは前方の交差点の左方から車が走行してくることに気づき、嫌な予感がして、咄嗟にスピードを緩めた。

「...ブオ！」

アスカたちの前に現れた障害は、`武龍会`の組員を乗せたメルセデスベントス「コンセプト・クーペSUV」であった。追跡車一台だけが別ルートを通って先回りしており、アスカは異変に薄々気づいていたが、対応出来ず、まんまと罠にはまってしまっていた。

「袋の鼠状態ね、えらいこっちゃ〜」

「呑気なこと、言ってる場合ですか！このままじゃあ逃げ場ないですよ！」

剣崎が焦る中、アスカは合わせる素振りを見せず、運転を続けていた。待ち受けていたSUVは、停車して、窓を開けてから筒のような物を出した。

「RPG（携帯対戦車グレネードランチャー）を撃つ気です...この車大丈夫ですか？」

「...さあね、耐えられるかどうか賭けてみてもいいけど...」

「運任せのやり方は慎んで下さい！他に対処方法はないんですか？」

三人が言い争う中、RPGの引き金は引かれようとした。

「.....これしか手はないようね」

アスカは何か閃いたようで、勝負に出ようとした。アスカたちは前進するしか手がなかった。

「...ババシュ！！」

ついにRPGの引き金が引かれ、砲弾はアスカたちに目がけて発射された。

「...これでも喰らいな！」

アスカはそう言い捨てて、ある操作を行った。すると、車両前方のマセラティのロゴマークであるネプチューン（ローマ神話における海の神）の持つ三つ又の銚が蒼白く光り出し、テニスボールくらいの光の球が現れると、それは勢いよく放たれた。

「...ドガオオオオオ！！」

マセラティから発射された球は、RPG弾に見事命中して、攻撃を防いだのであった。`武龍会、の組員は予想外のことが起きたことで、愕然として体がしばらく固まっていた。アスカたちはその隙に脱出を試みた。

「...今のは？」

「とっておきの武器よ、攻撃は最大の防御ってこと！」

「...何か見たことあるような...先輩、以前に同じような物使いませんでしたっけ？」

「ああ、使ったよ、例の取引でも出回っていた...うちは合法で使用しているから問題ないよ...さて、思った以上に事態は深刻ね...久々に燃えてきたわ」

「...やはり、`蒼龍会、の残党とあのライフルが引っ掛かりますね...一年前に私たちが担当した事件等、関係しているのでしょうか？」

「さあね~後ろの連中に訊きたいところだけど、殺気立っているから無理だね、今は逃げるのが先決よ」

`武龍会、の組員は、しぶとくアスカたちを追跡し、雨中の激しいカーチェイスは続行されるのであった。

首都高速道路五号池袋線

アスカが運転するマセラティは、西神田出入口から高速に入ろうとした。`武龍会、の組員は恐れることなく、速度を上げて追跡を続けようとしていた。四台の暴走車が首都高を走行し、勿論、警察は黙っていなかった。

「.....管轄の全車両に告ぐ...首都高、神保町、飯田橋方面でスピード違反をしている車両あり...確認されている車種は、ブルーのマセラティ一台、シルバーのベンツSクラス一台...同じくベンツのSUV二台...マセラティがベンツに追われている模様...直ちに現場に急行して車両を停止させよ...繰り返す...」

「...ファン...ファン...ファンファン!...」

真夜中の首都高速、比較的、走行している車の量は少なく、交通事故は起きていなかったが、アスカたちが現れたことで、一気に騒ぎ立つこととなった。気づけば、大量の赤色燈の光が首都高速を鮮やかに彩っていき、耳が痛くなるくらいのサイレン音が鳴り響いていた。

「...あんれま、いつの間にか賑やかになったね~」

「他人事みたいに言わないで下さい、原因を作ったのは私たちなんですから...」

「...僕は良いですけど、お二人は警察と接触したらまずいんじゃないですか？」

「そうなんだよね~でも私たちと一緒になら、あんたもやばいんじゃないの？」

「...この辺で降ろしてもらっていいですか？」

「...別に良いけど、多分、後ろの悪い連中の餌食になるだろうね~」

身を乗り出した剣崎は、アスカの冗談を本気で受け止めて、無言のまま後部座席に腰を下ろした。

「...逃げ切れますか？」

「私を誰だと思ってんの...と生意気に言いたいところだけど...一人じゃ手に負えないわ...無事に脱出したければ力を貸して...！」

「勿論ですよ、ねえ、剣崎君～♪」

「え？僕もですか...？」

「心配しなくても、あんたにしか任せられない仕事があるわ...」

アスカたちは、その場の危機的状況を乗り越えようと協力し合った。彼女たちを追跡する『武龍会』の組員は、RPGやバズーカ砲で狙いを定めて確実に仕留めようとしていた。

「...あの筒が厄介ね、悪いけど、運転に集中したいんで、任せるわ...」

「任せると言われても...何か武器はないんですか？」

「ちょっと待って...あっそういえば...！」

アスカは何かを思い出して、オプション操作した。

「...え？」

その時、剣崎の座った位置に異変が起きて、彼は思わず声が出た。

「！...ちょっと、あんた！そこ邪魔よ、右端に寄って！！」

アスカは突然怒りだして、前方を見ながら剣崎に怒鳴り散らした。剣崎が右端に寄ると、左の座席部分が便座のように開き、中を覗くと重火器が収納されていた。

「先輩、これって...」

「それで後ろを撃退して...最近暴れてないでしょ？」

アスカは、ユリカに迎撃を担当させた。

「...剣崎君、ごめん、席を交代して！」

「その方が良いね、早く移動して.....！」

ユリカと剣崎は持ち場に就こうとしたが、その最中、`武龍会、の組員が待たずして攻撃を仕掛けた。

「...キュギギギギ...！！！！」

アスカは咄嗟の判断でハンドルを切り、複数の砲弾を避けようとした。

「ドガオ.....ンンン！」

`武龍会、の組員が放った全砲弾は着弾後、爆発を起こしたが、アスカたちには命中していなかった。ただ、爆発の衝撃波で車体が数メートル飛び跳ねた。アスカの愛車は無事に道路に着地した。

「ふう～助かった～二人とも舌嚙んでない？」

「...生きているのが不思議ですよ...！」

「...ちょっと、あんた何処触ってんのよ！」

剣崎は助手席への移動中、アスカの太ももに触れてしまっていた。

「.....これは違います！さっきの衝撃で.....いた！！」

剣崎はアスカの平手打ちを受けて、今回の捜査に参加したことを改めて後悔していた。一方、後部座席に移ったユリカは、速やかに分解されたアサルトライフル、M4 A 1 カービンを組み立てた。

「...準備は良い？」

「ええ、どうぞ」

アスカはサンルーフを開き、ユリカはそこから上半身を出して、組み立てた得物を構えた。`武龍会、の組員が彼女の存在に気づき出した時はもう遅かった。

「...ドドドガ」

ユリカは暗視スコープで照準を合わせて、そっとM4A1カービンの引き金を引いた。

「...パシュン！」

その時、破裂音がして、それはタイヤのパンクが原因であった。ユリカは`武龍会、の組員が乗る一台のSUVのタイヤを狙った。パンクさせられたSUVは制御不能となり、停車するしかなかった。`武龍会、の組員もまた、追われる身のため、足手まといとなる仲間を置いて、アスカたちを追い続けた。

「...さすがね、その調子よ」

「安心してはいられませんよ...これ以上、騒ぎを大きくするとまずいです...！」

「...そうね、そろそろ終わりにしますか、`ハッカーガイ、...あんたの出番よ...！」

アスカは追手から距離を離れた後、剣崎にある指示をした。

「...僕に出来ることとは？」

「...今からアカネに電話するけど、オフィスに例の取引現場の画像や映像を送ってほしいの...落ち着かないと思うけど、すぐにやって！」

「はい、分かりました！」

アスカは、専用のスマートフォンをハンズフリーに設定して、アカネに電話を掛けようとした。

「...もしもし、私だけど...今、何処に居るの？」

「...もしもし、まだオフィスに居るわ、何やっているの？首都高での騒ぎ、あなたたちの仕業でしょ？」

「...ええ、説教は後でいくらでも聞くわ、実は頼みたいことがあってね...」

「...残業は御免よ、そろそろセシルと一緒に帰ろうと思うんだけど...」

「そう言わないで、同期の仲じゃないの～」

「じゃあ一つ貸しね、近くに高級レストランが開店したんだけど～」

「分かった、分かった！奢るから！！」

「セシちゃんの分もよ...それで何をすればいいの？」

「...うちの相棒がそっちに例の取引現場の映像、画像データを送るから、映っている人物について調べて...」

「分かったわ...それで...どういった状況なの？無事に帰って来れそう？」

「さてね...なかなか片付かなくてね...！」

「...バシユ！」

武龍会、の組員は攻撃を緩めようとしようとせず、RPGの砲弾を発射して、ユリカは即座に迎撃しようとした。

「ドドゴン...！！！！」

ユリカは、M4A1カービンに備えつけられたグレネードランチャーで標的の砲弾を撃ち落とした。しかし、ほっとしたのも束の間。打ち落とした砲弾の黒煙に紛れて、ある物体が迫っていた。

「...！！.....ドド...ン！！」

実は、RPGの砲弾は時間差で二発発射されており、ユリカは持ち前の反射神経で続けて撃ち落とした。

「...こっちは上手いことやってるから心配しないで...それじゃあまた...ブチン...！」

アスカは電話を切って、運転に集中した。

「もぐはぐ...アスカたちは無事なんか？」

「さあね、大丈夫でしょう、ユリカちゃんと剣崎君が居るし...調べ物を頼まれたわ、これ、食べてから取り掛かるわ...悪いけど手伝ってね~」

「へいへい~」

アスカが電話を掛けた時、アカネたちは休憩を取って、出前のパスタを食している最中であつた。アカネたちは、アスカたちのことをあまり気に掛けず落ち着いた気分を保っていた。

一方、アスカたちは追い込まれつつも脱出出来ることを信じていた。

「...ブオオオオオ！！！」

アスカは車の速度を上げていくが、十数メートル先には急カーブがあり、当然、速度を緩めなければ曲がることは出来ず、さらに雨の影響でスリップする恐れがあるので危険度が増す一方であつた。戦慄が走る中、ユリカと剣崎はアスカの策が読めずにいた。

「...あの、この先、カーブあるんですけど、前見えてますよね?...アスカさん？」

剣崎は冷や汗を掻きながらアスカに話し掛けるが、彼女は無反応であつた。

「...先輩の悪い癖が出たな」

ユリカはアスカを信じ、大人しく座って覚悟を決めていた。アスカはカーブを曲がる気は一切なく、そのまま進もうとしていた。ただ、彼女は狂い出したのではなく、ある策を秘めていた。

「...ビシュ...ビシュシュシュ...！！」

アスカは速度を上げながら装備されたプチ・プラズマ砲を高速連射しだした。道路の壁はプラズマ砲で破壊されて、アスカたちを乗せたマセラティはそのまま進もうとした。

「...ギギギギギギ！！！！」

追手の`武龍会、の組員は、アスカたちの予期せぬ行動に驚愕して、つい急ブレーキを掛けた。

「...ドバシャン!!!」

破壊された壁に突っ込んだマセラティは、自然落下していくが、下は川が流れていて大きな水しぶきを上げた後、静かに沈んでいった。

`武龍会、の組員は車を降りて、アスカたちの生死を確認しようとするが、肉眼では確認出来ず、立ちすくんだままであった。

やがて、パトカー隊が追いつき、残った`武龍会、の組員を包囲した。彼らは抵抗せず、大人しく連行されるのであった。

「.....」

場所は変わり、アスカたちのカーチェイスで騒ぎになった区域がかすかに見える一般車道、そこに一台の車が停まっていた。それは`武龍会、とつながりがある暗黒街の仲立人を乗せたBMW i 8であった。

「もういい...出せ」

首都高で起きた混戦の一部始終を見届けた謎の組織は煙のように都内の何処かへと消えた。

一方、川へと飛び込んだアスカたちの行方であるが、マセラティは沈んだままで特に変化はなかった。車内を見るとエアバッグは正常に作動しているようで、乗車している三人は軽く気を失っていた。

「つ...何?助かったの?...ちょっとユリカ、`ハッカーガイ、大丈夫?.....」

まず、気づいたのはアスカで、気を失っている仲間に呼びかけた。

「.....あ、先輩、私たち、どうなったんですか?」

「心配ないわ、どうやら助かったみたい」

「...これでですか?外は真っ暗ですが...」

「ここなら安全よ...ちゃんと説明するから...って、こいつはいつまで気を失ってんのよ?こら、起きろ!」

アスカは、剣崎を叩き起こした。

「ううん.....ここは?.....!!あああああ...僕は死んだのかー!!!!?」

剣崎は一時的に錯乱状態となり、醜態をアスカたちに見せていた。

「確実に皆生きてるよ、自分のことしか考えてなかつただろう?...全く」

「...えっと、確か壁をぶち破って落下して...水面に飛び込んでいったような...」

「...先輩、まさか.....!」

「ええ、ここは川底よ...」

アスカは、淡々と重大なことを口にした。

「...な...何の冗談ですか?僕たちを溺死させる気ですか!??」

剣崎だけ錯乱状態となり、顔色が青ざめていった。

「まあ落ち着きなよ、それならとっくに私たちはあの世に行ってる...先輩、説明を...」

ユリカは興奮している剣崎を説得して、アスカに発言権を与えた。

「...この車は特別なんでね、水は車内に入ってこないし、ちゃんと動くわ...ここは選手交代としますか...」

アスカはそう言って、手動運転から自動運転にシステムを切り替えた。

「システム、オートモード...車両ハ陸上カラ水中ニ...トランスフォーム開始...」

音声ナビに操作を任せると、マセラティに変化が起きた。車両は変形しているようでタイヤは収納されて、後部からスクリュプロペラが出てきて、まるで潜水艇のようであった。変形した

マセラティは、正常に機能して運転を再開した。

「...もう浮き上がってもいいでしょ」

アスカがそう言うと、変形したマセラティは上昇していき、海豚のように水上に姿を現して、さらなる変身を遂げた。車底から合成ゴムの塊が垂れ下がり、ガスが噴き出たことで、それは膨張していき、車体を浮上させた。マセラティは水上を移動出来るホバークラフトと化して直進した。

「...何でもありですか」

「目的地は私たちのオフィス...よろしく頼むわ...」

「了解シマシタ...安全運転デ目的地ニ到達シマス...ソレマデユックリトオ休ミ下サイ...」

「それではお言葉に甘えて...二人も一服しなよ...」

「そうさせてもらいます、久々の暴れて少々疲れしました...」

「私もよ...ほら、あんたもパソコンいじってないで休みなさい」

「.....適当に休みます」

「...あっそうだ、あんたに頼みたいことがまだあった...それから休んでもらえる？」

「...はあ、分かりました」

アスカは剣崎にある頼みごとをして、休息を取ろうとした。かくして、アスカたちのスリルある夜は幕を閉じたのであった。ただ、今回の件はまだ序章に過ぎなかった。

無事に朝を迎えたアスカたちであったが、寝不足のまま、上司である白林に呼び出されていた。

「.....昨晩は派手に暴れたそうじゃないか...今朝のニュースで知ってね...」

白林は机上に頬杖を突き、少々機嫌が悪いことが窺えた。彼の横に立っているアカネは嫌な空気を感じ取り、表情を曇らせていた。

「...申し訳ありません、逃げることに必死だったので騒ぎになってしまいました...」

アスカが代表で白林に陳謝し、ユリカと剣崎が続けて深々と頭を下げた。

「被害状況についてだが、銀座、目黒、東池袋方面まで君たちが起こした事故により、一時通行止め、大規模な交通麻痺...搬送された怪我人は十七名...幸い、軽傷者ばかりで行方不明者、死亡者は居ないとのことだ...」

アスカたちは白林から吉報を聞いて、安堵の表情を浮かべた。

「...我々の仕事は犠牲が付き物だが...出来るだけ一般市民の被害は避けたい...君たちの腕を信じているぞ...！」

「はい...以後気をつけます」

「それで...収穫はあったようだが、例の組員数人を捕らえ、マル暴（警視庁捜査四課）が取り調べ中...何か吐いたのか？」

白林は気分を変えて、アカネに取り調べの内容を訊こうとした。

「...例の組員は重火器を大量に購入していました...押収した中にはグレネードランチャー、無反動砲など...」

「おいおい、ここは日本だぞ、まるで軍隊じゃないか...！」

「.....それに気になるのはこれです」

アカネはそう言って、押収品の資料の一部を白林に見せた。

「...これは？見たことない武器だが...」

「...新型のライフルのようですが...世界の武器マーケットでも正式な登録がありません.....アスカ捜査員が詳細を知っているとのことですよ...」

「それは本当か？」

「...はい、昨年、うちの班が担当した任務で目にしました...中国の兵器産業が開発した物で、蒼

龍会、が取引でそれを手に入れようとしていました...」

「...成程、組織が分裂したことで、勢力がある子分たちに渡ったわけか...他に分かったことは？」

「例の組員は武器購入と引き換えに危険薬物を売りつけています...証拠の映像が残っています...」

「取引相手のことについては吐いたか？」

「一切話そうとしません、ただ、取引現場の記録映像があるため、映っている人物は犯罪者リストを利用して照合してみました...」

「それで結果は？」

「...メンバーは四人、前職は様々ですが、共通するのは職場で問題を起こして解雇、免職しているということ...中でも一人、身の毛がよだつ人物が...」

アカネは白林たちに気になる闇取引メンバーの資料を渡していった。

「...御手洗栄進、元警察官か...前科あり.....これは...!!!？」

白林は渡された資料を黙読していき、思わず口が開いた。彼らの目に留まった箇所は御手洗の愕然とする経歴であった。

御手洗栄進（45）元大阪府警巡查

外見は何処にでも居る誠実な警察官であるが、裏の顔を持っており、プライベートではギャンブルにのめり込み、多額の借金を背負い、女遊びに酔いしれていた。そんな彼は悪癖を隠しつつ、学生時代に交際していた女性と結婚して、娘一人を授かった。これで幸せな家庭生活が築かれようとしていたが、御手洗は改心せず、悪癖は密かに続き、ついに惨劇が起ころうとした。

一九九六年七月の日曜日

本格的な夏の空気が流れようとする中、大阪の閑静な住宅街のある家中で激しい口論が起こっていた。口論していたのは御手洗夫婦で、二人は長時間怒鳴り合い、泣きわめく娘を放っとなまま佳境を迎えようとした。夫婦喧嘩になった原因は、御手洗の悪癖であった。借金していたこ

とや不倫していたことが妻にばれてしまい、彼から冷静さが消えていった。

御手洗は窮地に追い込まれて、頭の中で何かがぶちっと切れた。それまで彼は妻に暴力を振るったことがなかったが、豹変して手を出した。妻はサンドバック状態となり、痣になるまで体中を蹴り続けた。そして、彼女の運命が決まろうとしていた。御手洗の暴走は止まらず、殺意が芽生えて、何故か職務中に携帯している拳銃、ニューナンプM60を所持しており、その銃を泣き叫ぶ妻の前で構えて躊躇せず発砲した。さらには一緒に居た実娘も射殺して、惨劇は幕を閉じようとした。妻と娘を殺害した御手洗は逃亡せず、変わり果てた妻と娘の傍に座って、通報を受けた同僚を待っていた。ちなみに妻には新しい命が宿っていたが、母や姉と共に天に召された。

逮捕された御手洗には、殺人罪で懲役十八年の実刑判決を言い渡された。

アスカたちは、御手洗の異常で残虐な行為に体が震えて言葉が出なかった。

「この事件は憶えている.....何とも情けない話だ、同じ組織にこんな馬鹿が居たとは...もう刑期を終えているんだな？」

「はい、彼は出所後、一般企業に就職したとのことですが...」

「...何が一般企業だ、闇の世界に住み込み、悪に手を染めているじゃないか...どういった職業に就いているか徹底的に調べろ！」

「はい、現在、調査中ですので分かり次第報告いたします！」

白林は、厳しい表情でアカネに命令した。そして、彼は苛立った状態でアスカたちに目を向けた。

「...君たちの働きは評価するが、現実はそう甘くない...運ばかりに頼らず覚悟して捜査を続けてくれるか？」

「...勿論です、慎重かつ迅速に捜査出来るよう精進します！」

「期待しているよ.....ところで本業の方は大丈夫なのか？」

「...その件なんです、そろそろ夏公演の稽古が始まるので大劇場に戻らなければいけません...ですので意気込みを述べたばかりですが順調に捜査が続けられない恐れがあります...」

「...何も心配することはない、本業が優先なのは変わらない、スケジュールを調整して、代わりの捜査員を派遣したり...別の歌劇団部隊を呼び出す手もある...早期解決を考えて合同捜査になる可能性も高い...検討しているよ」

「了解しました、色々とお世話になります」

「お互い様だよ、もう何も質問なければ終わりにする...疲れているところ、呼び出して悪かった...次の指示が出るまで体を休めてくれ...自宅での待機も許可しよう...」

アスカたちは、肩の荷が下りて、ようやく自由の身となった。

「...これからどうします？」

「今、私たちがすべきことは体を休めて次に備えること...余計なことはしない方が良いわ...」

「僕はひとまず本庁に戻ります、何かと大変でしたが楽しめました...現場も悪くないですね、それでは...」

剣崎は、清々しい顔でその場を後にした。

「...彼、本当に変わったね、気持ち悪いくらいよ...」

「いいパートナーになりそうですね、あまり苛めないで下さいよ、先輩～」

ユリカは、妙な笑みを浮かべながらアスカに歩み寄った。

「まあ...とりあえず一仕事終わったから、私は帰るわ...あなたはどうするの？」

「...変に目が冴えるんで、射撃場にでも行ってきます...用があれば連絡して下さい」

「...そう、じゃあお疲れ様～」

アスカは、ユリカと一旦別れてからセシルが居る専用ラボに寄ろうとした。ラボ内にはアスカたちを無事に送り届けたマセラティの姿があった。

「...お～ボスの説教終わったみたいやね」

「やっぱり睡眠不足は体に毒ね...仕事手伝ってくれてありがとう～」

「何を今さら...高級ディナー奢ってくれるんやろ？」

「ええ、約束したからしょうがないね、借りを作っちゃったわ.....車を使いたいんだけど...」

「...マセラティは、見ての通り整備中でしばらく使われへんわ...仕事しすぎとちゃうか？」

「仕事じゃないわ、家に帰るのよ、これ以上働けば労働基準法に反するし...ここの仮眠ベッドは落ち着かなくてね...」

「分かった、プライベートの車やったら使えるで、ちゃんと手入れしてあるから快適な状態で帰れるわ～」

「ありがとう、それではまた...」

アスカは、愛車のアウディR8で憩いの我が家へと帰った。

場所は変わり都内某ホテル、男性宿泊客の男性四人組はバイキング形式の朝食を終えて、自分の宿泊部屋に戻ろうとした。彼らの正体は`武龍会、と闇取引を行い、アスカたちと接触した謎の組織に属する仲立人であった。その四人に中で仕切る立場であるのは、元警官で前科がある御手洗であった。

「♪～」

御手洗が部屋の鍵を開けようとする、彼のスマートフォンに着信が入り、すぐさま応答しようとした。

「...もしもし？ボス、何か用かい？」

「...お早うございます、調子はどうです？問題はないですか？」

御手洗は、都内の景色を見ながら電話での会話を続けた。

「問題ないと言いたいところだが、昨夜、妙なことに巻き込まれた...新聞やニュースで大きく取

り上げられている...」

「...今、ある情報番組を観ていますが、これですか？...首都高で起きたカーチェイス...爆発も起こり、まるで戦争のようだと報じられていますが...」

「取引相手の馬鹿がぶっ放しやがった...うちの商品が押収されたわけだ...」

「...詳しく話して下さい、警察に感づかれたんですか？」

「...現場で妙な女と接触した...スパイだと言っていたが、何者かは不明だ...」

「それで...その女をどうしたんですか？」

「現場を見られたので始末することになったが、逃走を図り、取引相手が追跡することになった...」

「あなたたちは追わなかったんですね？」

「ああ、我々は高みの見物をさせてもらったよ...」

「賢い選択です、警察の世話になると厄介だ...で、女はどうなりました？」

「...首都高で争い、その後の行方は分からない...連行されたのは取引相手の連中だけのようだ...」

「そうですか、その女、気になりますね、何か手掛かりや心当りは？」

「...心当たりはないが、気になることがある.....女はあの「トール」の知っているようだった...」

「それはおかしいですね、知っている者は限られているはずですが...」

「嘘ではなさそうだった...あの兵器産業のことも言っていたからな...！」

「...え!？」

その時、御手洗の通話相手は冷静さを失い、動揺が隠せなかった。

「とにかく俺たちは何者にマークされているようだ...調べた方が良いか？」

「.....いえ、その必要はありません、本来の仕事に集中して下さい...ただし、また不審な動きがあれば注意して報告を.....良いですね？」

「...了解した、明日には帰る、それでは...」

御手洗は電話を切り、溜め息を漏らした後、近くのソファに腰を下ろした。彼は通話相手の機嫌の悪さをひしひしと感じ取っていた。彼らはアスカたちの存在を知ったことで、ただならぬ運命に直面しようとしていた。

一方、アスカは自宅に着くなり、特に何もせず、ぐうたらな生活を実行していた。

気づけば日が暮れていき、それと同時に死んだように眠っていた彼女は目を覚まそうとした。

「...もうこんな時間か～駄目だね、不規則な生活は～本業の休暇でも、だらしのないもんね～」

アスカは独り言を呟いた後、バスルームに向かい、不調の体を再構築しようとした。それからバスタイムを済ませた彼女は適当に夕食を作り、リビングで特に興味もないテレビ番組を観ながら作ったものを頬張っていた。

「...んぐ？」

その時、アスカはある物に行き、思わず箸を止めた。テレビ画面を観ると、数分のニュース番組が放送されており、内容はアスカたちが関わった例のカーチェイス事件であった。彼女はそのニュースを目にして、何かを思い出したようで食事のペースを速めて、忙しく自分の部屋に閉じこもった。

「.....よし、ちゃんと送られてきている！」

アスカは、部屋に置かれた専用のパソコンを起動させて、すぐに届いているメールを確認した。送信者を確認すると、剣崎のようで密かに例の取引現場の画像や映像を送ってもらっていた。

「...さて、ここからは先輩の出番ですよ～」

アスカはそう言って、リカから譲り受けたUSBを利用した。彼女は取引現場に居た人間をU

S Bに保存された犯罪者リストと照合しようとした。しかし、一人も一致せず、アスカは表情を曇らせた。

「...結局、分かっているのは、この御手洗って男だけか...本部に先駆けて新ネタを入手するのは無理みたいね...」

アスカは残念な結果に意気消沈してしまった。しかし、諦めるのはまだ早いようであった。U S B内のフォルダを見ると、まだ開いていない物があった。

「...この `おまけ、` ってフォルダは見てないな、何だろう？」

アスカは、疑問を投げ掛けながら謎の `おまけ、` フォルダを開こうとした。

「...これって！！！」

謎のフォルダを開けると、また新たなフォルダが表示されており、それを開くと大量の画像が現れた。彼女は保存された画像を目にすると、自然と表情が和らいでいった。映っているのは歌劇団のトップを就任していた頃のリカやアスカ、その他歌劇団のメンバーであった。稽古場やプライベートでの様子が映っており、リカが歌劇団の仲間と過ごした思い出のアルバムとなっていた。アスカはずっと眺めていたいが、気持ちを切り替えて、他に何かないか調べた。すると、一つの文章データが保存されており、彼女は躊躇せず開こうとした。

`人災は常に進化する、`

謎のデータには意味深な文章が記されており、さらにはアドレスのような物が記されていた。アスカは、試しに記されたアドレスを入力して検索した。

「...開いた！これは...！！」

謎のアドレスは正常に開き、それは全国の犯罪者の現状が分かるホームページであった。内容は常に更新されて、リアルタイムで犯罪者の詳細を調べることが可能であった。当然のことながら極秘のウェブページのため、 `ブラックページ、` と総称されており、警察組織の一部の人間や秘密警察に属するベテランの歌劇団員しか知らない禁断の箱であった。アスカが個人情報を入力すると、彼女専用のアクセスコードが表示されてログイン可能となり、早速、利用しようとした。試しに気になる人物の画像を転送すると、検索が行われて次々と関連情報が表示されていった。

「...御手洗栄進、出所後は社会復帰して、一般企業に就職...入社したのは、CSSO(Civil Security Support Office)...通称、民間軍事会社...ここに奴が...！」

アスカは標的の居所を知り、徹底的に調べようとして、まず、御手洗の勤め先である民間軍事会社をインターネットで検索した。すると、会社のホームページが現れて、彼女はすぐさま閲覧しようとした。

「.....日本で軍事会社なんて珍しいわね、本社は大阪か...代表者の名は織藤尚也...まだ若い...青年実業家って奴か...事業内容は主に入出国サポート...戦場カメラマン、戦争ジャーナリスト、民間旅行者等が安全に戦闘区域を出入り出来るよう手続き。警備、宿泊・住居施設の提供に従事...直接戦闘には参加しない請負業務である...か...何か臭うわね...」

アスカは検索した民間企業に疑念を抱きだし、しばらく情報が記載されたホームページをじっと見ながら考え込んでいた。

「...♪♪♪♪」

その時、アスカのスマートフォンに着信が入り、彼女は我に返って電話に出ようとした。

「...もしもし？」

突如、アスカに掛かってきた電話は天の助けとなり、それが元で因縁の対決の事実が明かされようとしていた。

ミッション5 陰謀渦巻く水都

六月中旬某日、小雨が降り続ける夜の東京、アスカはある人物に急に呼び出されて、都内の小料理屋`九兵衛の里、に訪れた。そこは博多出身の大将と美人女将が営んでおり、地元の名物料理や地酒が楽しめる店であった。店は主に口コミで集まった常連客が通い、アットホームな雰囲気であったが、その時間はがらんとして貸切のようであった。

「いらっしやいませ〜」

アスカが`九兵衛の里、に来店すると、女将に優しく出迎えられて、カウンター席に一人、客が座っており、どうやら彼女の待ち合わせの相手であった。

アスカを呼び出したのは、歌劇団兼秘密警察要員であるアヤカであった。プロフェッショナルで構成された劇団班に属しており、瞬く間に中堅からベテラン舞台人に実力を伸ばして存在感を見せる。アスカの一年先輩であり、一公演共演したことから親しい仲となる。裏稼業でも実力が認められ、一部隊の指揮を任されている。現在は都内中心の事件の捜査を担当している。

「お〜どうもどうも〜、ごめんね、急に呼び出して...まあ座りなよ」

「...はい、失礼します」

「ご注文はどうされます？」

「...お腹は減ってる？」

「ええまあ、夕食はたいして食べてないので...」

「...それじゃあ私と同じのでお願いします...お酒も飲みなよ、美味しいから...」

「はい、頂きます...だから電車で来るよう指示されたんですね？」

「そういうこと〜私、この店の常連なのよ、東京の人間だけど、すっかりとここの味にはまっちゃってね〜あなた九州出身でしょう？」

「...はい、そうですけど、博多専門のお店ですか...都内にこういった所あったんですね...」

「大将と女将さんは夫婦でね...ある偶然で結ばれることになったの...」

「...ある偶然？」

「女将さんは元々、この店の常連客だったのよ、大将と女将さんは九州出身者で地元が近くて、すぐに意気投合して結婚したわけよ...女将さんは以前勤めていた会社を辞めて、大将のサポート役に徹することを決めたわけよ～」

「成程、ご馳走様です～」

アヤカが経営者ののろけ話を暴露すると、当の本人たちは頬を赤く染めて、照れ笑いを浮かべていた。

「.....会うの久し振りだけど、調子はどう？先月、博多で公演があったんでしょう？」

「ええ、無事に千秋楽を迎えられてよかったです...九州は色々大変ですから...」

「...そうだね、天災の前では人間の力は敵わないからね...私たちに出来ることは不幸に見舞われた人々の笑顔を取り戻すことくらいね...それも簡単なことじゃないけど...」

「...そうですね、地元の方は楽しんで観劇されたようなので良かったです」

アスカたちは九州で起きた震災のことを語り、自分に何が出来るかを話し合った。

「.....お待たせしました、ごゆっくりどうぞ～」

アスカが注文したのは、大将自慢の地元料理が並べられた定食であった。

「まあ食べてみてよ、美味しいから...お酒も付き合っよ～」

アスカは、地元の酒造で造られた純米焼酎をアヤカに注いでもらって食事を楽しんだ。

「...わあ、美味しい...丁度いい味付けですね～...お酒にも合う～♪」

大将と女将は、アスカたちの食事する光景を微笑みながら見守っていた。そんな中、アヤカはどうも深刻そうな表情をかすかに浮かべた。

「.....さて、そろそろ本題に入りましょうか...実は呼び出したのは世間話をするためじゃないの...副業での件よ...」

「...え？どういうことですか？」

アスカは、アヤカの意味深な発言で思わず箸を止めた。

「...昨夜に起きた首都高の事故...あなたが関わっていたと聞いてね... `武龍会、`を追っていたんでしょう？」

「.....ええ、それが何か問題が...？」

「私は都内で起きた事件、事故を欠かさずチェックしてね... `武龍会、`はマークしていたのよ、あなたと標的は同じかもしれない...あの例の秘密警察専用のページ開いたでしょう？」

「...どうしてそれを？」

「私がページの管理者の一人だからよ、閲覧状況も確認したわ...御手洗栄進について調べたわね...彼は元警官で前科あり、出所後は大阪に位置する民間軍事会社に入社...彼の勤め先についても調べたの？」

「はい、同もきな臭い感じの企業だと思ひまして...」

「確かにそうね、米国や欧州では一般的だけど...平和大国である本国では浸透していない未知の企業よ...私も気になって調べているところよ...それで分かったことは？収穫はあった？」

「はい、御手洗という男は `武龍会、`の組員に武器を密売していました...危険薬物の売買にも関わっていて、本来の業務内容とは程遠いものと思われまます...」

「...成程ね、それで捜査は続けているの？」

「...次の指示を待っています、昨夜の騒ぎでお灸を据えられまして...謹慎処分のようなものですが...」

「それで独自で捜査をしているわけね、型破りなところはりカさんに似てるかも...」

「...そんな私なんかまだまだ足元にも及びませんよ...」

「謙遜しなさんなって...良かったら協力するけど...そろそろ公演の準備しないといけないから早く片付けたいでしょう？」

「そうですね、手伝ってくれると助かります～」

「では合同捜査ということで、あくまでも極秘よ、私たちだけで情報交換を…」

「…あと二人ほどチームに加えたいんですが…頼りになりますよ～」

「良いよ、そっちのボスに気づかれないようにね…何か久々に燃えてきたわ～」

「…アヤカさんは本業の方、どうです？確か公演中でしたね…？」

「ええ、同期のミユ主演の作品に出演中よ、彼女は今回のもので最後だから、今まで以上に集中していてね…副業に手がつけられないから私が引き継いでいるってわけ…」

「ミユさんはもう退団されるんですね…大先輩のミチコさんも退団が決定したし…何だか寂しくなりますね…」

「…そうね、同期の数も少なくなってきたわ…新人だった頃が最近のように思える…もう未来のスターを育てる立場になっているのね…」

「…私もいつの間にか学年が上になっちゃって不安ですが…一年先輩のアヤカさんやミユさん、マミコさんが居て、実に心強いです！」

「同期のミユとマミコには、上に立つ素質が入団当時からあったからね…私は彼女たちに追いつくことが出来なかった…」

「アヤカさんにはアヤカさんにしか出せない魅力があるじゃないですか！ベテランが集まる班に配属しているのは誇れることですよ～！」

「お世辞でも嬉しいわ～今日は気分が良いから奢っちゃう～♪」

「いえ…あの…そんな悪いです！…本当のことですから…」

「まあまあ、今夜は奢らせてよ、最初からそのつもりだったから～」

「…ご…ゴチになります！」

アスカたちは久々の再会を果たして、完食した定食の勘定を済まそうとした。

「...休演日を利用して東京に帰って来たもんだから、とんぼ返りよ、東京駅に急がないと...先に本拠地に戻るわ...この店は良かったでしょう？」

「はい！大満足です、ご馳走様でした、また来てもいいですか？」

「ええ、勿論です、またの来店をお待ちしております」

アスカは、すっかり `九兵衛の里、の常連客の顔になり、大将と女将が厚く彼女を持って成した。

「.....さて、あなたの分のタクシーも呼ぼうか？」

「いえ、大丈夫です、ちゃんと迎えを呼んでるんで...お構いなく～」

「そう、では先に失礼するわ、また会いましょう～」

アスカはアヤカと別れて、雨宿りしながら迎えを待とうとした。

「...キイイ」

数分後、アスカの前にジャガーXEブルーファイヤーが停まり、すぐに助手席の扉が開いた。

「...悪いね、タクシー代わりに使っちゃって～公共交通機関より普通の車の方が落ち着くんでね～」

「分かってますよ、何なりとお申し付け下さい～」

アスカを迎えに来たのは、彼女と同じく謹慎中のユリカであった。

「例の件に進展があってね、頼もしい仲間も増えたわ」

「何があったか分かりやすく説明して下さい～」

アスカは、自宅マンションに着くまでアヤカと話した内容をユリカに話した。

「...というわけで黒幕の正体が明らかになりそうよ、アカネたちの目を盗んで捜査をしないと早く片付かないわ...」

「あまり気が進みませんね、オフィスの皆を騙すなんて...」

「こっそりやれば大丈夫よ、アヤカさんも協力してくれるし...私が全て責任取るから、あのハッカー男にも手伝ってもらいましょう...」

「あなたって人は...強引に動くのは先代からの教えですか？」

「まあね～すぐにスリルを味わいたい質でね...急がば回れという諺が嫌いでね...」

「やれやれ、大船に乗ったつもりでいたいですが、間違っってチケットを買ってないことを願いますよ...」

ユリカは呆れ顔でアスカの捜査方法に同意した。

「...これで決まったわね！敵は水の都に居るようだから関西に戻る私たちにとって好都合よ...一網打尽にしましょう」

アスカは黒幕の化けの皮を剥がそうと闘志を燃やしていたが、決して一筋縄では行かない存在であることをまだ知る由もなかった。

それから数日後、アスカとユリカは上司である白林に呼び出された。剣崎は、本庁での会議に出席しているため姿がなかった。

「捜査中の件の手掛かりを掴んだということで集まってもらった...アカネ君よろしく頼む...」

「...はい、まず、`武龍会、とつながりがある黒幕を徹底的に調べました...」

アカネはそう言って、アスカたちに調査結果の資料を配った。

「.....主要メンバーは三人、御手洗栄進については以前にも名前が挙がりました...彼は妻娘殺害で刑務所に服役、それから十八年の月日が流れて、出所後は社会復帰して大阪に位置する民間軍事会社に就職したそうです...」

「...ほう、あまり耳にしない企業だが、本当にそんな物騒な組織が本国に存在するのかね？」

白林は、配られた資料にざっと目を通して、アカネに質問を投げ掛けた。

「...はい、合法的な企業で登録されており、設立されてから五年経っています...主な業務内容は、民間人を安全に戦闘区域国に入出国させるための全面サポート...武器を使用しての警護は行っていないとのことです...」

「...どうも胡散臭いな、利用者の情報も知りたいし...とても日本に必要な物とは思えない...今までにトラブルはないのか？」

「ないようです...」

「...そうか、主要メンバーは三人ということだが...ここの責任者は織藤尚也.....織藤...何処かで聞いたことがある名だ...」

「彼の父親は、政治家の織藤源二郎です！」

「ああ、そうだ！あの大物政治家だ.....といっても今は違うが.....今回の件に彼の息子が関わっているとはな...」

白林はふと何かを思い出して発言しようとしたが、余計なことだと瞬時に判断して、本題に戻ろうとした。

「...部長のおっしゃった通り、織藤尚也の父は政界の大物...出来る限り彼の経歴について調べると興味深いことが色々出てきました...」

「読み上げてくれ...」

織藤尚也（33） CSSO(Civil Security Support Office)の代表取締役社長。

大物政治家の源二郎を父に持ち、何不自由ない生活を送り、学生時代は常に全科目優秀な成績であった。ただ、都内の経済大学卒業後、彼に異変が起ころうとする。一般企業に就職するが長続きせず、すぐに辞めて定職に就かないまま放浪生活がしばらく続く。当てもなく世界旅行をする彼は、何故か中東、東南アジアの過激派組織の活動に参加、自ら武器を持って戦場に足を踏み

入れるが、敵対する政府軍の基地襲撃時に重傷を負い、治療を受けて一命を取りとめるが、怪我の影響で右目を失明する。それから日本に帰国した彼は、新たな一步を踏み出そうと民間軍事会社CSSO(Civil Security Support Office)を設立、大阪の大型商業施設の一角を借りて開業。

アスカたちは織藤の経歴を目にして、聊か愕然とした表情を浮かべていた。

「...何とも特殊な経歴だ、一生苦労しない人生を送れたはずなのに...何処で歯車が狂ったんだ...?」

「.....驚くことはまだあります、主要メンバーの最後の一人も特殊で...」

「...続けたまえ」

白林は呆れ顔で目頭を押さえて、アカネに資料を読み上げるよう指示した。

猪本雅隆（36） 元海上自衛隊自衛官階級は曹長（当時）。

彼は高校卒業後、海上自衛隊関西地方隊基地に配属される。入隊当時から優等生と評されるが、心にある闇を抱えていた。そして、本性を表すこととなる。彼と同じ部隊に所属している女性自衛官が集団強姦を受ける事件が発覚して、犯行グループに猪本の名が挙げられた。彼は平然と判決を待つわけだが、結果、証拠不十分により無罪と言い渡される。猪本が罪を贖わないことで幕を閉じるが、その後の彼の運命は一転する。気づけば猪本は海上自衛隊を除隊しており、消息が明らかにならなかったが、後に織藤と同じように過激派組織の一員として活動していることが分かり、偶然にも不慣れな戦場で二人は出会うこととなる。出会ってすぐ意気投合した彼らは日本に帰り、民間軍事企業を立ち上げる。語学は堪能で現地の進行役を務めており、開設当時から織藤の頼れる右腕として活躍している。

アスカたちは、黒幕とされる三人の異色の経歴を目にして、驚きのあまり絶句していた。

「...これだけ奇人変人が集まるのも珍しい...現在の写真まで...よく調べたね」

「現在のネット環境... SNS、ブログ等を利用すれば容易いことです、彼らは陰に潜まず、堂々と情報を公開してアピールしています...経済専門誌の取材や講演会等も積極的に引き受けていますし...」

「...で裏の顔は武器商人か...織藤（尚也）の趣味はクレー射撃にサバイバルゲーム...現在の職業につながっているのが窺える...どうやって引きずり出すかだ...その後の動きは？目撃情報はあるか？」

「特に動きはありません、本社は大阪ですので現地に行ってみないと何とも...」

「...そうか.....ということだ、名コンビ！捜査に協力してもらえるか？」

「...え...はい、あの...その件について、お伝えしたいことがあるんですが...」

白林の質問に対してアスカは言葉を詰まらせ、普段、饒舌な彼女らしくなかった。

「...何だね？聞こうじゃないか」

「...実は今担当している事件...解決させる自信がなくて.....」

「...何かあったのか？君らしくない意見だ...理由は話せるか？」

「...はい、相手は思ったより手強く...先日のような大惨事を招いてしまいました...調子に乗り過ぎたこともあり、今でも反省しきれない気持ちです...このままでは役に立てないかと思うのでチームから外してもらおうかと思ひまして...」

「成程、自信家である君ゆえの判断というわけだな...それに理由はまだあるだろ？」

「...え？」

白林はアスカの思わぬ発言に驚倒せず、納得した上に彼女の心の内を見抜いているようであった。

「...公演が近い、どうしても神経がそっちに行ってしまうんだろ？」

「...え...まあそうですね...もう稽古が始まるんで...すみません」

「仕方がないことだ...君も同意見かな？」

白林は、ずっと直立不動の姿勢を取っているユリカの声を聞こうとした。

「...はい！彼女と同じチームなので...」

「...よし、わかった、捜査から外れてもらっていい...新たなチームを編成することにしよう...悪いが急いで手配を頼む...」

「了解しました...」

白林は少しも荒ぶれることなく、穏やかな表情でアカネに指示をした。

「.....我儘なことを言って申し訳ありません...このお詫びは必ず...」

「ああ、期待して待っているよ、本業の方、頑張りたまえ...今までご苦労だった」

「...はい、それでは失礼します」

アスカは白林に深々と頭を下げて、ユリカも続いて黙礼して彼女と一緒に退室した。

「.....」

その時、アカネは苦い表情を浮かばせて腑に落ちない様子を露わにした。

「.....作戦は上手く行ったんでしょうか？」

「...さてね、上司を騙すなんて気が引けるけど...ここからが本番よ、黒幕を引きずり出して懲らしめてみせる...」

「彼にはちゃんと話したんですか？」

「ええ、すぐにメールで返事が来た、快く引き受けてくれたわ、準備は整ったわ...」

アスカたちは密かに未解決の事件を捜査しようと目論んでいるわけだが、一つの影がそっと背後から二人の様子を窺っており、ざわめき始めようとしていた。

それから数時間後、アスカは、職場内の休憩ホールで購入した缶のコーヒーをちびちびと飲んで一人寛いでいた。

「...！」

その時、アスカは、近くに居る人影に気づいて思わず目が合った。

「...暇そうで羨ましいわ、また事務作業でも手伝ってもらおうかな～」

「...長時間机に向かう仕事は勘弁よ～まだ備品整理の方が良い...」

アスカに軽く嫌味を言ったのは、アカネであった。

「...大劇場に戻るの？」

「ええ、明日帰るわ、色々世話になったわね...」

「.....本当に感謝しているのなら隠し事は抜きよ...私たちってかなり長い付き合いよね...？」

「...？...何？どうしたの？」

「...あなたに大事な話がある...ここでは話せないから場所を変えましょう...」

アカネは厳粛な口調でアカネを別の場所に誘導した。彼女が連れられたのはオフィスフロアがあるビルの屋上であった。梅雨時にも関わらず雨は止んでおり、彼女たちは外の空気を浴びて話し合うことが出来た。

「.....それで何なの？隠し事なんてしてないけど...」

「...白を切っても無駄よ、さっき部長に言ったこと、あなたらしくなかったわ...説明してもらえる？」

アスカはアカネに怖い顔で問い詰められて、騙し通すことを諦めた。

「...はあ～...相変わらず鋭いわね...悪気があってやったわけじゃないの...」

「じゃあ狙いは何？うちのボスまで騙したのよ」

「あなたは何時から気づいたの？私たちの異変に...」

「黒幕について話しても反応が薄かったからね...まるで全部把握しているみたいに思えたけど...」

「うん、丁度、調べている部分が被っていたんでね...でもさすが情報収集のプロ、細かく調べてある...参考になるわ...」

「...その言い方だとまだ捜査を続けるつもりね...どうやって彼らのことを調べたの？.....まさか...！」

アカネはあることが頭の中に過り、目が点になった。

「...何か心当たりが？」

「...一つ訊くけど.....あの...ブラックページを開いたの？」

「ええ、秘密警察専用の極秘ホームページでしょう？知ったのは最近よ、あなたも利用しているの？」

「私も利用出来る資格があるからね...今回の件もそれで調べたわけよ...あなたの場合...あのページに導いたのはリカさんね...先輩の抱えた物は後輩に引き継がれる...遅れて届いた贈り物が役に立ったようね...」

「まあね...せっかちで迷惑を掛けたくないもんだから裏でこっそりと動こうと思ったのよ...」

「ユリカちゃんもグルってわけか、剣崎君も仲間にする気？」

「ええ、ようやく打ち解けてきてね...戦力になるから手伝ってもらおう...」

「本拠地の大劇場での公演が控えている...それまでに解決させる見込みはあるの？」

「...あるとは言えないけど、可能性は決してゼロではない...ボスにこのことを報告する？」

アスカは真っ直ぐな瞳でアカネの返答を待った。すると彼女は深く溜め息をついた。

「.....私が告げ口しなくても、いずれ気づくでしょう...その場合、親友のあなたでもフォローしきれない恐れがある...」

「...全て私が責任を取るわ、何としても挙げてみせる...中途半端には終わらせないよ...！」

「...分かったわ、勝手にやりなさい、ただ、やり過ぎは禁物...うちは華麗に迅速に的確に動くのが売りだからね～」

アカネは、アスカのことを信じて単独捜査を黙認した。

「これでまた借りを作ったことになるね」

「...高級レストランの件、忘れてないよね？セシルの他に人数増えるかもしれないわ～」

「はいはい、覚悟していますよ...」

これにて、アスカとアカネの険悪なムードは消え去っていき、二人は仲良く雑談し始めた。

「...ふ」

屋上にはアスカたちの他に潜んでいる者が居た。それはユリカであった。彼女は陰で先輩たちの様子を窺って、一段落した後、胸を撫で下ろして、軽く笑みを浮かべたまま、その場を後にした。

翌日、アスカとユリカは安心して本業のために関西区域に帰って行った。

それから時が流れて、七月某日、鬱陶しい梅雨の時期は去ろうとして、本格的な夏を迎えようとしていた。

七月上旬 歌劇団大劇場稽古場

アスカ、ユリカは久々に本拠地に戻り、ばらばらで公演を行っていた仲間と顔を合わせていた。今回、アスカが主演を務める演目は、海外作品を歌劇団用に舞台化した大作長編ものの一つで、好評につき、幾度と再演されて観客動員数は二百万人を突破。アスカたちの実力が買われて今夏の上演が決定した。

アスカたちは、公演出演決定が決まってすぐ、今作品の舞台となるオーストリアに訪れた。訪れた国の首都は、欧州有数の世界都市で、クラシック音楽が盛んで歴史ある建造物が建ち並んでいるなど芸術文化を特徴づけて、世界各国から観光客が日々増加している。アスカたちは思い存分、訪問国の空気を吸い、表現力を高めていった。限られた時間の訪問は、彼女たちにとって貴重な時間となり、感じたもの全てを本国に持ち帰った。

そして、公演初日まで一ヶ月を切り、アスカ率いる班は稽古に奮闘するのであった。しかし、アスカは副業のことも頭から離れず、稽古の合間を縫って極秘捜査を再開しようとした。

七月某日、アスカ、ユリカは黒幕が潜む大阪北区のビジネス街へと訪れた。黒幕の一人、織藤が代表を務める民間軍事会社はJR大阪駅近くに建ち並んでいる大型複合施設、超高層ビル群のグランドフロント大阪の一角にあり、運転担当のユリカはひとまずビルの前で車を停めた。

「...この辺は、近くに公演契約している劇場があるからよく通るけど...相変わらず賑やかね〜」

「...ええ、一日に約二百五十万人が利用する西日本最大の繁華街ですから...それにここの再開発エリアで大阪最後の一等地と言われてますからね〜」

「よく調べたね〜私はただただ人が多い場所としか感じないよ〜」

ユリカはアスカのいい加減な発言に愛想笑いを浮かべて車を発進させた。彼女たちはグランドフロント大阪館内にある駐車場で潜入の準備に取り掛かっていた。今回、秘密警察上層部に黙って捜査を行っているため、一切情報や備品は提供されず、独自に必要な物を集めなければいけなかった。そのため、公用車は使えず、自費のレンタカー（レクサス・LSハイブリット）に乗って、所属している組織自慢のハイテク機器はなく、後輩から借りた備品を使用することとなった。

「...あのハイテク眼鏡、気に入っていたんだけどな〜」

「仕方ありませんよ、急いでかき集めた割には結構揃いましたよ...これならバレません...」

アスカは薄くて丈夫な変装マスクを装着して、さらに普通の眼鏡を掛けて顔の雰囲気を変えた。彼女の服装はラフなパンツスーツで地味さ、清潔さをアピールして、フリー記者を装うためであった。アスカが着替えた上着の襟元に付けられた安物のブローチには、超小型カメラが仕掛けられ、待機するユリカに現場を視聴させるためであった。その他にはボイスレコーダー、デジタルカメラ、手帳等、取材に必要な物を用意し、彼女は耳にコードレスの無線イヤホンを装着して、一人で標的の居城に足を踏み入れようとした。

「...充分に注意して下さい、武器はなし...何かあっても助けは来ない...私たちだけ解決しないと
いけませんし...初対面じゃない人物も居るかもしれない...変装がバレないことを願います...」

「...御手洗...例の悪徳警官のことね...?」

「...今の彼はただの悪党ですよ、向かう場所には悪党しか居ない...」

「...そうね、では、しっかりと悪党たちの顔を拜んでくるわ...」

アスカはそう言って、車の扉を開けて織藤のオフィスに向かった。ユリカは彼女の無事を祈って
潜入現場のモニタリングを始めた。

「...先輩、彼のオフィスはオフィス棟の二十九階です...」

「了解...映像の方に問題はない?」

「はい、ちゃんと映っています、フロアマップと照らし合わせて映像を観ているのでうまく誘導
します...」

「ありがとう、ここに来る途中、コンビニで飲み物やら御菓子買ったから寛ぎながら観ててもいい
わよ~」

「何馬鹿なこと言ってるんですか?早く用事済まして帰って来てください!」

アスカたちはコソコソといつものように冗談を言い合うが、標的が居る場所に近づくのにつれて
口数が自然と減っていくのであった。オフィスフロアは、賑やかなショッピングフロアと違い、
物音を立ててはいけない程静けさが漂っていて、アスカの足取りは少々重たかった。

「...おっと早速出たよ、監視カメラ~」

「セキュリティーは大したことはないみたいですね...そこのフロアには標的のオフィスしかありま
せん...」

ユリカの言った通り、織藤のオフィスが独占しており、エレベーターを降りて正面を見ると清
潔感のあるエントランスがあった。アスカが設置された電話で来訪したことを知らせると、オー
トロックの扉が開いて女性秘書が姿を見せた。

「...記者の方ですね？お待ちしておりました...奥の部屋にどうぞ」

「...はい、失礼します」

アスカは女性秘書に案内され、ついに標的が待つ部屋に足を踏み入れた。

「記者の〇〇さんが来られました」

「...ああ、こちらにお連れして...」

アスカが応接室に入室すると、海外ブランドの高級ソファーに一人腰掛けている男性の姿があった。その人物こそ主謀者とされる織藤尚也であった。彼の後方には数人の屈強な男たちが立っており、社員である猪本の姿があったが、以前、東京で顔を合わせた御手洗の姿はなかった。それはアスカたちにとって都合は良く、ひとまず安心する形となった。

「すみません、お忙しい時にお邪魔して...」

「いえいえ、構いませんよ...丁度時間が空いたので...お一人ですか？」

「ええ、フリーでやっていますので...よろしくお願いします...」

アスカは織藤と軽く名刺交換を行い、偽の取材を始めようとした。

「...どういった取材ですか？僕は素直な方ですが、答えられないこともある...」

「はい、承知しております、経営方針、生い立ち、経歴、プライベート等をお訊きしたいんですが...よろしいでしょうか？」

「ええ、まあ良いでしょう、どうぞ、何でも訊いてみて下さい...」

「ありがとうございます、それでは始めさせてもらいます...」

こうして、アスカと織藤の危険な対談が始まろうとした。彼女は、さりげなく用意したボイスレコーダーの電源を入れて、取材内容を記録しようとした。

「...まず、日本では珍しい軍事会社を設立した経緯等を詳しく教えてもらいたいんですが...」

「はい、おっしゃる通り。弊社は特殊な企業に分けられます...理解してもらうのに時間が掛かるかもしれませんが、近い将来、必要なものになるとお約束出来ます...」

「その根拠は？」

「今の会社を設立する前、ベンチャー企業で働いた経験がありまして...それがきっかけで自ら新たなサービス事業を作ろうと思いました...」

「それで何故、軍事会社なんですか...確か代表は何年か海外に出て過激派組織の活動に参加されていたよね？」

「...!!!!」

その時、アスカの発言で織藤の他、室内に居た社員の表情が一斉に強張った。

「あの...何か気に障ることを言いました？」

「...いえ、少し驚きまして...こちらが述べようとしたことを先におっしゃったので...まさに今の経営につながることです」

アスカは織藤の反応を見るため、過激派組織の参加の件を引っ張り出した。

「...当時、週刊誌やネットで大きく取り上げられたようですね...最近、多くの若者がスカウトされて過激派組織の活動に参加していますが...あなたはその先駆けということになりますね？」

「.....ええまあ、過激派組織といっても小規模の活動集団です...その中でも下っ端...見張りや雑用ばかりやらされました...」

「参加したきっかけは何ですか？」

アスカが淡々と質問を続けると、織藤は何故か笑みを浮かべて素直に答えようとした。

「...僕は幸運にも恵まれた家庭で育ちましてね、当たり前のように何不自由ない生活を送り、気づけば社会に出ていた...苦勞せず企業に就職しましたが、面白くなくてすぐに辞めました...大人になって自分の生き方が嫌になりました、それから刺激を求めて海外に出ました...放浪の旅です...旅先は有名なりゾート地ではなく、見るに堪えない貧しい地域...自然に病んでいきました...世

界の闇に興味を持ち始めて、気づけば例の組織に...」

「過激派組織に加わったことに少しも抵抗はなかったんですか？」

「...はい、当時の僕には全く...実に貴重な体験でぬるま湯に浸かっていた自分を変えられた...かなり刺激されましたよ」

「.....もし、瀕死の重傷となっていなかったら、活動を続けていましたか？」

「それはないかもしれませんが、戦況も不利だったので、片目を失ったことを勲章だと思い、死も覚悟した...だから、タイミング良く帰国出来たかもしれませんが...後ろに居る猪本とも知り合えましたし...短い間ですが、戦場で生きていた経験を活かし、軍事会社の案が浮かびました...」

「...成程、御社の業務内容について気になることがあるんですが...主な業務は民間人を安全に戦闘区域とされる国に入出国させること...直接戦闘には関わらないとのことですが...」

「はい、我々社員は銃など武器を携帯していません...ご要望があれば、現地のフリーの傭兵を派遣して警護してもらいます...色々と規則が厳しくて我々は簡単に銃器を扱えないんですよ...」

「...そうですか、まだ日本に浸透していないことが頷ける...利用者は多い方ですか？」

「ええ、まあ...お陰様で...徐々にではありますが、繁盛するようになりました...利用者には特殊な職業の方が多いですからね...戦場カメラマンやジャーナリスト...一般旅行者は少ないですよ...はは...」

「経営は大変そうですね...」

「ええ、でもたまに政府の要人から依頼があつて...一件でかなりの報酬なので助かってます...仕事の量に波がありますが楽しんでやっていますよ...」

「...そうですか、それではこれで質問は最後になります...あなたのお父様は、政治家の織藤源二郎氏ですよ...？最近の内閣官房長官としてご活躍されていたかと...」

「.....！！！！！！」

アスカの最後の質問は、織藤たちにとって衝撃的だったようで、彼らの顔色が悪くなる一方であった。

「.....悪いが別の質問にしてくれないか.....！！？」

猪本がアスカに質問を変えるよう訴えようとしたが、織藤は受け入れる態勢で一度その場を立ち上がった。その時の彼の表情を見ると、妙に落ち着いていた。

「...他の記者さんにも訊かれたことがある...あまり話すことがないが特別に答えますよ...うちの父親のことが気になりますか？」

「ええ、大物なので...あなたはお父様のように政界で活躍される気はなかったですか？差支えなければ教えて下さい...」

「...父のようにね、はっきり言って彼のことは微塵も尊敬していません...なので同じ道に進みたいくない...最近の彼の姿を見れば一目瞭然でしょう...？」

織藤の口調には嫌悪感が渦巻き、父親とは不仲な関係であることが窺えた。

「...確かに良い噂を聞きませんね、不仲になった原因はそれですか？」

「いいえ、その前からです、どうも反りが合わなくなりましてね.....」

その時の織藤には怒りや哀しみの感情しかなく、切ない表情が滲み出ていた。そして、織藤家の深い闇が明かされようとしたのであった。

織藤源二郎（58）長年政界に君臨する実力者で織藤尚也の実父。学生時代、関西の進学校で優秀な成績を収めていたが、国立大学の受験は失敗。原因は勉強することに嫌気が差して悪い友人と付き合うようになったからである。二浪してようやく志望した大学に入学することが出来て、卒業後、一般企業で働きながら政治家になることを志す。また、職場で知り合った女性と結ばれる。苦勞して政界に進出するわけだが、息子の尚也が誕生したのと同時に持ち前の実力を発揮して、大物の貫録をつけていく。その後、順調にキャリアを積んでいき重要ポストを歴任し、ついに内閣官房長官に就任する。彼は総理大臣に近い人物と脚光を浴びるがその矢先、今まで隠していた闇が浮き彫りになろうとしていた。彼は、黒い噂や政治とカネの問題で逮捕されて、抱いていた夢は叶わぬものとなった。

織藤は、触れたくない家族のことを冷めた表情で語り続けた。アスカは神妙な面持ちで織藤の話を目にして、現場を視聴しているユリカもまた、彼の話の神経を研ぎ澄ましていた。

「.....実は...父が悪の道に手を染めていることは薄々気づいてはいますね...」

「え？」

「...僕が子供だった頃、家に父の友人がよく訪ねて来たんですが...官僚や大手企業の社長、著名人が多く、父の交友関係はとても豪華でした...でも、純粋な子供には彼らのどす黒さが見えた...父もやがて薄汚い権力者に変り果て闇に落ちた...いち早く彼の異変に気付いたのは母親でした...墮落していく夫に愛想が尽きて、いつの間にか離婚してましたよ...現在は再婚して幸せに暮らしてはいますね...今でもたまに会ったりします...それで母が去った後、家に強面の男たちが頻りに訪ねてきました...」

「.....そうですか、詳しく話して頂きありがとうございました...今、語って頂いたことは記事にしませんので...ご心配なく...」

「...そうですか、特ダネになるとおもいますが...お気遣い感謝します」

織藤は穏やかな表情に戻り、アスカに蚊感謝の意を述べて軽く微笑んだ。

アスカは織藤の心の闇を掘り下げていくが、今まで渡り合ったことのないタイプでかなり手強い相手になると悟ったのであった。

ミッション6 鏤められた悪石 前篇

場所は大阪北区の超高層ビル群の一角。アスカはフリーの記者に扮して、織藤のオフィスに潜入していた。彼女は一時間ほど時間を貰って、偽の取材を行った。所持していたメモには、取材の内容ではなく潜入したオフィス内の様子が事細かに書かれていた。

「...パシャ」

アスカは、用意したデジタルカメラで織藤の写真撮影を行い、取材を終了した。

「どうもお忙しい中、ありがとうございます〜」

「いえいえ、こちらこそ楽しかったですよ、それにしてもスタイルが良いですね、記者というのが勿体ない...何か運動などされているんですか？」

「...いえ、大したことはしていませんが...記者もスクープを掴むために足で稼がないといけないですからね...自分の目で確かめたいし...デジタルなやり方は苦手な方なんで...」

「分かります、私も以前は必死に何件も取引先を回ったものです...今ではモニター越しでクライアントと顔を合わすことが多くなりました...やはり直接会った方が良いですね、本当に今日はあなたに会えてよかった...仕事のことでストレスが溜まっていたんですが、お蔭で気分が晴れましたよ...」

「そうですか、お役に立てて何よりです、それでは失礼しました」

アスカは織藤や彼の部下に一礼していき、颯爽とその場を後にした。

猪本はアスカが去った途端、織藤に歩み寄り、苦言を口にしようとした。

「.....らしくないな...余計な事を喋りすぎだぞ、親父さんのことは良いのか？」

「別に良いよ、公表する気はないみたいだし...実に面白い女性だった...特に真っ直ぐな目が気に入った、記者独特の嫌らしさを全く感じなかったよ...かすかに危険な匂いもしたが...」

「あの女...本当に記者だったのだろうか？調べるか？」

「...いいや、その必要はない、これは勘だが、また彼女と会える気がするんだ...だから放っておいてくれ...」

「...何か起こってからでは遅いぞ...やれやれ、あの女に惚れ込んだんじゃないだろうな？」

「...せっかく気分が良いのに怒らせたいか？...さて、仕事モードに切り替えよう...御手洗が戻れば作業を再開する...！」

織藤は、アスカの知らない所で着々とある計画を実行させようとしていた。

一方、アスカは一仕事を終えて緊張から解放されようとしていたが、それは東の間のことであった。彼女の前にまた一つ脅威が迫っていた。

「無事終わりましたね...さすが先輩～」

「...堂々としていれば怪しまれないものよ、さて、引き揚げましょうか...」

「...ピンポン」

アスカが待機しているユリカに連絡を取ってエレベーターホールに向かうと、一基の上りのエレベーターが停まり、扉が開くとスーツを着た男性数人の姿があった。彼らはエレベーターを降りようとするが、アスカはその時、突然のことで顔を悪くした。

「.....！！」

アスカの前に現れたのは、織藤の部下の御手洗であった。タイミング悪く、彼は数人の部下を引き連れて織藤のオフィスに帰ってきた。アスカと御手洗は面識があり、彼女にとって危機的状況であった。

「...先輩！」

ユリカは、アスカに仕掛けられた超小型カメラで潜入現場を視聴していたが、何も出来ず彼女を信じて見守るしかなかった。

「コツコツコツ...」

アスカは自然体で御手洗たちとすれ違って、その場を切り抜けようとした。そのままエレベーターに乗ってしまえば一安心だが神の悪戯はまだ続いていた。

「.....おい、ちょっとあんた...」

「.....！！！！！！？」

アスカは御手洗に声を掛けられて、驚きのあまり体が震えてしまい、ゆっくりと彼らの居る方向に振り返った。

「...はい、何か御用ですか？」

「...いや、あんた、うちの会社に用があって来たんだろう？」

「...え？あっはい...私はフリーの記者でして...代表に取材を受けてもらいました.....あなたもこちらの社員の方ですか？」

「ああ、年を取ってるがまだ新人でね...収穫はあったかい？」

「ええ、まあ...色々とお話して頂きましたので.....あの、急いでいるので失礼します」

アスカは、どうにか話を合わせて御手洗から逃げようとした。しかし、御手洗はまだ鋭い目つきで彼女を捉えていた。

「...ちょっと待てよ、あんた...どっかで会ったことないか...？」

「...！！！！！！？？？」

その時、アスカは大量に変な汗を掻き、なかなか御手洗を見ることが出来なかった。変装していることがバレそうになり、彼女はまさに絶体絶命であった。

「おい...ちょっと...顔をよく見せてくれよ...絶対あったことがある...」

「...！！！」

アスカは、その場の危機を切り抜けようと決死の覚悟で御手洗と再度、顔を合わせようとした。

「.....御手洗さん、いい加減にして下さいよ、さっきだって喫茶店の女性客を昔付き合っていた女性に似てるって煩かったじゃないですか！...すみませんね～」

その時、救いの手が差し伸べられ、アスカの強張った表情が和らいでいった。御手洗は、部下の注意でアスカに対して興味を無くしていき、しつこく呼び止めるのを止めたのであった。

「...悪いね、どうやら人違いのようだ、もう行ってくれ...」

「はい、それでは失礼します...」

アスカは、ようやくエレベーターに乗り込むことが出来て、生き地獄から解放された。彼女は、下降中のエレベーター機内の壁に凭れかけて余計な体の力を抜いた。

「...危なかったですね、お疲れ様でした」

「...ほんと神経を削る仕事ね、この中のカフェで何か冷たい物でも食べましょう～」

アスカたちは、息の詰まる空間を抜け出して危険な取材を無事に済ませたのであった。アスカはひとまず関西の自宅に戻り、無事に夜を迎えることになった。

「...カタタタ...カタ...カタタタタ...」

アスカは、帰宅してからずっと自室に引き籠って何やら黙々と作業をしていた。彼女は、専用のパソコンで極秘捜査に関する資料を読み直していたのであった。

「.....！！」

アスカは資料を読み直している最中、あることに気づいて顔色を一変させたが、突然、自宅のドアチャイムが鳴り、彼女は我に返ったのであった。

「はいはい～今開けますよ～」

アスカは謎の来訪者に一切驚かず、快く招き入れようとした。

「...はあ～しんど～引越したんやね～」

「ええ.....悪いわね、こんな所まで来てもらっちゃって...」

真夜中にアスカを訪ねて来たのはセシルであった。アスカは、セシルをリビングルームまで誘

導して、アイステイーを差し出した。

「...全く、急に呼び出すんやから...アカネから聞いてるで、内緒で捜査を進めているんやろ？ばれたら、ただでは済まへんで」

「分かってるって...だから迷惑掛けないよう慎重にやっているよ、もし、バレても私が責任を取るから...で持ってきてくれたの？」

「...勿論や」

セシルはそう言って、自分の鞆を開けて中の物を出そうとした。それはアスカの愛銃や秘密警察のハイテク備品であった。

「...全部持ってきてくれたんだね、まだ使ってない物あるし、得物がないと落ち着かなくて...」

「銃はバラバラにしてあるから自分で組み立ててや...あと、強化した備品があるからマニュアルの方、読んどいて.....それで捜査は順調なんか？」

「まあね...標的のアジトにも行って来たよ、良い場所にあるね~大阪駅付近は再開発でと東京みたいになっているから...見た感じ、まともな企業だったけど...主犯格はうちらと同じくらいの歳で青年実業家、調べると黒い部分が次々と出てくる...彼の仲間からもね...」

「...あんた、危ない所に首突っ込んでるみたいやね、慣れているとはいえ、深入りは禁物やで...こう言うてはなんやけど、大事なのは本業の方なんやから...公演はもうじきやろ？」

「ええ、稽古は順調だよ、何としても公演が始まる前に片づけないとね...もう遅いけど、泊まって行く？」

「いや、ホテルを予約しているからお構いなく...一泊して朝一番の新幹線で東京に戻るんや...」

「...そっちも忙しそうね~」

「まあね、今は本業の方が忙しくてね...」

「...今のあなたの本業って？」

「...実は舞台の仕事が決まってね、歌劇団退団後初の出演やから興奮するわ~♪」

「へえ～良かったね～時間があれば観に行くんだけどね～」

「そんな気遣わんといて～まあまあ～お互い色んな事あると思うけど、無理せず頑張ろう～」
セシルは、アスカが用意したアイ스티ーを飲み干して速やかに帰ろうとした。

「...よし」

アスカは、セシルと別れた後も捜査の調べもの続けようとした。彼女は標的のメンバーを徹底的に調べ上げ、何故か主犯格の織藤ではなく、ナンバー2である猪本に注目していた。ここでリカが担当した事件の報告書が役に立ち、閲覧すると彼の名が記されており、アスカは当然それに興味を抱いた。

今回の標的は心に闇を抱えている者ばかりであるが、中でも猪本は秘密警察や歌劇団とつながりがあった。

リカの担当事件報告書にはこう記されている...

二〇一五年 二月×日 私はある隠蔽事件を極秘捜査した。発端は昨年から今年にかけて神戸、大阪、東京で起こった大規模なバイオテロ事件である。犯人は冷酷なプロ集団かと思われたが、実際は違って、その正体は今の社会に反発する弱者であった。特に主犯格である城ノ内結城の半生は波乱万丈であった。彼女は元海上自衛官であったが、同じ部隊に所属する男性自衛官のグループに強姦されて一生消えない深い傷を負うこととなった。城ノ内は、被害者として痛烈に所属していた組織に訴えるが、相手は一切罪を認めず、彼女を闇の世界へと葬った。

ただ、闇に葬られたのは被害者の城ノ内だけではなかった。加害者である男性自衛官は罪に問われなかったが、実は彼らが所属する組織の大きな力が働いていたのである。上層部の人間は城ノ内のみならず、男性自衛官も除隊させて、何事もなかったかのように強姦事件のことを隠蔽したのであった。テロ事件解決後、城ノ内の自宅を家宅捜索すると、自身を強姦した自衛官のメンバーの資料が発見された。部屋には主犯格とされる猪本雅隆の写真が多く貼られ、それにはダーツの矢が刺さっていたり、刃物の切り傷跡があることから彼女の執念の炎が一切消えていないことが窺えた。彼女はバイオテロ事件の主犯として逮捕されたが、仲間が開発した筋力増強剤を過剰に摂取したことで健康な肉体を蝕んでいった。現在、城ノ内は警察組織の監視下に置かれ、専門病院に入院中で法廷に立てるまで回復するよう治療、リハビリに専念している。

アスカはリカの捜査報告書を読み終えた後、険しい表情が崩れていき、一度溜め息をついた。そして、彼女の頭の中にある記憶が甦ろうとした。

「...そういえばあったな、歌劇団の仲間が団結して解決したハードな仕事だったな...もうあれから二年近く経つのか...戦場になった大阪駅前が復旧作業が済んでるみたいだったけど...とても信じられないな、あんな場所でテロが起きたなんて...」

アスカは、リカと一緒に挑んだ悲惨なテロ事件のことを思い出して、苦い表情を浮かべた。

「...何か嫌な予感がする、はあ～こんなの調べなきゃよかった...」

アスカは、単独で勝手に捜査したことを少し後悔しており、気持ちを落ち着かせた後、ベッドに飛び込んだ。

それから数日経ち、アスカは本業である舞台の稽古を済ませた後、再度、織藤のオフィスを訪れた。ただ、今回は相手の許可なく無断で忍び込み、彼らが退社した後の真夜中に決行した。彼女は、相棒であるユリカと共にくろまく織藤の陰謀を暴くために有力な手掛かりを見つけようとした。

「...さて、皆帰ったようだし、そろそろ行きますか...ちゃんと映っている？」

「はい、受信状態は良好です、そちらのビルのセキュリティーにアクセスしたので、自由に操作出来ます...」

「何かあったら助けてね～」

アスカと連絡を取り合っているのは、彼女の後輩で歌劇団兼秘密警察要員の一人であった。

名はジュン。将来を期待される歌劇団若手ホープの一人である。愛らしい一面や仏のような笑みが印象的であるが、いざ舞台に立つと美声の持ち主で正統派舞台人の貫録を見せつける。裏稼業ではハイテク機器を駆使して捜査対象の情報収集、オペレーター等を担当している。

「...あの～私のこともお忘れなく～」

「はいはい、分かっていますよ～」

アスカたちにそっと話し掛けたのは、同じく歌劇団兼秘密警察要員で名はジュリ。歌劇団入団時、優秀な成績を収めて安定感がある実力派として注目される。いかなる時も冷静に対応して、それは裏稼業でも発揮されている。担当はジュンと同じく情報収集で、彼女より三年先輩であることから経験は豊富で頼もしい存在である。ちなみにユリカと同期。

今回、ジュリとジュンは剣崎の代理を任されていた。彼女たちは専用車に潜み、アスカのカメラ搭載眼鏡で侵入現場の映像を送ってもらい、陰からのサポートを担当していた。

「まだいくつかのフロアの灯りが点いてますね、やはり日本人は働き者ですね〜」

「...どうだか、私は単なる電気の無駄遣いだと思うけど...」

アスカはさりげなく毒を吐いて、苦笑いを浮かべるユリカと共に織藤のオフィスへと向かった。

「...！」

アスカたちが覆面をしたままエレベーターホールに向かうと、最新の防犯カメラが目にとまり。アスカはすかさずカメラの方に何かを放った。それはカメラの機能を一定時間フリーズさせる装置であった。これで設置されたカメラにはアスカたちが映ることなかった。彼女たちは、防犯カメラが仕掛けられた場所に次々とフリーズさせる装置を放って迅速に侵入していた。

一方、織藤はアスカたちの無断侵入に気づかず、自宅マンションに帰宅していた。彼の住まいは、勤務地である複合商業施設に隣接している超高層マンションであった。ちなみに織藤はそこで部下であり、恋人でもある女性秘書と同棲していた。

織藤は、女性秘書を先に自宅へ帰らせて一階の高級ホテルをイメージしたラウンジに残っていた。そこには猪本の姿もあり、二人はそこで何やら雑談をしていた。

「.....どうも最近疲れが取れない...何故だろう...」

「...働き過ぎだろう、今週は色々とイベントに参加したからな、お蔭で知名度が上がっただろう？」

「まあな...しかし、何故かトイレで眠りこけている時があった...注意しないと...」

「例の計画のこともあって一気に疲れが溜まったんだろう...一段落したら体を休めるといい...彼女と旅行でも行って来い」

「そうさせてもらおうぞ.....ただ、気になることがあるんだ...疲れの原因はそれかもしれない...」

「何が気になる？」

「.....最近、妙な連中が嗅ぎ回っているだろう...たまに奴らの視線を感じる...例の計画の障害に

ならなければいいが...」

「...一応調査しているが、なかなか尻尾を出さない...攻めてくる時を待つしかないようだ...あまり思い詰めるな、帰ったら仕事のことを忘れてすぐに寝ろ...」

「ああ、そうするよ、お前が居てくれて助かる...御手洗さんは近づきがたい時があるんでね...雇ったのは失敗だったかな？」

「...まあそう言うな、彼も彼なりに貢献しているんだ、時が来れば役に立つはずだ」

「...そう信じるよ、それじゃあまた会社でな...」

織藤は猪本に元気づけられ、別れを告げた後、静かに自宅に通じるエレベーターに乗り込んだ。彼はアスカたちに対して警戒しており、恐れていたことが現実で起ころうとしていた。

アスカたちは織藤のオフィスフロアに到着して、ロックされた扉を開こうとした。

「...オートロック式も扉ね、出来れば上品に開けてみたいものだけど...」

「私にお任せください、暗証番号で解除されるので、番号を教えますね～」

ジュンが華麗なブラインドタッチを披露して、すぐにオートロックの暗証番号を解読した。

「...よし、開いた、問題はここからだね」

「オフィスの見取り図は先日、無人偵察機を使って作成しました...織藤が使用している部屋が一番奥です」

ジュリは、自ら作成した見取り図でアスカたちを誘導した。

「...！！」

アスカたちは覆面を外し、暗闇に包まれたまま織藤の部屋に入室するつもりであったが、そこである問題が起こり、立ち止まる結果となった。

「これは簡単に開きそうにないわね...」

アスカたちは困惑した表情で扉に設置されたある物に目が留まった。

「.....これは生体認証装置のようですね」

「生体認証ヲ行イマス、指紋、網膜、声紋ノ順デ認証ヲ行ウノデオ願イ致シマス...」

アスカたちが扉の前に立つと、自動音声流れるが、今の彼女たちに為す術はなかった。

「.....！？.....あれ？」

その時、ジュリはあることに気づき、表情が一変した。

「...どうしたの？」

「.....先輩たちが居るフロアに反応が...！オフィスに入ろうとしています...このままでは接触します！」

「何ですって！？」

アスカたちは引き揚げようとしたが、大きな障害に阻まれようとしていた。彼女たちに接近する気配が三つ、さらなる非常事態で危機が深まるばかりであった。

「.....ち！」

アスカたちに隠れる時間と場所はなく、謎の訪問者と急遽対面することとなった。

「え？そんな...！」

アスカたちは謎の訪問者と顔を合わせた途端、目が点になり冷や汗が大量に流れ出した。彼女たちの前に姿を現したのは、織藤、猪本、御手洗と標的トリオであった。

「.....どうして？帰ったはずじゃあ...」

「...仕方がない、どちらにしる退却よ！！」

「.....え？あの.....ちょっと待って！」

焦ったアスカたちは、強行突破しようと織藤たちに軽く襲い掛かろうとしたが、どうも彼らの様子がおかしかった。

「え...?」

アスカたちは、予想外の織藤たちの反応で力を抜けていき、咄嗟に立ち止まった。標的トリオは、侵入者であるアスカたちに驚愕しているが理由が違うようであった。彼らはそっと首元辺りを触れた後、再びアスカたちに話し掛けようとした。

「...もしかしてアスカとユリカなの?」

アスカたちは織藤の発言で自分の耳を疑うほどの衝撃を受けた。意味深な発言を耳にしたアスカたちは、彼らが偽物で顔馴染の人物だということを理解したのであった。

「.....あなた、まさか...マミコさん?」

「そうよ、二人も変装している仲間よ」

「奴らに化けているってことは.....あなたたちが引継ぎを.....?」

アスカは織藤に変装しているのが先輩のマミコだと分かり、堂々と質問を続けた。

「...秘密警察の命令で武器密売組織の黒幕を追っていてね...何も聞かされていないけど、元々はアスカたちが担当していたの?」

「...ええまあ、捜査を続けるつもりだったんですが...本業の方が忙しくなったんでチームから外れまして...」

「現在、私たちの班は二班に分かれて公演を行っているんだけど、ようやく関西に戻って来れたと思ったら副業の連絡が入ったのよ...今月末にこの地区の劇場で公演があるの.....」

「マミコさんの所はツアーでしたね、最後に大阪ってわけですか~」

「...それにしても何でまた捜査から外されたのにこんな場所に居るの?」

「...え...えっと...これはですね.....」

アスカたちは、マミコの的確な質問で頭を抱えて簡単に事情を説明しようとした。

「...成程、本業の方が大事だけど、副業の方も中途半端に終わらせたくないわけだ...私たちでは力不足？」

「...いえ、とんでもない...！！マミコさんたちが引き継ぎをしていることは知らなかったわけですし...」

マミコは、アスカをからかって遊んでいた。

「でもやっぱり、今回のあなたは本業よりも副業に力を注いでいるように感じるわ...私の言ってること間違ってる？」

「.....いいえ、確かに最近どうかしています...マミコさんたちに任せておけばいいのに.....どうも引掛かるところがあるのでこの方法を選びました...邪魔なら消えますけど...」

「.....アスカ」

マミコは、じっとアスカの目を見ながら考え込んでいた。

「.....出来れば捜査を続けたいんです、協力し合って解決させませんか？勿論、手柄は全てマミコさんたちの物です...どうか力を貸して下さい！」

アスカは、真剣な眼差しでマミコに熱意を訴えた。

「.....分かったよ、極秘の合同捜査ってわけね...手を貸すよ！」

マミコは、可愛い後輩のために一肌脱いだ。その途端、アスカの強張った表情は一気に和らいだのであった。

「...それで彼らに変装したのにはちゃんと意味があるんでしょう？」

「まあね、一つは彼らになりすまして堂々と侵入するため...防犯カメラは誰かさんに細工されていたから意味はなかったけどね～」

「...すみません、それにしても上手く化けていますね～さすが変装専門～！」

「そうでしょ♪変装マスクはうちに開発部の力でリアルに再現されていて、体格は特殊なスーツと靴で調整可能、最新の変声器で違和感なく本人と全く声が出せるわ、首元を触れることで声を使い分けが可能ってわけ...」

「...色々工夫されていますが、それだけ準備するのにかなり苦労されたのでは？」

「まあね、変装した理由の二つ目は...この生体認証装置のため...うちの後輩が一度ここに侵入して分かったの...彼に接触して認証データを入手したわけ...詳しい話は後にして、入れなくて困ってたんでしょう？先に開けるわ...」

織藤に化けたマミコは、生体認証装置の前に立って、嚴重な扉の鍵を開けようとした。アスカの担当事件を引き継ぐことになったマミコの班は、情報収集のために標的との接触を試みた。マミコはアスカと同じように織藤が経営するオフィスに秘密が隠されていると推測し、侵入捜査を計画、セキュリティーを攻略しようと念入りに準備を行った。

まず、マミコは織藤や彼の部下に変装してオフィスに侵入することを企てて、精巧な変装アイテムを造ろうとした。その機会は思ったより早く訪れて、ある起業家が集まるパーティーに織藤たちが出席すると情報が入り、マミコ班はそのパーティーに潜入しようとした。彼女たちはビジネス関連雑誌の記者に扮して、織藤たちに接触、変装マスクとスーツを製作するために三六〇度カメラで変装する人物をこっそり撮影した。撮影された写真は立体画像となり、それをもとに変装アイテムが製作された。さらには、織藤が触れた食器から指紋を採取し、偽の取材の際、彼の声を録音して声紋を採取、一番苦労したのは網膜の採取であった。マミコたちは、トイレで待ち伏せて織藤が一人になるのを狙った。不意を突かれた織藤は、微量の神経を麻痺させる薬を投与されて昏睡状態となった。マミコはその隙に彼の網膜をコピーしたのであった。コピーされた網膜は、特殊なコンタクトレンズに記録された。

「.....よし、全てクリアした！」

マミコのお陰で、問題なく生体認証は完了して扉は開かれた。

「助かりました...入っても問題ないようですね...」

「暗い所でなんだけど、簡単にメンバーの紹介でもしましょうか...」

マミコがそう言うと、猪本と御手洗に変装していた歌劇団メンバーが軽く頷き、マスクを脱ごうとしていた。

まず、猪本に変装していた歌劇団メンバーはマリエであった。彼女は所属する劇団の実力派中

堅スターの一人。高身長を誇り容姿端麗であることから圧倒的な存在感がある。少々評価される時が遅いが、先輩のアドバイスにより、潜在能力が引き出される。喋りは達者な方でムードメーカーの役割を果たしている。一方、裏稼業では特攻を担当して`動く火薬庫、として恐れられている。ちなみにアスカと同期。

「お～マリエちゃん、久しぶりだね～」

「ほんまやな～トップになって一段と格好良くなったな～」

マリエは、アスカの肩を軽く叩いて同期の再会を素直に喜んだ。

次に御手洗に変装している歌劇団メンバーについてだが、彼女の名はアヤギ、ダンスを得意とする歌劇団スターである。透明感がある舞台人として注目を浴びて地道に経験を積んでいる。また、最近では幅広い個性的な演技も評価され、今後の活躍に拍車が掛かっている。裏稼業でも注目株で、剣術と銃術を併せ持った奥義を会得して危険な現場に足を踏み入れている。ちなみにユリカ、ジュリと同期である。

「お～アヤちゃんだったか～」

「久しぶりやな～ユリカは前会った時より遅くなったね～」

ユリカ、アヤギはアスカ、マリエと比べて再会の喜びが控えめであった。マミコの班は何故か関西色が強烈であった。

「...あと別の場所に二人居るわ.....こちら現場班...トラブルは無事解決...作戦を変更する...」

「...こちら待機班、了解しました、プランCに移行します」

機材に囲まれた空間に待機している歌劇団メンバーの一人の名はユリエ。真面目な体育会系の中堅歌劇団スターである。責任感は強い方で任されたことは確実にやり遂げる。裏稼業では現場とオペレート作業を担当しており、ボーガンやライフルでの狙撃を得意としている。ちなみにユリカ、ジュリ、アヤギとは同期。

「.....ユリカが居るようですね...よろしくお伝え下さい～」

ユリエは淡々としていたが、密かにユリカに会えないことを悔やんでいた。

「...何か現場は賑やかですね～いいな～」

待機しているもう一人の歌劇団メンバーの名はアスミ。歌劇団若手ホープの一人で彼女の姉も同劇団に所属していた。人懐っこい性格で数々のキャリアを積み、多くのファンに愛されている。また現代的なスレンダーな体型が魅力的で舞台映えする。裏稼業ではユリエと同じように現場内勤両面を担当している。

「...予定時間をかなりロスしています、出来るだけ急いで下さい」

「了解、外の方、ちゃんと見張っててね...」

「アスカさんたちも急いで下さい...嫌な予感がします...」

「分かったわ、ジュンちゃん...」

アスカたちは、待機班の忠告を受けて作業のペースを上げようとした。

「それじゃあ手分けして重要な手掛かりを探しましょうか...これだけ居ればすぐに見つかるはずだよ...」

一番先輩であるマミコの指示でアスカたちは速やかに動きだし、部屋中を物色し始めた。

「...パソコンがあります、この中のデータを調べれば何か見つかるのでは？」

「じっくりと調べている暇はないわ...持ち去るわけにはいかないし...コピーにも時間を要する...別のを探して...！」

アヤギは、すぐに手掛かりになりそうな物を見つけ出すが、マミコにあっさりと却下されて表情を曇らせた。

「何か持ち運べそうな物があれば...」

アスカは念入りに調べ上げ、一枚の絵画が目に入ると自然と手が伸びて、額ごと外そうとした。

「...何か見つかった？」

マミコがアスカに声を掛けると、彼女は手応えがある表情を浮かべながら振り向いた。

「...これはどうでしょう？」

アスカが見つけたのは隠し金庫のようであった。それは最新のもので、ロックを解除するには指紋照合と暗証番号が必要であった。歌劇団メンバーは金庫の前に集まり興味を示していた。

「...試してみるか」

マミコが採取した織藤の指紋で照合を試みると金庫に反応があり、第一のロックが解除された。

「...よし、これであとは暗証番号だけね、タッチパネル式なんだ、ダイヤル式なら自信あるんだけどな～...」

マミコが悔む中、その他メンバーは暗証番号を解読する方法を考えた。

「あなたたちの知恵を貸して...何か方法はない？」

アスカは待機している後輩たちを頼ろうと返事を待った。しかし、彼女たちもお手上げのようであった。

「...その金庫どういった物か調べましたが、かなり厄介ですね、日本では販売されていない特注です...暗証番号は十五桁...一時間経つと番号は変更されるので性質が悪い...」

「...多少時間掛かってもいいわ、そっちでどうにかならない？」

「...生憎、その金庫はオフィスのセキュリティーと隔離しているためアクセス出来ません...すみません、お力になれなくて...」

アスカたちは頼みの綱が切れて、時間の無駄遣いをするしかなかった。

「...どうする？もうヤケクソで壊すといってもかなり頑丈そうよ...諦める？」

「...えっとちょっと待って下さい.....？」

マミコがアスカの判断に任せようとする中、彼女はある物は頭の中に過ったようであった。

「何か良い案が浮かんだの？」

「.....ええ、これは賭けですけど...」

アスカには秘策があるようで、そっと上着の内ポケットから何かを出した。それは小型のタブレット端末のようであった。

「...それは？スマートフォンと似てるけど...役に立つの？」

「ええ、これは特殊タブレットでスマホのように通話、通信機能はありませんが、色々と役に立つアプリが入っています...例えば暗号解読のアプリがあるので...デジタル機器なら上手くいくと思います...」

マミコたちはアスカを信じて暗証番号の解読を任せた。

「2857****...」

アスカが暗号解読のアプリを起動させると、タブレットに番号が表示されて自動検索が始まった。それから約一分後、暗証番号が確定したようで、開かずの金庫に異変が起きた。

「.....カチ」

その時、金庫からかすかに物音が聴こえて青いランプがついた。これで第二の鍵は開いたのであった。

「凄いね、それ...秘密警察の備品？」

「ええ、実はこれ、同期のセシルが考えた物なんです...機種名も彼女の名前で...」

「へえ～セシルちゃんは退団後も副業頑張ってるんだね～彼女、本業でも努力していたから...舞台の仕事が決まって良かったわ...」

マミコ率いる班は退団したセシルのことを思いだして軽く微笑んだ。何はともわれ、特殊タブレット `C E C I L`、が大いに役に立った。早速、彼女たちは問題の金庫の中身を確認しようとした。

「.....これは.....！！」

金庫の中には一万円の札束、危険薬物が入ったポリ袋、拳銃一丁と、闇社会に通じる物ばかりであった。

「思った通りの連中だ、そこらの暴力団組織と変わらないですね...」

「うん、でも...これは今回追っている件の手掛かりにはならない...材料が足りなすぎるわ...他に何かない？」

「うーん...そうですね.....！！？」

マミコの一言で期待が薄れていく中、アスカは金庫の奥に何か隠されていることに気づいた。それは書類が綴じられたファイルのようであった。

「...これって.....まさか...！！」

アスカたちがライトを照らしながら謎の書類に目を通すと、表情が一変した。書類の内容は、密売している武器の受注、納品書や商品マニュアル、裏帳簿であった。

アスカたちは、これでようやく有力な手掛かりを発見したのであった。アスカたちは、速やかに書類の内容を写真に収めていった。

「収穫ありね、これなら奴らを丸裸に出来るわ、アスカ、やったわね.....？」

その時、マミコの声はアスカの耳に届いていなかった。彼女は書類の内容に夢中であった。

「...海外の銀行口座が.....仰天しそうな金額が振り込まれています...例の闇の取引と関係があるのでは...振り込んだ側の名義は...ヴォルフ...ド...ラギエフ...ロシア人？」

「それって国内だけでなく、海外にも顧客が居るってこと？」

「...取引の内容も記されています、商品の納品日は一週間後...取引開始時間は一六時ジャスト...取引場所はここのです...」

「.....外国の人間が関わっているとすると、思ったより深刻な事態ね...私たちだけでは手に負えないかも.....！！」

その時、マミコの無線に待機班からの緊急連絡が入り、動揺が隠せなかった。

「.....マミコさん、まずい状況です！社員と警備隊がビルに入って行って...そちらに向かっているかと...！！」

「...了解...あなたたちはもう帰っていいよ、こっちは自力で逃げ出すから...」

「了解しました...どうかご無事で...！」

マミコは待機班との通信を切って一呼吸した後、アスカたちに現状を伝えようとした。マミコの顔色を窺い、歌劇団メンバーはすぐに悪い状況だと悟った。

「.....バレたんですか？」

「ええ、こっちに標的と警備隊が向かっているわ、直ちに脱出しないと...」

アスカ班、マミコ班は急ぎ足で脱出しようとするが既に遅く、追手が待ち構えていた。エレベーターホールには、御手洗と数名の警備担当の部下が立っていた。

「...ちっ、ここは駄目ね...！」

「.....随分と大人数だな、御嬢さんたち、うちの会社に何か用かい？」

「...前科のある元警官か！」

アスカが御手洗のことをぼそぼそと呟くと、彼の表情は一変した。

「...おや？あんた見たことがある顔だな、確か以前東京で会ったよな？.....それにここでも会ったことがあるような...何を嗅ぎ回っている？」

「.....あなたが勤めている会社の悪事を暴きに來たのよ...」

アスカは、鋭い目つきで御手洗に侵入した理由を明かした。

「...そうか、やはり東京で会った時に始末しておくべきだった...あとのメンバーも仲間か？何者なんだ？」

「詳しくは話せない...大きなリスクを背負っているんでね...映画に出てくるスパイみたいなものよ...」

マミコは、胸を張って御手洗に正体が明かせないことを述べた、

「スパイヒーローの真似事はもう出来ないぞ...お前たちは俺たちのことを知りすぎた...悪いが大人しく通すわけにはいかない...！」

御手洗たちは殺気を放って、屈強な壁を作った。

「.....一緒に戦えば共倒れになる確率が高い...どうする？」

「私たちが引きつけるんで、その隙に脱出して下さい」

「悪いね、また連絡するよ...」

マミコは、アスカの案に賛同してマリエたちと共に脱出することを考えた。

「作戦タイムは終わったか？お前たちは袋の鼠だ、諦めな...」

「...私たちは往生際が悪いんでね、抵抗はさせてもらうよ」

アスカは自信に満ちた表情を浮かべて構え始めた。

「くたばれや、クソアマ！！」

「何とでも言いな」

御手洗たちは歌劇団部隊に襲い掛かろうとするが、マミコ班は標的が居ない通路を選んで非常階段がある場所まで疾走した。

「逃がすな！追え！.....！！？」

御手洗たちは逃げるマミコたちを捕らえようとするが、アスカとユリカが間に入り激闘は必至であった。

「おたくらの相手は私たちだ、アホンダラ」

アスカは警備数人を蹴り飛ばし、御手洗を挑発した。

「...チャ」

「.....止めろ！後処理が面倒だから使わない方が良い」

御手洗は、銃を撃とうとする警備に注意してマミコ班を諦めてアスカ班に狙いを定めようとした。

「敵ながら気が利くね、これでフェアになった～」

今回、アスカたちは武器を携帯しておらず、まさに地獄に仏であった。一方、マミコ班は脱出するために非常階段を利用しているが、何故か下ろうとせず、上っていた。その判断は正しく、一階には警備が待機していた。

「...ざわざわ」

オフィスフロアに残っている人間もアスカたちの騒ぎに気づきだし、通報を受けた警察も現場に到着しようとしていた。

「...はあ、はあ」

織藤は、息を切らしながら侵入された自身のオフィスに向かっていた。かくして、殺伐とした夜に因縁のある二人が引き寄せられたのであった。

ミッション7 鏤められた悪石 後篇

七月某日の真夜中、アスカは今回追っている事件の手掛かりを掴むべく、織藤のオフィスに侵入することを企てた。しかし、そこにアスカの引継ぎで捜査をしている織藤たちに変装したマミコの班と鉢合わせとなり、急遽、合同捜査に切り替わることとなった。彼女たちはお互い協力し合って有力な手掛かりを発見するが、不法侵入がばれてしまい、御手洗率いる警備隊と相見えることとなった。

「.....非常階段に三名の侵入者の姿あり、残り二名は二十九階で交戦中...各班は直ちに所定の場所について応戦せよ.....」

アスカたちが侵入している複合商業施設のセキュリティーシステムは、彼女たちの細工で誤作動を起こしていたが、ようやく回復したようであった。エレベーターは緊急停止して脱出ルートは非常階段しかなかった。マミコ班（マミコ、マリエ、アヤギ）は脱出するために非常階段を使っているが、何故か下降せず上昇していた。彼女たちは一切休まず階段を駆け上がり、屋上へと辿り着いた。

「...皆さん、準備はOK?」

「上はやっぱり涼しいですね~いつでもどうぞ~♪」

「こっちも準備OKです」

「では行きましょうか?」

マミコ班は、大阪の夜景を一望出来る百八十メートルの高さから勢いよく飛び降りた。彼女たちはそのまま地上の闇に吸い込まれていくが、脱出を諦めて自決するわけではなかった。飛び降りた歌劇団メンバー三名に異変が起きて、落下速度は遅くなっていくのであった。実は彼女たちの変装スーツにはパラシュートが仕掛けられていたのであった。

「よし、成功~♪」

無事にパラシュートが開き、かすかに笑みを浮かべるマミコ班は、侵入していたビルの向かいにある広大な空き地へと着地しようとした。そこは元々、JRの貨物エリアであったが、再開発計画により、完全に撤去されたのであった。

「ああ~気持ちいい空中散歩だった、ひとまず解散よ、収穫はあった、上に報告しないと...」

「...アスカたちは...大丈夫でしょうか？」

「無事を祈るしかないわ、ここで苦戦するのであれば、合同捜査どころじゃないでしょう...行くわよ！」

「...はい！」

交戦中の同期を心配するマリエ、アヤギに対して、マミコは敢えて厳しい言葉を投げ掛けた。そして、三人は静かにその場を後にした。

一方、アスカたちは足止めを食らい、御手洗たちの猛攻を受けていた。

「...あんたたちと遊んでる暇はないんでね、そろそろ失礼させてもらうよ〜」

「...これは驚いた、もう俺だけじゃないか、その強さ...ますます気に入った.....！」

御手洗は、興奮しながらアスカに目がけて鉄拳を放ったが、それは別の者に防がれた。御手洗の拳を掴みとったのはユリカであった。

「.....邪気に満ちた汚らわしい手だ...そんな手でうちのリーダーに触れるな」

「...何だ？嫌な目で俺を見るな！...お前が相手になるってわけか？」

ユリカと御手洗の間に火花が散り、二人の世界が広がろうとした。

「そんな奴、さっさと片付けちゃいな」

「ええ、少し待っていて下さい」

「お前、いい面構えだな、だが、すぐに醜い顔に変えてやるぜ、泣いても容赦しねえ」

「...その台詞、そっくりそのまま返そう、さっさと掛かってきな！」

御手洗は、狂気に満ちた目でユリカに襲い掛かった。彼はボクシングスタイルで標的を捉えた。

「シッシッシッ...！」

御手洗はファイティングポーズを取った後、ラッシュをかけてユリカを追い詰めていった。彼はストレート、ジャブが彼女の体を抉り、自分のペースに持って行こうとした。

「...！！」

攻められ続けるユリカも黙っておらず、反撃の時を狙っていた。彼女は頭脳派で慎重に相手の動きを分析したのであった。

「...どうした？...防いでばかりでは面白くない！サンドバッグにされたくなかったら反撃して来い！！」

「...！」

その時、ユリカの目の色が変わり、御手洗の攻撃はあっさりと流された。

「...な？」

急に攻撃をかわされた御手洗は、力が抜けて隙を作ってしまった。ユリカはその時を見逃さなかった。

「...ボグオ！」

その時、ユリカの気合いを込めた正拳突きが御手洗にクリーンヒットした。彼はそのまま壁に叩き付けられ、すぐに立ち上がれずにいた。

「お見事、ユリカちゃん」

アスカは、楽しそうにユリカたちの戦闘を観戦していた。

「どうしたの？夜も更けて眠たくなった？それとも今の効いた？」

ユリカが余裕を魅せつける一方、御手洗は屈辱感を味わい機嫌を悪くしていた。

「一発当てたからって調子に乗るなよ...本番は.....！！？」

御手洗は喋っている途中、ユリカが視界から消えて、気づけば自分の背後に忍んでいた。

「悪いが急いでるんでね...ここまでだよ」

「う.....！」

ユリカは、御手洗に素早く手刀を浴びせて気絶させた。

「すみません、お待たせして...」

「...いいよ、気にしなくて...行こうか」

アスカたちは、御手洗たちの包囲網を突破して非常階段を駆け下りていった。

「...こちら待機班...警官隊の車両がそこまで来ています...急いで下さい！」

「分かってるって！ちゃんと迎えに来てよ～♪」

アスカたちは焦ることなく、その時のスリルを楽しんでいる様子であった。

「ファンファンファン...」

アスカたちが侵入している複合商業施設付近には赤色の光がぼつぼつと見えて、パトカーはサイレンを鳴らして、まもなく現場に到着しようとした。また通行人が騒ぎに気づきだして自然と野次馬が増えていくのであった。そこにはアスカの標的である織藤が紛れていた。彼は侵入された自分のオフィスの様子を見に行こうとして駆けつけた。

「.....尚也...社長...！」

さらに、そこに猪本も駆けつけて偶然にも合流することとなった。

「慌てて引き返してきたぜ、中の様子はどうなっている？」

「分からない...御手洗さんに任せているが全く返事がない...家で監視カメラの映像を確認したが、侵入したのは五人...あの金庫を開けて中身を見られた...どうやって僕の部屋に入ったんだ...？」

「例の妙な連中の仕業に違いない！俺たちの裏の顔を暴く気だ...！」

「.....何たる失態だ、もうなぶり殺したい気分だ.....!？」

織藤が怒りを露わにする中、一つの気配が彼らに接近していた。

「...プアプアー！」

「.....!!!？」

その時、黒いキャラバンが猛スピードを出しながら現れて、周りの野次馬にクラクションを浴びせた。暴走車の出現で騒然となるが、さらにビル内にも異変が起ころうとした。

「...ダダダダダ」

ビルの出入り口が開くとアスカとユリカが姿を見せて、そのままバンの方に走って行った。

「...お待たせ～」

アスカたちがバンに近づくと扉が開いて、彼女たちは急いで車内へと飛び乗った。

そして、バンは逃げるようにその場を後にした。

「...ちっ、逃げ足が速い連中だ、御手洗さんめ、後で説教だな...警察は上手く誤魔化せ...隠し金庫のことは絶対バレないようにするんだ...！」

「分かってるよ、任せろ、お前は帰って寝ていいぞ」

「お言葉に甘えてそうさせてもらう...今夜の件は明日の会議で話し合おう...」

織藤は野次馬を装って、警察を避けようとした。警察の人間が続々と複合商業施設に足を踏み入れようとするが、アスカたちが侵入した痕跡は残っておらず、歌劇団メンバーは任務を遂行させたのであった。

「.....ブオオオオオ」

アスカたちを迎えに来たバンを運転しているのは、後輩のジュンであった。車内は改造されて機材が密集しており、まさに動く要塞であった。

「危ないところでしたね、冷や冷やしましたよ...」

「無事だったんだから良いじゃない～収穫もあったしさ～この撮影した写真、データ化お願いね～」

アスカはそう言って、後輩のジュリに有力な情報が保存されているSDカードを渡した。

「どうにか奴らの化けの皮を剥がす物を手に入れましたが...これからどうなるんでしょうか...どうも関わってはいけない場所に立っているように思うんですが...」

「今さら何ビビってんのよ？事件解決まであと少しよ、仲間もまた増えたし...胸張って行こうよ～はは～」

アスカは楽観的な態度を取り、後輩たちは呆れ顔であった。アスカたちは闇社会に通じる織藤たちを追い詰めようとしたが、方が付くのはまだ先のことであった。彼女たちはまだ標的の恐ろしさを知る由もなかった。

それから翌朝、騒ぎがあった複合商業施設は、嘘のように落ち着きを取り戻して、問題なく機能していた。ただ、織藤のオフィスはアスカたちのことで重い空気に包まれていた。彼は幹部の社員を呼び出して緊急会議を開こうとした。

「...朝早くから集まってもらって申し訳ない...でも大事なことなんだ、昨夜、皆に緊急のメールが届いたはずだ.....まず、これを観てもらおう.....」

織藤がそう言うと、室内に設置された大型モニターの電源が入り、昨夜録画された監視カメラの映像が流された。織藤のオフィス内には無数の隠しカメラが仕掛けられていた。撮影された映像はリアルタイムで織藤の自宅のパソコンに送信されることとなっている。彼は、帰宅後に社内の監視映像を確認することを日課にしているが、昨夜に限ってはすぐに眠ってしまい、侵入に気づくのが遅れてしまった。

ちなみに隠し金庫が開くと、緊急事態を知らせるメールが幹部に届くようになっている。幹部は映像を観て、驚きのあまり絶句していた。

「ご覧の通り、うちの会社に不法侵入する輩が現れた...設立以来、初めてのことだ、侵入者は五名...そのうち三名は僕と副社長の猪本、営業部長の御手洗に変装しているわけで...生体認証もクリアしているし...明らかにプロの犯行だ」

織藤は、生体認証を解除した模様を拡大するよう秘書に命じて話を続けた。

「...何処で誰がどうやって僕の生体情報を入手したかだが...何か分かったか？」

織藤は、隣に座っている猪本に質問を投げ掛けた。

「.....まだ調査中だが、ここ最近、我々と接触した関係者から不審者をピックアップしてみた...すると三名かヒットした...」

織藤はそう言って、モニターに不審者の画像を映し出した。

「...彼女たちがそうか？」

「ああ、偶然にも全員フリーの記者だ...侵入者と顔が一致する...見覚えは？」

「...ああ、この眼鏡を掛けた女性、うちに訪ねて来たね、魅力的だったから覚えているよ...君の勤が当たったな...他の二名は確か...パーティーで...」

「そう、企業家、各界の著名人が集まるパーティーに出席していた...何か妙なことを訊かれたか？」

「...いや、特には...」

「何かされなかったか？変わったことは？」

「うーん.....そういえばトイレに入った途端、ぼーっとなって...意識を失った...目を覚ました時はトイレの個室の中だった」

「...それだな！意識を失っている間に生体情報を採取されたわけだ.....まんまとやられたな...」

「今の時代にくノ一を差し向けるとは...どういう組織か興味がある...進展があれば知らせてくれ...」

「了解だ...それで金庫の件はどうする？」

「...もう済んでしまったことは仕方ない...例の情報が世間に知れ渡れば、大問題だがその兆候は

なさそうだ、奴らも裏に通じる者なら慎重に動いているはずだ...念のためにもう準備に取り掛かってくれ...」

「...大丈夫なのか？また奴らが踏み込んできたら作戦はペアだぞ、奴らの居場所を突き止めるのが先決では？」

「奴らは簡単に尻尾を出さないだろう...だから予定を早めることを頭に入れた方が良い...当日に僕が居なくても作戦は実行出来るのだから...気にせず行ってくれ...」

「...分かったよ、俺より用心深くなったな、感心するよ」

猪本その他、幹部の人間は素直に織藤の策を了承したと思われたが、一人浮かない表情の者が居た。

「...何か質問でも？御手洗さん...」

「...いや、ない、大丈夫だ」

「もう失敗は許されませんよ！あなたは年上だが、立場は僕の忠実な番犬なのだから...」

「.....分かっている」

織藤は、片目で御手洗を睨み付けて嫌味を言い放った。御手洗はアスカたちを二度も見逃がしたことで屈辱感を味わい、いつもの威勢がなかった。

「これで話はまとまった、プランの変更を考慮して予定通り作戦を実行させる...内務の社員には従来の作業を行ってもらう、外務担当は猪本、御手洗の指示に従うこと...質問がなければ会議はこれで終了する！」

幹部は織藤に対して軽く頷き、それぞれの持ち場に戻って行った。その後、彼らはアスカたちのことを徹底的に調べようとしたが、歌劇団のことに全く興味や関心が向いていないため、正体を暴くことは一生叶わないことであった。

場所は変わり、東京、秘密警察都内エリア第二支部。責任者である白林は、歌劇団が捜査している武器密売事件の現状報告を耳にしていた。報告しているのはアカネであった。

「...アスカ班の引継ぎを受けたマミコ班が標的のオフィスに侵入して、無事に任務を遂行しました、有力な手掛かりも掴み、入手した情報が送られてきました...」

「...これは裏帳簿か、密売している武器のリストや顧客リスト、納品書も揃ってるな...アスカ君には悪いがお手柄だ...これで奴を挙げられる手段が出来たわけだが...」

白林は捜査結果に満足している様子であったが、アカネの報告にはまだ続きがあり、吉報ばかりではないことが彼女の曇った表情から窺えた。

「...実は気になることが...送られた闇取引の契約内容に目を通したのですが...」

「何が分かった？」

「まず、闇取引が予定される日時は七月二十日、十六時から...場所は大阪、奴のオフィスです...」

「おい、あと一週間もないじゃないか！ どういう取引なんだ？」

「...恐らく武器の密売でしょうが、今までと規模が違うようです...！」

「...と言うと？」

「取引相手は海外の銀行口座に契約金を振り込んでいます...しかも日本円にすると尋常ではない金額です...！」

「振りこんだ顧客についての情報は？」

「...名義はヴォルフ・ドラギエフとなっています」

「ロシア人か？...何処かで聞いたことがある名だ...」

「念のために犯罪者リストに登録されてないか、本部に調べてもらっています、あと、ICPO（国際刑事警察機構）にも調査依頼を...じき、結果が報告されるかと...」

「相変わらず仕事が早いな、それにしても海外にも顧客が居るとなると面倒だな...彼らを挙げるのはまだ先になりそうだな、どうも雲行きが怪しい...」

白林は、長年の経験と勘から標的が予想をはるかに超えた存在であることを認識した。

一方、アスカたちは本業に集中しており、彼女が主演を務める公演の稽古は大詰めを迎えようとしていた。稽古前、公演作品の舞台となるオーストリアに来訪したことで、世界観を肌で感じて、表現力が高まり、彼女演じる架空の存在「死の世界の君主」は完成されようとしていた。アスカたちは芸事に磨きをかけていき、時間が経つのを忘れるほどであった。気づけば日が沈んで、稽古に取り組んでいる劇団員の数は、徐々に減っていた。さっきまで賑やかだった稽古場には静けさが漂い、まるで公演の世界をイメージした空間であった。稽古場に残っているのは、アスカを含めた主要メンバーばかりであった。

「.....本番まであと少しだね、皆、調子はどう？」

「どうにか落ち着いて来ました～役替わりなんで覚えることは多いですが...」

アスカの質問に答える彼女は、歌劇団実力派中堅スターの一人であった。名はアキ。

一見大人しめであるが、熱い気持ちを内に秘めている正統派の舞台人として注目を浴びている。アスカ班には欠かせない人材で、面倒見が良いことから後輩の頼れる兄貴分として慕われている。裏稼業でも実力派で戦闘服を身に纏い、銃技や白兵戦、軍隊格闘技を得意としている。

「.....今作の重要な登場人物なんでとてつもないプレッシャーを感じます～（汗）」

そう話すのはアキと同じく実力派スターの一人、アイであった。彼女は綺麗な顔立ちに恵まれた容姿を武器に、新人時代から人気を博している。ただ、自分の実力に過信せず、努力家で誠実な人柄が窺えた。

裏稼業では勇敢な戦士として積極的に活動しており今後の活躍が期待される。

「...私たちはそろそろ帰ろうと思うんですが、アスカさんはまだ残るんですか？」

アスカにそう訊ねたのは、歌劇団中堅スターの一人のスマレであった。彼女はダンスを得意とし、着々とキャリアを積んでいるエネルギッシュな実力派である。アイとは同期であるが対照的で、彼女が月ならスマレは太陽のような存在であり、今後、二人の熱きトップ争奪戦の行く末が大いに注目される。裏稼業では恵まれた体格と身体能力で敵地へと乗り込む特攻担当。

「私はもうちょっと残るよ...ユリカたちも残るみたいだし...」

「そうですか、では私たちは失礼させていただきます...」

「うん、お疲れ～またね～」

アスカは、稽古場を後にする後輩に元気よく手を振って別れを告げた。これで稽古場に残っているのは、アスカ、ユリカ、ジュンの三人だけであった。

「...行っちゃいましたね～話しておかなくていいんですか？」

「うん、協力してもらうのはまだ先だから...いずれみんなを集めて話すよ...」

「そうですか、では、この面子で始めましょうか...」

アスカたちは稽古場の隅に座って、副業の打ち合わせを始めようとした。

「昨夜の潜入捜査はお疲れ様...マミコさんたちの助けもあって有力な情報を入手出来たわ...」

「証拠は揃いました、もう織藤たちを挙げるつもりですか？」

「それなんだけど、奴らも焦って対策を練っていることでしょう...どちらにしる、今の私たちに奴らを挙げる権限はないから無理な話よ...あと気になるのは二十日の闇取引よ...取引内容は未知だわ...」

「確かに規模が違うようですね、取引相手が海外の人間ですし...、私たちは手も足も出ません...もう少しで手が届きそうなのに...」

ユリカが悔しさを滲ませる中、アスカは専用のタブレット端末を鞆から取り出して操作を行った。

「苛立つ気持ちはよく分かる...でも頭を沸騰させただけでは何も見えてこない...冷静沈着に別の方向から探らないと...」

「...何か分かったんですか？」

その時、アスカは得意げな表情でユリカたちに何か伝えようとした。

「自分なりに捜査を洗い直すと色々と発見があつてね...うちの組織と何かと関係があるみたい...」

「どういうことですか？」

「去年の今頃に『蒼龍会』を追っていたことを覚えているでしょう？」

「ええ、今回、分裂した組織に接触しましたし...何か関係が？」

「当時、『蒼龍会』は中国の軍事企業と取引して兵器を買いあさっていたわけだけど...売り手のことは捜査の権限がないため、詳細は分からない...ただ、私は知っている！」

「どうして？」

「...リカさんよ、急遽、合同捜査になったでしょ...彼女は例の売り手を追っていたから...一緒に情報収集した時に偶然にね...売り手側の起業家、スン・ローファイは武器商人だけでなく、さらに裏の顔があったのよ...」

「一体何者なんですか？」

「...テロリストよ、中国国家公認の国際犯罪組織...組織名称は『麒麟』よ...彼はそこのメンバーだった...」

「リカさんはとんでもないのを追っていたんですね...！」

「...実は彼女から贈り物があつてね...担当した事件の詳細や犯罪者リストが載っている便利なデータベースよ、一年前の合同捜査の件も記録されていてね...」

「...そういえば、東京で御手洗たちが『武龍会』に売っていた光弾を放つ武器...初めて見たのはその時でしたね...」

「...そのことも詳しく載っているわ、まず、あの光弾を放つ長身銃...私たちはプラズマライフルと呼んでたけど、正式名称は荷電粒子銃『トールCPG-3』、だそうよ...元々はドイツの技術だったけど、スンの企業がばくったのね...」

「...何故、中国のテロ組織が密売していた武器が織藤の手中にあつたんでしょうか？」

ジュンの問いに対して、アスカは待つてましたと言わんばかりの素振りを見せた。

「かなり話が横道に逸れたけど、ここで本題よ、あくまで推測だけど、織藤の裏の顔は闇社会の

仲介人、`蒼龍会、にスンを紹介した張本人だったのよ、自らも武器を仕入れて利益を得ていると思うわ、スンはお得意様ね...」

「成程、彼の企業が目まぐるしい成長を遂げた理由が分かりました...まさか一年前から繋がっていたとは...」

「...ところが、彼の企業に予想外のことが起きてね...これを見て...」

その時、アスカはタブレットを操作を行い、画面に表示したものをユリカたちに見せた。

「...この記事は？」

「...去年の八月十五日に発行された香港の新聞の記事よ...翻訳してあるから読めるでしょう？この日、香港のオフィスビルで爆発が起きてね...驚くことにそこはスンが経営するオフィスだった...事故やテロの噂があったけど、結局のところ原因は明かされていない...妙だと思わない？」

「確かに何か臭いますね、意図的なものを感じます...」

「この謎の爆発により、その場に居たスンと社員は死亡...それが発端となり、スン企業は経営破たん、顧客、関連企業、株価にも影響して多大な損失を受けた...」

「...織藤も被害を受けたわけですか？」

「ええ、入手した裏帳簿や重要な書類を確認すると、売上が伸び悩んでいることがよく分かる...去年の秋あたりから急激に株も下がっているし...今は火の車のはずよ」

「...だとすれば、今月二十日の取引は何か意味があるんでしょうか？」

「...そうね、取引相手が外国人となると、何か引っ掛かるわ...例の中国企業と組んだ時も調子が良かったわけだし...」

「どうやら、彼は復活を目論んでいるようですね...」

「ええ、入手した資料にはヒントが隠されてなかった...マミコさんからの報告を待つしかないわ...」

「もう織藤に接触しないつもりですか？」

「...取引当日まではね、余計な刺激を与えない方が良いわ、彼らも馬鹿じゃない、下手に動けば噛みつかれるわ...」

「了解しました、アスカさんがそう言うなら従いますよ...報告は以上ですか？」

ユリカが問いただすと、アスカはまだ何か言いたげな表情を浮かべた。

「実はまだ伝えたいことがあってね、付き合ってもらえる？」

「...良いですけど、どういったことですか？」

「これもしカさんから貰ったデータベースで分かったことなんだけど...今度は猪本が関連している...二年前に遡るわ...」

「二年前というと、リカさんの退団公演の真っ最中じゃないですか...一体何が？」

「.....あっそうだ、その時ってユリカはうちの班に居なかったね...？」

「はい...異動になったのはアスカさんがトップになってからですよ...」

「ああ、そうか...でも、秘密警察に属する歌劇団なら知っているはずだから...バイオテロ事件のことを覚えてる？」

「それは勿論、覚えてますよ！神戸、大阪、東京で起きた大事件ですから...私は東京を担当していました...」

「うちの班は大阪、東京を担当していた、今でも大阪駅に行くと思出すわ...あの惨い戦場を...！」

「あれから二年経つんですね...」

当時、アスカと共に捜査に関わっていたジュンもしみじみと思い出していた。

「...あの、そのテロ事件と猪本にどういった関係が？」

「まあまあ順番に話すから...まず、例のテロの主犯だけど、名は城ノ内結城、彼女は元海上自衛

隊員だった...テロを起こした動機は社会への報復...」

「確か彼女...同僚の男性自衛官たちに強姦されたんですよね...？」

「ええ、被害者である彼女は犯人の実刑判決を望んでいたけど...犯人には無罪判決が言い渡された...一切罪を償う必要がなく、彼女ごと事件は闇に葬られたのよ...」

「...ちょっと待って下さい...まさかその犯人は.....！！」

ユリカたちは城ノ内を強姦した犯人の正体に気づき、愕然とアスカの顔を見た。

「...そう、猪本が集団強姦の主犯だったのよ、こんな所にも繋がりがあったとはね...リカさんはテロ事件解決後、単独で極秘捜査を行っていてね...それで判明したのよ、被害者は城ノ内だけじゃないと...」

「...それはどういう意味ですか？」

「組織絡みの隠蔽よ、猪本は守られたのではなく、見捨てられたのよ...上人間は不祥事をもみ消すために部下を切り捨てたのよ...ゴミのようにね...城ノ内が必死に強姦されたことを世間に訴えても、組織はひたすら妨害して抹消する...これが真実...汚い人間が作った筋書きよ...」

「リカ先輩はどうして隠蔽を突き止めようとしたのでしょうか？」

「...そうね、興味本位とは思えないけど、恐らく城ノ内を救いたかったんでしょう...妙に気が合ったみたいだし...」

「...でも、例え真実を解き明かしたとしても世間に明かすことは出来ません、管轄外の件ですから...」

「...そうね、私たちが出来ることは限られている...枠の外に出られる立場じゃない、他の誰かが明かすのを信じるしかない...」

「とんでもない人物が居たもんですね...」

「ええ...もし、猪本が有罪になっていれば...もし、彼が城ノ内を強姦しなかったら...あの惨いテロ事件は起きなかったはず...許せないわ...！」

アスカは怒りを露わにして、手を震わせていた。

「...別件ですが、何としても猪本を挙げましょう、勿論、残り二人も牢獄に招待します...！」

アスカは、ユリカの意気込みに胸を揺さぶられて笑みをこぼした。

「...あの、すみません、一つ気になることがあるんですが、よろしいでしょうか？」

その時、ジュンが小さく挙手して、先輩たちに質問を投げ掛けようとした。

「...ん？どしたの？ジュンちゃん」

「...先ほどからリカさんの情報提供で様々な問題が解明されていますが、一つ疑問がありまして...」

「何？言ってみてよ...」

「アスカさんが頂いたデータベースは、秘密警察が担当した事件の詳細が記録されているんですよね？」

「ええ、主にリカさんが秘密警察...歌劇団時代に居た頃に担当していた事件の報告書が載っているけど...」

「おかしくありませんか？テロ事件のことはまだしも...一年前の事件のことが載っているなんて...その時のリカさんは歌劇団の人間でもなければ、秘密警察の人間でもない...そんな彼女が何故報告書を上げたんでしょうか？」

アスカとユリカは、お互いの顔を見合わせてジュンの質問に衝撃を受けたようであった。

「...確かに妙ね、私としたことが気づかなかったわ...彼女は今、別の組織に属しているはず...その情報が記録されているなんてね...」

アスカたち、は胡坐を掻いたり腕を組んだりしてリカの報告書の謎を暴こうとするが、結局は何も閃かず迷宮入りとなった。

「...もう解散しようか、眠いし...」

これにて夜の会議は終わり、彼女たちは稽古場を後にしたのであった。

同じ頃、東京秘密警察都内エリア第二支部。その夜、白林は残業しており、長時間、パソコンの画面と睨めっこしていた。

「...ずっと同じ姿勢だと体が悲鳴を上げますよ～」

「...おっそうだな...君こそ、まだ残ってたのか？」

アカネは白林の部屋の扉を何度もノックしたが、彼は全くそれに気付いていなかった。

「先ほど、本部から連絡がありまして... I C P Oが例の件で情報を提供してくれたと...」

「ああ、そうか...有力な手掛かりがあったわけだな...？」

「...はい、資料をまとめていたので遅くなりました...報告してもよろしいでしょうか？」

「ああ、聞かせてくれ...」

アカネは、自分でまとめた資料を白林に配って報告を始めようとした。

「...織藤に契約金を振り込んだ例の取引相手についてですが...とんでもない経歴の持ち主でした...」

「...やはり、犯罪者か？」

「ええ、ヴォルフ・ドラギエフ...彼は元スペツナズです...」

「...ロシアの特殊任務部隊か、何故そんな人物が...？」

「I C P O Kから送られた情報を基に彼の経歴を説明しています...」

「頼む...」

ヴォルフ・ドラギエフ（年齢不詳）元スペツナズアルファ部隊隊員。彼が所属していた部隊は、ソ連KGB及びロシア連邦保安庁の特殊部隊で、任務はテロ対策、人質解放、輸送手段、国家施設の奪取と関連した過激派対策。その能力は、ロシアの特殊部隊の最高峰に位置している。中

でも彼は群を抜いており、数々の過酷な任務を遂行して戦場を生き抜いた。戦士としては優秀さを誇るが、人としては欠落した部分が見受けられ、冷酷無比で残虐性があることから敵だけでなく、味方からも恐れられている。やがて問題が起きて、上官に反抗的な態度を取ったことから除隊処分となり、彼の輝かしい戦歴は抹消される。その後、彼はしばらく消息が不明となるが、数年後に姿を現す。驚くことに彼は中東、欧州を拠点に活動する過激派組織「チェルノボーク」(スラヴ神話の死神であり、その名は「黒い神」を意味する)の最高司令官に変貌していた。彼の組織は国際指名手配されつつも、勢力を伸ばして密かにアジア進出を目論んでいた。

「...何とも恐ろしい相手だな、そんな危険人物が我が国に来るといえるのか...？」

「現在追っている闇の仲介人の織藤と取引したとなると、間違いなくやって来るかと...現在、海外の捜査機関が「チェルノボーク」を捜索しているようですが、消息は掴めていません...」

「...そうか、取引当日まで何処かに潜伏しているということだな.....現場の部隊はどうしている？」

「...本業をしながら次の指示を待っています、どうされますか？」

「当日まで織藤を監視させるんだ...ただ、大掛かりな潜入捜査はしなくていい...それと例の段取りはどうなっている？」

「...先ほど、本業の方が落ち着いたので、そのまま現場で合流すると連絡がありました...」

「そうか、良かった...これで手筈は整った...もう彼女たちに頼るしかないわけだ...」

「はい...」

白林は、秘密警察に属する歌劇団メンバーを厚い信頼を寄せて、その後の運命を彼女たちに託した。

それから朝を迎え、大阪北区複合商業施設、出勤で行き交う群衆の中に織藤率いる社員の姿があった。また、密かにいくつかの影が彼らを尾行していた。

「.....標的捕捉...秘書と部下を引き連れて出勤...潜入は行わず、このまま張り込みを続行する...」

「了解...」

張り込みをしているのはマミコ班に属する歌劇団メンバーであった。

名はレイコ。歌劇団の新時代を背負う若手スターの一人。普段はマイペースで大人しい性格であるが、舞台に立つと色気があり、才能溢れる人材として確固たる地位を築いている。裏稼業では現場を担当することが多々あるが、デジタル機器の操作に長けていることからオペレート作業も任されることがある。また、剣術は所属する班の先輩たちに叩き込まれて技術を高めている。

彼女は織藤たちと面識がないため、変装する必要がなく張り込みには打ってつけであった。その他のメンバーは複合商業施設に位置するホテルの宿泊部屋の一室で待機して、レイコと無線で連絡を取り合っていた。なお、彼女には超小型高性能カメラが仕掛けてあり、撮影された映像は待機班のパソコンにリアルタイムで送信されていた。

「...ちゃんと定時に出勤していますね、まあ自宅はすぐ近くですから...レイコだけに任せて大丈夫でしょうか？」

「彼女は優秀だから問題ないわ...それより出勤時の映像を見せてもらえる？」

マミコは何か気になる様子で、送信された映像を巻き戻しするよう、オペレート担当のユリエに頼んだ。

「...何かありましたか？」

「...うん、ちょっとね.....そこで停めて！」

マミコは巻き戻されていく映像に目を凝らして、気になる場面に指を差した。

「マミコさん...この映っている織藤たちに何か問題が？」

その時、マミコ班メンバーは、パソコン画面に釘付けとなった。

「...出勤メンバーに違和感があつてね、彼らの姿がないのよ、猪本と御手洗...必ずどっちか居るはずなのに...」

「...確かにおかしいですね、なんか不気味です...」

「...不吉な前兆でなければいいけど...」

「.....コンコン」

マミコが標的の不可解な点を見つけたことで、その場の空気が張り詰める中、宿泊部屋の扉がノックされた。

「.....誰？こんな朝早くに...誰かルームサービスでも頼んだ？」

マミコが冗談を囁く中、ノックした者は一切声を発しようとしなかった。

「...私が開けます」

「...注意してね」

マリエが代表して、ノックされた扉を恐る恐る開けようとした。

「...ガチャ！」

マリエは勢いよく扉を開けて、謎の訪問者を驚かそうとしたが、それは意外な人物であった。

「.....ども、お早うございます」

「.....え？」

突如、マミコたちの前に現れたのは五人の女性であった。

「.....何かすみません、連絡せずに来ちゃいました～」

マミコたちは、女性五人の朗らかな表情を目にして胸を撫で下ろした。女性五人の正体は歌劇団メンバーであった。彼女たちは、秘密警察都内エリア第二支部の命令でマミコ班に派遣されたのであった。

まず、マミコに言葉を発した歌劇団メンバーの名はアヤコ。彼女は圧倒的な歌唱力を持ち、表現豊かな演技に定評があるマミコ班のナンバー2。現在では舞台に立つと、独特な表現力と自然と滲み出る妖艶さが際立っている。なお、裏稼業では果敢と敵地に突入する主力メンバーである。彼女の美しい歌声は武器にもなり、相手の武器を使用不能にする効果がある。

「...ほんとに驚かさないでよ、敵が乗り込んできたと思ったじゃないの！」

「...あ...あの...ごめんなさい...悪気はなかったんですが...」

アヤコがマミコの怒りを鎮めようと説得した。

「...まあいいわ、忙しい中、駆けつけてくれたのは感謝するわ」

「無事、公演が終わったんで合流しました、丁度、現場の近くの劇場で良かったです」

「そういえばそうだったわね、私たちも今月末からそこで公演が始まるわ...」

「あの...捜査は順調ですか？何でもしますんで言って下さい！」

「...今、レイコに標的の監視をお願いしているんだけど...派手に動くなと言われてね...当分出番はなさそうよ...」

「...そうですか、相手はかなり手強いですか？」

「そうね、追っているのは想像以上に大きいかも...下手すれば全滅よ...！」

マミコは弱気な発言をして、アヤコは彼女の意外な一面を目にして冷や汗を掻いていた。彼女たちの目の前には織藤の潜むオフィスビルが見えており、手が届きそうであったが悍ましい空気が覆われているせいで近寄りがたかった。

かくして、役者は揃ったわけだが混戦乱戦は必至で運命の日は刻々と迫っていた。

ミッション8 凶鳥飛来

闇の仲介人、織藤が本格的に動こうとする日が迫る中、秘密警察に属する歌劇団は即座に対応出来るよう体勢を整えていた。マミコ率いる班は、黒幕のオフィスが見える大型複合施設のホテルエリアから監視しており、後から別班が合流してきたのであった。

「マミコさん、お待たせしました、我々五人も力になろうと思います！」

合流した別班はアヤコが仕切り、その他四人のメンバーは実に頼もしい存在であった。

まず、一人目はカオリ。歌劇団入団時、優秀な成績を収めた実力派中堅スター。現在は、男前から個性的な脇役までと幅広く役柄をこなす舞台人として活躍中。学生時代はホームステイ経験があるため語学は堪能。裏稼業ではしっかりした性格から自ら先陣を切り、マミコやアヤコが不在の場合、指揮代行を任される。

二人目はサキ。彼女は、愛らしい表情からは想像出来ない磨きがかかった演技力、歌唱力の高さが評価され、スターの階段を地道に駆け上がっている。裏稼業では現場を主に担当しており、入念に手入れされたリボルバー銃S&W M26（ハイウェイパトロールマン）と名刀、`鬼神丸国重、を備えて敵地に攻め込む。アスカ班のアイ、スマレと同期である。

三人目はカリン。美しい顔立ちに合わない？可愛らしい声にギャップがある若手ホープ。ダンスと程よく感情が伝わる芝居の力を武器に成長している。裏稼業では現場を担当して隠密部隊に属している。同期は同班のアスミ。

四人目はヒトミ。普段はにこやかでマイペースな性格であるが、いざ、舞台に立つと美しいダンスを披露して観客を魅了させる若手ホープの一人。また、苦手なことはすぐに克服出来て、そこから頭が切れる人物だと窺える。裏稼業では現場を担当して日々磨かれた剣術で敵をねじ伏せる。

かくして、マミコ率いる精鋭メンバーが揃ったのであった。

「.....ところで今の捜査方法を変えられないんですか？標的を目の前にして何も出来ないなんて...」

その時、アヤコは現状に疑念があり、マミコに気持ちを訴えかけた。

「...あんたの気持ちは分かるけど、上の判断よ...一足遅かった...ここで真実を突き止めても意味

がない...さっきも言ったけど、相手は思った以上に巨大よ...」

「.....明後日に何かが起こるんですね？」

「...そうよ、今、私たちに出来ることは相手を見失わないこと...当日まで監視を続ける...隠密部隊のユリエ、アスミ、レイコに任せるわ、頼んだよ...皆、力を貸して！」

「はい！」

マミコは後輩たちに的確な指示をして、彼女たちは威勢のいい返事で応えた。

一方、場所は大阪北区大型商業施設の住居エリア、織藤は深夜まで仕事をして、秘書兼恋人の女性と共に帰宅していたのであった。

「...！」

織藤たちは、吹き抜けの高級感漂うラウンジを抜けようとするが、一つの気配に気づいた。

「...おや、こんな時間までご苦労様です」

その時、ラウンジのソファーに足を組んで深く座り込む一人の人物が織藤たちに声を掛けた。

「.....！君は.....見覚えがある...いつか取材に来た記者さんじゃないか？」

「...ええ、先日はお世話になりました、少しお時間よろしいですか？」

突如、織藤たちの前にアスカが現れて、その場は緊迫感が漂っていた。

「.....ああ...ちょっと待ってくれ」

織藤はアスカを待たせて、女性秘書に小声で何かを伝えようとした。

「.....彼女のことは皆に知らせなくていい、先に帰るといってくれ...」

女性秘書は静かに頷いて、織藤の指示に従ってエレベーターホールへと向かった。

「...あの女性、確か秘書の方ですよ？同じお住まいなんですね...まさか一緒に住んでいる

とか？」

「.....ああ、同棲している、もう調査済みだろう？この中に忍び込むのも容易いってことか...」

織藤はアスカの質問に呆れて、不機嫌なまま彼女の隣に腰掛けた。

「...私が記者でないことはもうお気づきでしょう？」

「...当然だ、ただ別人のようにも思えたけどね...わざと地味に変装していて、今の君が本来の姿というわけだ...」

「騙して申し訳ありません...これも仕事のためなので...」

「...ずっと僕たちを嗅ぎ回っているようだが...君らは一体何者なんだ？」

「...明後日に起こることを教えてくれればお話ししますよ...」

「.....ふ」

アスカがそう言うと、織藤は少々表情が和らいで笑みをこぼした。

「...大きな取引があるようですね？」

「ああ、大事な取引だ...先日の侵入は見事だった...頼りない警備にはきつく注意したよ...入手した情報を餌にして僕を脅して手錠を掛けようとしているんだろう？」

「警察の場合、その手で行くでしょうが、私は別の類でしてね...付け加えると、あなたを逮捕出来る権限はないんですよ...」

「...では何のために会いに来た？」

「ほんのご挨拶よ、あなたの邪魔をする相手の顔を覚えてほしくてね...」

アスカは織藤に対して敬語を話さなくなり、低いトーンの声で宣戦布告したのであった。

「ちゃんと覚えているさ...君や仲間の顔は、うちの監視カメラにはつきり映っていた...団体で来てもらって結構だ...歓迎するよ」

「...成程、思った通りね...例の入手した情報を世間に明かしても痛くも痒くもないって顔に書いてあるわ...」

「ああ、残念だったな...僕の居城を荒らして勝機を掴んだ気であるようだが、あの金庫の中身が全てじゃない...いずれ分かるさ...」

「...そう、よく分かったわ、こんな時間にお邪魔して悪かったわね...」

「...もう帰るのか？見ての通り、僕一人だ...目的を達するためなら手段を選ばない君たちにとって僕は利用価値がある...人質に取らないのか？」

織藤の予期せぬ発言に対して、アスカは冷静さを保って笑みを浮かべた。

「...ふ、その手は食わないよ...あんたは悪党だけど、育ちが良いから無礼な扱いはしないわ...それに頭が無くなっても体は問題なく動き続ける...でしょ？」

「ご名答、例え、僕が居なくなっても組織はちゃんと機能する、全く支障はない...計画は予定通り実行されるんだよ...」

「...思惑通りに事が進んでいるようだけど、仲間を知らせなかったのは失敗よ...」

「...ほう、秘書に伝えたことを把握していたか...それで失敗とはどういうことだ？」

「...こっちも一人でね、仲間に黙って来たの...私も利用価値があるんじゃないの？もしかしたら邪魔者が居なくなるかも...」

織藤は、アスカの誘いの言葉で一切動揺せず平然としていた。

「...丁重にお断りしよう...君の礼儀正しさ、度胸に免じてね...それに得体の知れない君を捕らえても仕方がない...我々も忙しいんでね...君に訊きたいことは山ほどあるが、当日まで我慢するでしょう...」

「...そうね、楽しみにしとくわ、お休みなさい〜」

アスカと織藤はお互いの内心を探り合った後、不敵な笑みを浮かべながら別れの挨拶をした。

「...♪」

アスカがマンションを出ると、彼女のスマートフォンに着信が入った。発信者はユリカであった。

「はい、もしもし〜...」

「...何で電話に出ないんですか！！！？」

「.....！？」

アスカは、応答時にユリカの怒号を浴びせられて愕然とするのであった。

「何度も電話したんですよ！稽古が終わってすぐ姿を消して...今、何処に居るんですか？」

「...ごめん、ちょっと野暮用があつてね...何か御用？」

「...明日の舞台稽古の時間が変更になったので、お知らせしようと思ひまして...メール送つたんで確認して下さい！」

「分かった、ありがとう...」

「今、何処に居るんですか？GPSで探れないんですが...何故オフ設定にしているんですか？」

「.....だからプライベートのことだから教えられないのよ...今から家に帰るところよ...」

「...また余計なことしないでしょうね...先輩？」

「...大丈夫だよ、信じてよ〜」

ユリカは、疑いの目でアスカを問い詰めていた。アスカは変な汗を掻きつつ、気まずい場を乗り切ろうとした。

「...まあ良いでしょう、織藤の件はマミコさんに任せておいて大丈夫ですから...大胆な行動は避けて下さいね、表稼業にも影響しますし...」

「分かってるって...それじゃあまた明日ね〜」

アスカはユリカにお灸を据えられ、疲れた表情のまま家路に着くのであった。かくして、静かな夏の夜、対峙する両者の密会は幕を閉じようとした。

それから夜が明け、朝を迎えて、その日は決戦前日であった。マミコ班は織藤の監視を続けるが、特に変化はなく退屈な時間が流れていた。一方、アスカ班は本業である舞台の稽古が佳境に入り、全力で取り組んでおり、主演を務めるアスカは、その日だけ織藤のことを忘れて演じる役になりきっていた。

織藤は普段と変わらず、定時刻に出勤して業務をこなしており、警戒しているか不明だが、一切尻尾を出すことはなかった。ただ、主要メンバーである猪本と御手洗の姿が確認出来ず、それだけが不可解で不気味であった。そして、穏やかな平和な時間が続き、気づけば日が落ちていき、決戦前夜となっていた。マミコ班は朝から地道に隠密活動を続けていたが特に成果はなかった。マミコは隠密部隊を引き揚げさせてメンバーを全員集めて、夜更けにホテルの一室で作戦会議を始めようとした。

「...ここ数日、監視をしていますが、特に変わったことなく、収穫はゼロです...本当にこれで良かったんでしょうか...?」

アヤコが表情を曇らせて、チームの指揮官であるマミコに不満をぶつけた。すると、マミコはゆっくりと瞳を開いて、暗い表情をした仲間の前で言葉を発しようとした。

「.....アヤコの言う通り、このままだと対応する術がないわけで頭を抱えるしかない.....」

「...マミコさん？」

突然、マミコは話を止めて不敵な笑みを浮かべた。他メンバーは彼女の行動が理解出来ずにいた。

「...私たちだけでは手に負えない件だからね...実は奥の手があるの...」

「奥の手？どういうことですか？」

「...ふ」

後輩メンバーが首を傾げて質問する中、マミコは笑みをこぼすだけで何も語ろうとしなかった。

「...コンコン」

その時、マミコ率いる歌劇団メンバーが居る部屋の扉がノックされ、室内はどよめいた。

「...誰？こんな時間に？」

「心配しなくていいよ、会う約束をちゃんとしているから...」

「え？誰なんですか？」

マミコは謎の訪問者のことを明かさず、自ら扉を開けようとした。

「...お待ちしていました、どうぞ～」

「.....！！！！！！！！？」

マミコが謎の訪問者を招くと、室内は騒然となった。ただ、一部のメンバーの表情に変化はなかった。

「...どうも、夜遅くに失礼します～」

「え？.....何で？」

マミコ班の前に突如現れたのは、アスカとユリカであった。

「...言ってなかったけど、彼女たちにもうちの会議に参加してもらおうわ...」

「どういうことか、説明して下さい！」

「そう、怒鳴らないでアヤちゃん、これも作戦のうちよ...」

「アスカ先輩...あなた方は捜査から外されたんじゃないんですか？」

「まあ色々と事情があってね、ちゃんと種明かしするから～...」

アヤコとアスカはお互い若手だった頃、同じ班に属しており、親しい先輩後輩の仲であった。かくして、張り詰めた空気の中、作戦会議は再開された。

「...黙っていて悪かったけど、アスカ君が言った通り、作戦のためよ、極秘のね...」

「本当ですか、前に黙って来たから仕返しのドッキリ仕掛けたんじゃないんですか？」

「...あのね、こんな非常時にそんなことしますか...敵を欺く前にまず味方からって諺あるでしょう？気を悪くさせたのは申し訳なかったわ...」

「成程...どうやら、このドッキリに加担している者が他に潜んでいるようですね...？」

アヤコはそう言って、あるメンバーと視線を合わせた。

「...はは」

アヤコと目が合ったのは、マリエ、アヤギ、ユリエ、アスミであった。目が合った四人は笑って誤魔化した。彼女たちもまた、仕掛け人であった。

「...実は先日偶然にも、標的のオフィスで先輩たちと会ってね...それから合同捜査の流れになったわけで...」

「...ちょっとした陽動よ、相手はうちの組織の正体や人数、戦力を把握してないからね...まさか二手に分かれて捜査しているなんて思ってないでしょう...」

「あの...アスカさんたちが捜査に協力していることを上は知っているんですか？」

「...ううん、知らないよ、あくまで捜査しているのは、あなたたちだから...」

「...白林さんや上層部に黙っておくのはまずいのでは...？」

「だから慎重にやってる...そっちの班に注意を引きつけている間、こっちは独自で動いていてね...捜査の現状報告で来たわけよ...」

「...すみません、話を聞いてやってくれませんか.....」

アスカの強引さにアヤコが不安を抱える中、付添いのユリカは、会釈してアヤコを説得した。

「...話を進めます、捜査対象の中心人物である織藤の関係者...突如、姿を消した猪本と御手洗の消息が気になるでしょう？」

「居場所が分かったの？」

「ええ、少々苦労しましたが、発見しましたよ...彼らは現在、大阪国際空港内のホテルに宿泊しています...」

「ホテル...しかも空港内の...何故？」

「...例の入手した書類から推測しました、取引相手は一般企業の人間ではなく、さらには国内の人間ではない...その正体は国際指名手配されたテロ組織...恐らく、密入国、不法入国してきて一足先に彼らが接触するのではないかと考えて調べました...」

「よく独自で調べられたわね...」

「ええ、組織やデジタルの力に頼らず、昔の刑事のように足で稼ぎました...密入国するには船を利用するしかない、まず、海の方を調べました、不審な船の入港していないかを...その件に詳しい情報屋に会えたので結果はすぐ分かり、該当する物はありませんでした...」

「不法入国するには空を...航空機関も調たわけね？」

「ええ、関西に位置する空港を回っていき、ようやくヒットしました、変装はそっちだけの専売特許ではないのでね、うちの後輩が刑事に扮して聞き込みをすると、空港内のホテルに宿泊していることが判明しました...間違いなく本人です...引き続き、彼らの監視を続けています...」

「彼らは取引相手と落ち合うために宿泊しているわけか...既に国内に潜伏していれば厄介だったわね...」

「はい、不法滞在者の資料を見る手間が省けました、現在、国内に来日している外国人の数は一小国の人口とほぼ同等です、急激な旅行者の増加が影響しているかと...」

「とにかく、そっちの活躍で希望が見え始めた...当日はどうするの？」

「手筈は整っています、東京に居るアカネに現状を知らせまして...ボスの耳に入れば、現地の警察組織も協力してくれるはずです...当日の朝、連絡があり次第、マミコさんたちは彼らと行動を共にして下さい...」

「アスカたちはどうするの？」

「私は本来、捜査に関わっていないわけですから大人しくしときますよ～何かあれば連絡下さい...」

その時、マミコはアスカの態度を疑っていた。

「...どうも怪しいな、らしくない...上層部に黙って捜査しているくらいだから...何かありそうね...白状しなさい！」

「...な...何も隠していませんよ～」

マミコは、じっとアスカと顔を合わせて尋問した。アスカは動揺しているように思えたが、慌けた仕草でその場を凌いだ。

「...まあいいわ、情報提供は感謝する、それで本業の方は順調？」

「ええ、もう本番は近いですから...先輩たちもツアー中でしょう？」

「ええ、今月末にここ大阪でね...公演を行う劇場が近いから好都合だったけど...」

「気持ち良く舞台に立てるよう邪魔なものを片づけましょう...何も質問がなければ失礼します...」

「こんな夜遅くにありがとう、これにて作戦会議は終わります、皆、当日に備えて体調を整えておくように...お休みなさい...」

マミコ班は解散して、アスカたちは彼女たちが宿泊しているホテルを後にした。

「.....マミコさんたちに大事なこと言い忘れていませんか？」

ユリカは帰り際、アスカに意味深な発言を述べた。

「...確証がないから言う必要はないわ、例の取引相手は彼女たちに任せて、こっちは織藤をマークするのよ...」

「...彼はまだ何か隠しているのでしょうか？」

「...さあ、どうだか、これは憶測だけど、真の目的が別にあるかも...」

「それを暴くのが私たちの仕事ってことですか？」

「そういうこと...ついて行ける？」

「ええ、乗りかかった船です、何処までもついて行きますよ」

「頼りになる後輩が居て心強いね～...あと数時間で夜が明ける...予想以上に忙しくなるわよ～それじゃあまた連絡するわ」

お休みなさい...」

アスカとユリカは、ひとまず別れてその場から去って行った。かくして、時間は巻き戻すことは出来ず決戦の朝を迎えることとなった。その日、天候は良く曇らない程度の夏空が広がり、とても厄災が訪れる日とは思えなかった。その朝、大阪府警は秘密警察から突然の凶報が届いたことで、尋常では居られなかった。

大阪府警本部長室、そこでは大阪警察のトップである本部長、ナンバー2である副本部長、警備部長が何やら深刻そうに話し合っていた。

「.....確かなのか？今日に国際指名手配されたテロ組織が入国するというのは...しかも、大阪にやって来るということだが...何処からのネタなんだ？」

「...警視庁公安課警備部暗躍係に属する白林警視正から報告を受けました...」

副本部長に問い詰められているのは、警備部長である檜橋巧であった。学生時代の白林の先輩である。彼もノンキャリアから這い上がって来た有力な人材であった。階級は警視長。

「...例の秘密警察か、良い噂悪い噂両面を耳にするが.....大阪中枢都市で起きたバイオテロにいち早く気づいた部署だったな...」

本部長は、外の景色を見ながら二年前に起きた惨劇について呟いた。

「...確かにその...秘密警察の活躍でテロを阻止することが出来ましたが、かなりの被害、損失を受けまして...やっとのことで復旧工事が済みましたが...再開発計画が予定より遅れてしまったと知事と市長が嘆いていました...」

「...また大阪がテロの標的になるというわけか...言い方は悪いが、何故、首都の東京ではなく、うちなんだ？」

本部長は檜橋の方に振り向き、彼に疑問を投げ掛けた。

「...報告によると、そのテロ組織は本国の企業と取引を行うとのこと...取引開始時刻は本日一六時ジャスト...」

「...取引だと？ いった内容だ？ その企業は合法的に機能しているのか？」

「勿論、非合法です、表向きは民間軍事企業で紛争区域の入出国手続き、支援を行っていますが、裏の顔は裏社会に通じる商人です...全国の悪徳企業、暴力団組織等に銃火器を売り捌いているようで...」

「それで調子に乗って、海外まで拠点を広げようとしているわけか...しかし、国際指名手配されるほどの大物だ、どのような手段で入国する気だ？ 密入国となると面倒だ...対処出来ているのか？」

「それについても報告があります、大阪国際空港内にあるホテルに例の民間軍事企業の社員が宿泊しており...恐らく取引相手を出迎えるためかと思われます」

「...成程、不法入国であれば、精巧な偽造パスポートや変装術で切り抜けられるかもしれない...海外旅行者が多いこともあり標的を捜しだすのは困難だが...出迎えが居るのなら手っ取り早いな、人手が足りないのなら応援を向かわせよう...」

「...ありがとうございます、万が一のことを考えてS A T（特殊急襲部隊）の出動許可を頂きたいのですが...」

檜橋は、自ら責任者を務める部署の部隊の出動許可を本部長に求めたが、彼は首を縦に振ろうとしなかった。

「...その決断は出来かねる.....まだ早いだらう...あくまで極秘捜査だからな...」

「...確かにそうかもしれませんが...ただ、嫌な予感がして...出来るだけ早くご決断して頂きたいのです...！」

「いくら君がS A Tの指揮官でも駄目だ、今回のような前例のない事態は深読みするべきではない！」

「...しかし、一応出動させることを頭に入れた方が良くないと...！」

「...出動させるさ、テロが起きた時にな、事前に出動させることは許可しない...」

「本部長の言う通りだ、空港には通常通り、警官隊、捜査員を派遣する...出迎えの社員と取引相手が接触した時点で一網打尽にする...秘密警察の指揮官にそう伝えるんだ...」

「...了解しました、それでは失礼します」

櫛橋は本部長に深々と頭を下げるが、上司の発言に納得出来ず、ばれない程度に不満の表情を浮かべて、大人の対応で静かに退室した。そして、大阪府警のテロ組織入国対応策は、白林を通じ、アカネから命令を待つマミコ班に伝えられた。

「...そう、警官隊が空港に向かうのね？」

「...はい、白林部長の先輩が指揮官を務めていまして、派遣された捜査員、警官隊と合流して下さい、待ち合わせ場所は...」

アカネは、マミコに作戦内容を事細かに伝えた。そして、重要な報告が終わろうとすると、アスカのことが話題に上がった。

「...彼女とは夜に会ってね...もう役目を果たしたから大人しく引き下がるそうよ」

「...色々うちの者が面倒を掛けました、あの娘、たまに強引なところがあって...」

「分かってるよ、私も九州の女だから共感出来る...最近、一緒に仕事すること多いから頼りにしているよ...それじゃあ彼女に悪いけど手柄を頂いて来るよ...」

マミコは、一期下の後輩に感謝の意を述べて電話を切った後、仲間と共に空港に向かおうとした。かくして、歌劇団メンバーは担当している事件を迅速に捜査するわけだが、織藤の動きに謎が残っているため、どうも解決に導く材料が足らなかった。

一方、アスカはその日、大劇場が休演日で稽古もないため、自宅で待機していた。ただ、彼女に落ち着く暇はなく、今日に限っては副業のことで頭がいっぱいであった。

「.....取引相手は海外の危険なテロ組織...密入国の手段を取らず、堂々と本国に入国するのは考えにくい...例え、武器を受け取ったとしても民間機で持ち帰るのは困難...やはり船を使った方

が効率が良い...となると空港で待ち受けているのはフェイクか?.....」

アスカはほとんど睡眠を取らず、織藤の隠された策略を暴こうと、血眼になって捜査資料を読み返していた。しかし、これといった収穫はなく、彼女は睡眠不足で集中力が切れそうであった。

「...♪」

その時、アスカのスマートフォンに着信が入り、うとうとしていた彼女はぎくりとして電話に応答した。

「...もしもし?」

「...あの、睡眠中でしたか?」

「いえ...起きていたわ、何かあった?」

アスカに電話を掛けたのは歌劇団メンバーで彼女の後輩であった。

「...猪本、御手洗の監視を続けているんですが、先ほど、マミコさんから連絡がありまして...交代してもらって大丈夫ですか?」

「ええ、後のことは引き継いでもらって...ご苦労だったわね、迎えをよこすわ...」

「了解しました、間もなく到着するようなので待っておきます...」

「...あなたたちも体を休めなさい、徹夜続きの監視と稽古疲れが重なってろくに寝てないでしょう?」

「お言葉に甘えてそうさせてもらいます、それでは...」

アスカは猪本、御手洗の監視を後輩の歌劇団メンバー二人に任せていた。

一人目の名はレイカ。今後の活躍を期待されている中堅歌劇団スターの一人。嘘のない自然な演技力に定評があり、着実に経験を積んでいる。また、舞台衣装を完璧に着こなしファンを魅了している。裏稼業では自慢の演技力を買われ、難度が高い潜入捜査を任されている。同期は同班のユリカ、ジュリ、マミコ班ではアヤギ。

二人目の名はサオリ。近い将来、歌劇団の伝統を支える舞台人として注目される若手スター。彼女は、クールな性格で若手ながら抜かりの無い人物である。また、普段見せる笑顔は良く、表現力は豊かである。裏稼業では現場の特攻を担当、稀に指揮の補佐を任されることがある。同期はマミコ班のアスミ、カリン。

ひとまず、アスカは捜査をマミコ班に任せてしばし睡眠を取ろうとした。だが、数時間後に衝撃的な出来事が巻き起こり、今の彼女に知る由はなかった。

ここから舞台は変わり日本上空、当国の空で深刻な事態が巻き起ころうとしていた。

航空自衛隊横田基地航空総隊司令部

明朝、航空総隊司令部は防空識別圏（防空上の必要性から領空とは別に設定した空域）飛行する物体を探知して対応に追われていた。

「.....全く反応なしか？」

「はい、何度も無線でコンタクトを試みっていますが、応答がありません...針路を変更する気はないようです...」

航空総隊・管制官は、現状を部下のオペレーターから訊きだして深く考え込んでいた。

「この当該機の正体は分かったか...？」

「早期警戒管制機の分析によると、機種は大型輸送機...国籍所属ともに不明です...まもなく沖縄領上空に侵入されます...」

「...これで埒が明かない、この当該機を侵犯機として捕捉、対処する...直ちにスクランブルを発令するんだ...！」

「了解、戦闘機を当該空域に派遣します」

航空総隊・管制官の指示により、那覇基地から戦闘機が緊急出動した。司令部は、今まで経験したことがない未知なる脅威に阻まれて動揺が隠せなかった。そして、出動した戦闘機は不審機を目視して思わず驚愕した。

日本防空圏内に侵入した飛行部隊の正体は、大型輸送機「アントノフ An-225ムリーヤ、であ

った。ムリーヤは、全長八四メートル、全幅八八．七四メートル、全高一八．一メートルと世界最大の四輪送機であり、まさに空を制する怪物であった。

「...この機体は確かソ連、ウクライナの国営企業が開発した輸送機だ...何故、そんなものが飛んでいる？」

「...！！」

その時、航空総隊・副司令官が司令部に現れて、ムリーヤの概要を部下の前で口にした。

「あの機体はもともとロシアのスペースシャトルを輸送するために開発されたものだった...しかし、飛行したのは一度限りで、開発国であるソ連が崩壊したことで運用計画は打ち切られた...その後、存在意義を失い、機体は一旦姿を消したが、現在は再就役して欧州で運用されている...」

「ええ、機体は二機あるようですが、二号機は未完成のまま...なので存在するのは今、飛んでいる一機だけとなりますが...」

「どうも怪しい、形状が現物と若干違う...機体の色は白のはずだが、送られてきた画像を確認すると黒く塗装されている...搭乗しているのは何者だ...？」

「何度も無線で呼びかけていますが、ずっと応答がありません...通告、警告に応じなかった場合、人口密集区域に侵入されてしまいます...！」

「...何としても民間人が居ない海域に誘導するんだ...攻撃、撃墜する手段は出来るだけ避けたい...」

「...了解しました...迅速に対応します」

航空総隊・副司令官の表情は険しくなる一方で、司令室内に悪い空気が流れていた。

スクランブル発令を受けた戦闘機は、侵犯機のムリーヤを追尾して通告、警告を続けた。

「トリィチェビーリボジューノイジーイズゾーナイポーナ...」

自衛隊戦闘機パイロットは、もともと現ロシアが運用していた機体であるためロシア語で警告するが効果はないようであった...」

「...射程圏内だ、威嚇射撃を許可する、よろしいですね？」

「...ああ、構わん」

航空総隊・管制官は、航空総隊・副司令官の許可をもらい、侵犯機ムリーヤへの威嚇射撃を命じた。

「...了解、サーペント全機フォーメーションを取り、射撃準備せよ...」

自衛隊戦闘機三機は、侵犯機ムリーヤを包囲するように飛行して威嚇射撃を行おうとした。

「...ボボボオ！ボボボボ...」

自衛隊戦闘機は、警告の威嚇射撃を行ったが、侵犯機ムリーヤは速度を落とさず巡航を続行していた。

「.....怖いもの知らずもいいところだ、このまま放っておくわけにはいかない...もう強引に領空外に退去させるしかない...」

航空総隊・副司令官は侵犯機の対処のことで苦渋の決断を迫られるが、ここから状況は大きく変わろうとした。

「チョコレートパベリー（くたばれ）...」

侵犯機ムリーヤの搭乗者がそう呟くと、自衛隊戦闘機に異変が起きた。

「...！！！！？」

侵犯機ムリーヤに接近した自衛隊戦闘機は突如、電子機器の誤作動が起きて操縦不能となった。

「...どうした、何が起きた？」

「出動した自機にトラブル発生...突然、電子機器が停止して通信不可能です！」

「...何だ、急に...偶然とは思えない...」

司令室内は予想外の事態が起こったことで騒々しさが増す一方であった。

「.....操縦不能のため、離脱する.....」

自衛隊パイロットは魂が抜けて自然落下する戦闘機を捨てて、緊急脱出用のパラシュートを展開した。自衛隊戦闘機は全機、大きな水飛沫を上げて海中へと墜落した。

侵犯機ムリーヤは、偶然起きた自衛隊側のトラブルで生涯を乗り越えたが、後に作為的であることが判明することとなる。こうして、日本は侵犯機の侵攻を許すこととなり、侵犯機ムリーヤは不幸を運ぶ巨大な鴉として恐れられるのであった。

それから時が流れ、時間は正午過ぎ、アスカは労働から解放されて自宅のソファで横たわっていた。

「す〜...くか〜」

この時間が長く続くことを望んでいる彼女であったが、まもなく掛かってくる電話により叶うことはなかった。

「♪〜」

アスカは、しばらくしてから電話の着信音に気づきだし、鬱陶しそうに近くのテーブルに置かれたスマートフォンに手を伸ばした。

「...もしもし？ユリカちゃん、どうしたの？」

「せ...先輩、大変です...！えっと...とにかくワンセグでも...何でもいいので...急いでテレビを...点けて下さい！！」

「...え...うん...分かった...！」

アスカは、発信者のユリカの鬼気迫る口調でただ事でないことを察知して、即座にリビングに設置されたテレビの電源を入れた。

「...今、何処の局も臨時ニュースが流れています...それを観て下さい！！」

「分かったけど...臨時ニュース？何か事件でもあったの？」

アスカがテレビ画面に注目すると、中堅アナウンサーが滑らかな口調で原稿を読み上げていた

。「.....番組の途中ですが、この時間は予定を変更して臨時ニュースをお送りします、大阪国際空港午前一時三〇分発熊本行き日本航空四〇一便が大阪上空でハイジャックされました.....犯人の情報、機内に様子はまだ分かりません...分かり次第お伝えします...繰り返します、ハイジャック事件が起きました...」

「...ハイジャック.....」

アスカは日本で起きたハイジャック事件のニュースを目にして、リアクションの取り方が分からなかったが、後にある事実が明かされて驚愕することとなった。

ハイジャック発生後、大阪国際空港の出発予定の航空機は一時欠航、空港を管轄する警察署の交渉担当捜査員、警官隊が緊急出動して、大勢のマスコミ関係者が空港に押し寄せた。日本政府は、首相官邸にハイジャック対策本部を設けて閣僚会議を行い、警察側も空港近辺の所轄署と大阪府警が連携して対策本部を設置した。総指揮を務めるのは大阪府警の本部長であった。大阪府警幹部は本部の会議室に集まり、交渉捜査員が居る管制塔や所轄署からの報告を待っていた。そんな中、警備部長の檜橋は自室で誰かに電話していた。

「どういふことだ、報告されたことと違うことが起きているぞ...お蔭で赤っ恥をかいた...」

「本当に申し訳ない...予想外のことが起きて、こちらも困惑しています...」

檜橋はご立腹の様子で、後輩の白林にクレームの電話を掛けていた。

「...それで今起きているハイジャックだが、そちらで追っている件と関連性はあるのか？」

「はっきりしたことはまだ言えませんが...恐らく...現在調査中です...」

「...えらいヤマを抱えているようだな、解決は急いだ方が良くぞ...政府側はハイジャックすなわちテロに屈しない...最悪のケースは防衛省に根回しし、ハイジャックの件を在日米軍に一任する...」

「...民間機を撃墜ですか、自分の手を汚さず方が付く...権力にすぎる先生たちが考そうなことだ...」

櫛橋は、白林に政府の闇を明かした。白林は、政府のやり方が気に食わず自然と皮肉った発言をした。

「ああ...面子のためなら手段を問わない連中だ...俺やお前のように偉くなっていくと知りたくないことも耳に入ってくる...難儀な話だ...」

「...全力を尽くし、解決に導きます...もうしばらくお待ちを...」

「俺に約束しても仕方がないが.....二年前のように期待しているぞ...」

櫛橋は、受話器越しで笑みを浮かべて電話を切った。

「.....例の件で彼女たちから連絡はないか？」

「ありません...空港を出てからは...」

白林はアカネに捜査の現状を訊ねた。

「...そうか、ずっとここで待っている...今一番頼りになるのは彼女たちだ...！」

白林は、歌劇団の活躍に期待を膨らませて静かに報告を待った。

一方、自宅で待機したアスカには空白があり、状況が把握出来なかった。

「...ハイジャックは確かに大変なことだけど...私たちとどういう関係が...？」

アスカは、電話を通してユリカに疑問を投げ掛けた。

「...実はあのハイジャック事件ですが...」

「...うん、何？」

ユリカは、重い口調でアスカに真実を明かそうとした。

「あのハイジャック機には...猪本、御手洗が搭乗しているようです...！」

「え...？」

アスカは、ユリカのあまりの衝撃の一言で絶句した。ただ、今の事態は序章に過ぎなかった。ハイジャック機が飛行する空域近辺に大きな影が忍び寄り、さらなる凶事が巻き起ころうとしていた。

ミッション9 緊急指令、そして...

自宅で寝ていたアスカは、ユリカの電話でたたき起こされて、指示通りにテレビを点けた。すると、どのチャンネルも臨時ニュースが放送されており、彼女はテレビ画面に釘付けになりながらも「何故この報道を私に観せたの？」と疑問が浮かんだ。そして、ユリカの口から衝撃の事実を聞いたアスカは驚きのあまり絶句した。

「.....ちゃんと説明してもらえる？何故、ハイジャック機に猪本と御手洗が搭乗しているか...」

「...はっきり言って私も混乱しています、先ほどマミコさんが何度も先輩に連絡したそうですが、応答がないので私から連絡するよう頼まれたんです...」

「.....そうだったのね、疲れが溜まっていたのか、つい気が抜けて眠ってしまっていて気付かなかったわ...マミコさんたちは今何処に？」

「...空港での張り込みを中断して、我々のチームと合流するとのことですよ...」

「...織藤に変化は？」

「監視を続けていますが、オフィスから出た様子はありません...私たちは例の商業施設にあるホテルに集まっています、とにかく先輩も早く来てください！」

「了解！」

アスカは、仲間と合流するために速やかに準備を始めた。かくして、彼女たちの知らない場所で未知なる力が働いて混迷を極めているわけだが、その発端はハイジャック事件が発覚する数時間前に遡る...

大阪国際空港の朝は、いつも通り空港利用者が溢れかえっていた。当空港は大阪市の北西に位置する関西三大空港のうちの一つである。ターミナルは大きく二つに分かれてロビー、売店、カフェ、レストラン、展望デッキと充実している。また、中央ブロックには郵便局、警備室、医療施設、空港警察（派出所）が設置されており、警察署が空港近辺にあることから緊急の事件、事故が起きた場合、迅速に対応出来る。宿泊施設に関しては空港随一のホテルがリニューアルされて快適に出発前夜を過ごせるようになっている。

空港内ホテルの受付ロビーには、一人の女性客が居てチェックアウトを済ませようとした。

「いつもご利用いただきましてありがとうございます、引き続き、空の旅をお楽しみ下さい、行ってらっしゃいませ～」

「ありがとう、行ってきます」

女性客は常連のようで、彼女は爽やかな笑顔でコンシェルジュやホテル従業員に別れを告げた。ところで、ホテルを後にした女性は同性からも惚れ惚れする容姿で、年齢は分からないが、実年齢よりも若く見えた。また、ファッションセンスもあり、サングラスを掛けて颯爽と歩く様は、まるで海外スターのようであった。謎の女性はターミナルに向かうが、出発まで時間があるのか空港内のカフェで落ち着こうとしていた。

一方、謎の女性とは対照的に尖らしている者が居た。謎の女性がホテルを出た後、男性二人組がチェックアウトを済ませようとした。その男性二人組は、猪本と御手洗であった。彼らはコンシェルジュに無愛想な返事をしてホテルを後にした。

「...チェックアウトお願いします」

さらに男性二人組が去った後、またチェックアウトする客が現れた。今度は女性二人組でその正体は秘密警察のレイカとサオリであった。

「...先に行ってるね」

レイカは、サオリに手続きを任せて先にホテルを出た。

「.....初めてのご利用とのことですが、如何でしたか？」

「いや～とても快適でした、お世話になりました♪」

「ありがとうございます！」

「.....それと色々ご協力感謝します、何も起こらなくて良かったです...」

「こちらは特に何もしておりますが...他大変なお仕事ですね...ご苦労様です」

「...いえいえ、それはお互い様ですよ、またプライベートで来させてもらいます...」

「お気軽にどうぞ...お待ちしております」

サオリたちは警察関係者を装い、ホテル側に宿泊している猪本、御手洗の情報を提供してもらっていた。双方ともに礼儀正しく振る舞い、サオリはレイカを追い掛けた。

「...お待たせしました、彼らは？」

「そのままターミナルに向かったよ、思った通り取引相手を出迎えるようね...」

「マミコさんの班に引き継いでもらうことになりました...メンバーはもう到着しているとのこと...迎えに行ってきます」

「私たちの役目もここまでか、まあ公式で捜査に参加してないわけだし問題ないけど...本業の方も忙しくなるしね...」

レイカたちは、張り込み捜査から解放されようとする、表情が緩んでほっとしていた。しかし、彼女たちに知らない場所で蠢いているものがあり、異変に気付いた時は既に遅かった。

レイカとサオリは別行動を取ることとなり、サオリは引継ぎを行うマミコ班のメンバーを迎えに行こうとした。そして、レイカは引継ぎメンバーと合流するまで一人で猪本、御手洗の監視を続けることとなった。

「...あら？」

サオリが颯爽とターミナルを走り抜けていくと、そこに偶然、謎の女性の姿があった。彼女はサオリとすれ違おうと、何か気になった様子でふと立ち止まっていた。これは後に運命の出会いということが明らかとなる。サオリがターミナルの出入り口に向かうと、プロのモデル並みの容姿の女性が四人立っており、その正体はマミコ班隠密部隊のアヤギ、ユリエ、カリン、レイコであった。

「どうも、お待たせして...」

「あら、知ってる顔も居るね～」

「...残りのメンバーもすぐに来るわ、後のことは任せてや～...」

四人メンバーの中で一番先輩であるアヤギ、ユリエが主になって、引継ぐことをサオリに伝

えた。

「...現在、レイカさんが標的を監視してくれています...合流しましょう...」

サオリは、先導して引継ぎメンバーと共にレイカの下へと向かおうとした。

一方、単独で監視捜査を続けるレイカであったが、思わぬ事態に遭遇しようとしていた。

「.....!？」

猪本と御手洗は、ターミナルで取引相手を出迎える素振りを見せず、航空会社カウンターに向かって搭乗手続きを行おうとしていた。驚くべき行動を目撃したレイカは、すぐさま現状をサオリたちに知らせようとした。

「.....え？それは本当ですか？分かりました、そちらに向かいます！」

「...どうしたの？」

ユリエは、サオリの豹変した表情が気になり問いかけた。

「...詳しいことはレイカさんと合流してから話します...急ぎましょう」

サオリたちは非常事態のため、ターミナル内を嵐の如く走り抜けていった。

「.....あれ？あの娘たち.....」

サオリたちが険しい表情で走り去る中、そこにまた謎の女性の姿があった。再度すれ違った彼女は、歌劇団メンバーと面識があるのか一旦立ち止まったが、プライベートを優先して呼び止めようとしなかった。

サオリが引継ぎメンバーを連れて駆けつけると、レイカは航空カウンターの前で待っていた。

「...猪本たちが搭乗手続きしていたってどういうことですか？」

「...分からないわ、警察関係者を装って彼らの搭乗する便を訊きだしたけど...熊本空港行き四〇一便、名前は偽名を使っていたわ...出発時刻が近づいている...」

「どうしますか？間もなく現地の警官隊が到着しますが...報告しますか？」

「...これはあくまで極秘捜査よ、彼らの動きが読めない以上、余計な報告は避けた方が良いわ...」

空港内での捜査を担当する歌劇団メンバー六名は、緊急の作戦会議を開いた。

「...警察の連中をどう誤魔化す気？」

その時、アヤギ、ユリエがレイカたちに歩み寄って問い掛けた。アヤギ、ユリエとレイカは、別班ではあるが同期であった。

「...見失ったと言えれば多少時間が稼げるのでは...？」

「...その手しかないか、うちのリーダーたちにはちゃんと現状を報告するということやな...」

アヤギ、ユリエは別班同期の提案に対して反論せず、他のメンバーも賛同した。別班同期メンバーは、属している組織の関係者やお互いの班長に事実を報告しようとした。ただ、アスカの耳に届くのは事件が起きた後のことであった。（その頃、アスカは自宅で爆睡中）レイカは、仕方なくアスカ班のナンバー2で自身の同期であるユリカに連絡を取ろうとした。

同じ頃、マミコは班のメンバーと共に大阪国際空港に向かっている最中であった。マミコは車中でレイカからの凶報を聞くこととなった。

「.....分かったわ、一刻を争う事態ね...プラン変更よ...私が責任を取るから言う通りにして...そこから二名...彼らが搭乗する便に乗りなさい...チケットが取れないのなら待機しとくのよ...」

「了解しました...」

ユリエたちはマミコの指示に従い、直ちに行動に移そうとした。一方、レイカたちは指揮官の指示が出るまでひとまず待機となり、迎えを待とうとした。

「とりあえず、私たちはここまでよ、後のことは頼んだわ...」

「任せといて...搭乗するのはカリン、レイコよ、幸い、空席があって良かったわ、頼むわね！」

「了解！」

猪本、御手洗の監視を任されたカリン、レイコは急いで出発ロビーの方に駆けて行った。

「...分かったわ、すぐ向かうわ...」

その時、レイカに連絡が入り、迎えが来たようなので、彼女たちはその場でユリエたちと別れた。作戦通り、猪本、御手洗が航空機に搭乗していることを伏せて、空港に残ったユリエたちは派遣された捜査員や警官たちの対応に追われることとなった。そして、猪本、御手洗、カリン、レイコが乗り込んだ航空機の出発時間が訪れて飛び立ったのであった。

大阪国際空港駐車場

レイカ、サオリは、迎えの車である大型バンに乗り込んだ。内装は改造されてハイテク機器に貼り巡らされていた。車内には歌劇団メンバーが乗っており、メンバーはジュリ、ジュン、そして新たなメンバーが二人居た。

一人目の名はマキ。歌劇団若手ホープの一人。学生時代、演劇部に所属しており、それがきっかけで歌劇団入団を志す。誠実さで前向きな性格から部隊に対する意欲が伝わり評価を得ている。裏稼業でも安定した性格で対応しているが、状況によって非常な一面を見せることがある。ジュン、レイコと同期。

二人目の名はソラ。勢いある歌劇団若手スター。幼少時代からダンスを学び、同郷の歌劇団OGの影響で同劇団の入団を決意した。入団後、彼女は表現力がある舞台人に成長していくわけだが、所属するアスカ班ではムードメーカーで場を盛り上げている。裏稼業では主に現場担当で持ち前の身体能力を活かして任務に就いている。

「お疲れ様、ユリカから聞いたわ、非常事態とのことだけど、対策は執れたの？」

「...ユリエたちが引き継いで対処してくれたわ...標的を追って熊本行きの航空機に搭乗したわ、もう飛び立ったわ...」

ジュリは、同期であるレイカに現状を問い掛けた。ここでしっかり者の中堅歌劇団メンバーが遺憾なく実力を発揮しようとしていた。

「...私たちも何かしてあげたいけど、本来、捜査に関わっていない立場では.....指揮官と連絡が取れないとなると尚更よ...」

「...アスカさんは...どうされているんでしょうか？」

ソラは、アスカの行方を先輩メンバーに問い掛けた。

「...さてね、今日は休演日だし、自宅に居ると思うけど...応答を待つしかないわ...」

「あの...取りあえず出ませんか？一応役目を果たしたわけですし...」

「...そうね、ジュン、出して」

先輩メンバーは、マキの発言に賛同して運転担当のジュンに車を発進させるよう指示した。

「ブオオ...」

アスカ班メンバーを乗せた車が駐車場を出ると、また新しい車両が入車され、その車種も大型バンであった。それにはマミコ班メンバーが乗っていた。彼女たちは空港内に居る仲間と会うために疾走して行った。そして、ここから舞台は空となる。 追う者追われる者を乗せた銀翼の大鳥は、何も知らず高度三万三千フィート（約一万メートル）を飛行していた。熊本空港行き四〇一便は高度を一定に保ち、水平飛行に入っていた。機内の乗員乗客人数は二百七十二名、標的を監視するために飛び乗ったカリン、レイコはエコノミークラス席のチケットを購入して、お互い離れて着席していた。（カリンは化粧室に近い進行方向左、通路側の座席に着席、レイコはエコノミー席の前から七番目、中間（主翼部分）、通路に挟まれた中央の座席に着席）

一方、標的である猪本、御手洗は機体前方のビジネスクラスの座席に着席していた。監視を任された若手歌劇団メンバーは、緊張を表に出さないよう心掛けて任務に就いていた。そうとも知らず、乗客たちは目的地に到着するまでの時間を気楽に過ごしていた。

航空機キャビン内での過ごし方は、乗客それぞれ違うが、今の生活では欠かせないツールであるデジタル機器（携帯電話（スマートフォン）、パソコンタブレット端末）の使用が制限されて不便さを訴えている者も少なくなかった。そして、乗客の念願がようやく叶い、国土交通省による規制緩和で、衛星通信を利用して提供されるサービスを実施、飛行中でのデジタル通信機器使用が可能となった。機内インターネットサービス（有料）を利用すれば、インターネットにアクセスすることが可能となり、キャビン内でのWEBページ閲覧、動画視聴の他、メール送受信、SNSアプリを利用したメッセージ送受信なども問題なく行なえる。これにより、乗客は不満なく空の旅を満喫することが出来たのであった。

カリン、レイコは専用のスマートフォンを取り出して、SNSアプリを利用していた。彼女たちは、お互い離れた場所からメッセージを送って連絡を取り合っていた。

カリン「御手洗が席を立って化粧室（トイレ）に行く模様...」

レイコ「了解」

カリン、レイコは通信を利用しながら相手の様子を窺って、何もトラブルが起きないことを願った。御手洗が化粧室（トイレ）に行っている間、猪本は専用のタブレット端末で何やら操作していた。それから数分後、化粧室（トイレ）から御手洗が出てきて自分の席に戻ると、隣に座っている猪本が立ち上がり化粧室（トイレ）へと向かった。彼らは特に怪しい素振りを見せず、歌劇団の存在に気づくことはなかった。ただ、歌劇団と何か関わりがありそうな謎の女性も同じ便に搭乗しており、彼女はそっと歌劇団若手メンバーの様子を窺っているのがあった。

その頃、地上の空港ではマミコ班メンバーが集結していた。

後から駆けつけたマミコ、マリエ、アヤコは空港で待つアヤギ、ユリエと合流した。

「それで...どういう状況？」

マミコがアヤギたちに現状を聞き出す中、ターミナルを見渡すと至る場所に捜査員や警官、警備員の姿があった。

「...さっきお伝えした通り、派遣された警官隊には悪いですけど、真実は明かしていません...まだ空港内に居るということになっています...」

「いつまで嘘が通用するかね...それで監視班からの連絡は？」

「...ついさっき、SNSアプリを通じて連絡がありました...今のところ、問題はないようです...」

「...そう、確か熊本便だったわね、何故そんな場所に...？今日は大事な取引があるというのに...」

「...まさか取引場所は熊本なのでは？」

「それはないわ、織藤がオフィスから出てないからね...一応、カオリ、サキ、アスミ、ヒトミを残してきた...ずっと彼の監視を続けてくれているわ」

「あの...アスカさんから何か連絡とかないんですか？」

マミコは、アヤギの質問に対して首を縦に振らなかった。

「...何もないわ、だからといって彼女ばかりに頼ってられないわ...どうにか私たちだけで解決に導きましょう...！」

マミコは、難解な事件に立ち向かおうと気合を入れて仲間との団結力を高めた。

そして、再び舞台は空に変わり、熊本空港行き四〇一便に異変が起きようとしていた。快適に空の旅を過ごす乗客であったが、それは儂くも消滅しようとしていた。

ギャレー（飛行機内キッチン）で作業をするキャビンアテンダント（略称 CA）に怪しい影が忍び寄り、彼女たちに危機が迫っていた。

「...！！？」

その時、一人のCAが一人の男性に背後から襲われた。襲われたCAの目には鋭利な刃物が映っており、それで脅されていた。同じ頃、キャビン内に問題が起きていた。一室の化粧室（トイレ）が使用中のままでCAが何度も呼びかけても室内の者は一切応答しなかった。しばらく室内の乗客に呼び掛けたCAたちは、一旦諦めて話し合おうとしていたが、そんな時、状況に変化があった。

「...ドバン！！！！」

その時、長く閉められていた化粧室（トイレ）の鍵が解錠されて乱暴に扉が開かれた。恐る恐る室内に閉じ籠っていた乗客を確認すると予想以上に異様であった。

「お...お客様.....何を...されて...きや！」

化粧室（トイレ）の閉じ籠っていた乗客は、小型ナイフを所持はしており、それをCAに突きつけて脅した。キャビン内の乗客はCAの悲鳴で異変に気づき、一斉に前方の化粧室（トイレ）を見た。ここからが地獄の始まりであった。

「.....機内に居る者に...伝える...楽しい...空の旅は終わりだ、この機は...我々が制圧した...大人しく自紙に従えば...危害は加えない...」

「良いか？余計な真似をしたら殺すぞ！」

化粧室（トイレ）に閉じ籠っていた不審な男性客は、CAを羽交い絞めにして自らハイジャッ

ク犯であることを明かした。さらにギャレーからもC Aを羽交い絞めにした男性客が現れて、彼もハイジャック犯であった。次第にキャビン内はどよめき始めて最悪な事態に招かれていた。ハイジャック犯は、ビジネスクラスに居る乗客をエコノミークラスの空いた席に移動させてC Aに色々と命じた。

「...コックピットの連中に...知らせろ...今の状況を...」

C Aは、ハイジャック犯の命令でキャビン内専用のインターホンを使用してハイジャックが起きたことをコックピットクルーに知らせようとした。

「え？ハイジャック...？」

「...はい、小型ナイフを持った男性客二名にキャビンを制圧されました...要求は後で知らせることです...」

「...乗員を含めて怪我人は居ないか？」

「今のところ、居ません...大丈夫です」

「そうか、分かった...」

コックピットクルーは、ハイジャックの対応策を取ろうと、まずハイジャック信号を送信した。次に扉をロックして、犯人に首を絞められないよう身につけているネクタイを外した。ハイジャック信号が送信されると、自動的に地上の管制機関に伝わり、そこから国土交通省や警察庁に連絡される仕組みになっている。そして、大阪上空でハイジャック事件が起きたことから大阪府警が捜査指揮を執ることとなり、空港近辺の警察署に対策本部が設置し、S A T（特殊急襲部隊）の出動要請が出るなど関係者は対応に追われていた。

「...どういうことだ、空港内でテロが起こるんじゃないかったのか？」

「...申し訳ありません...予期せぬ事態が起こりました...直ちに確認を取ります...」

警備部長の檜橋は、ご機嫌斜めの本部長に深々と頭を下げた。

一方、予期せぬ事態に遭遇したカリン、レイコは直ちに地上に待機する仲間に現状を知らせた。

「マミコさん、カリンから連絡が...非常事態のようです...！」

マミコはユリエにそう言われ、カリンから送られてきたメッセージの内容を確認した。

「.....ハイジャック？こんな時に？」

マミコたちが突然の事態に驚く中、派遣された捜査員の一人が彼女たちに歩み寄った。

「...すみません、今、大阪府警から緊急連絡がありまして...大阪上空でハイジャック事件が起きたのでそっちの捜査チームに加わってほしいとのことなのですが...」

「構いませんよ、こっちは我々に任せてもらって大丈夫です、気にせず行って下さい」

「分かりました、すみません...」

捜査員の一人は、マミコたちに一礼して仲間と共にその場から撤退した。

「これで良かったんですか？」

「ええ、いつまでも騙すわけにはいかないからね...好都合だったかも...これで自由に動けるわ...」

「...とはいっても現場は空ですよ、手の出しようがありません...！」

「今はとにかく冷静に待つことよ...カリンたちからの連絡を待ちましょう...」

マミコは空に居る仲間のことを思い、無事に戻って来ることを切に願った。

一方、熊本空港行き四〇一便は瞬く間に制圧されたわけだが、人質となった乗客数人は大人しくハイジャック犯の命令に従うつもりはなかった。

「.....犯人は何人居るんだろう？あんな若造が務まると思えないが...」

乗客数人は小声で話し合い、ハイジャック犯の特徴を分析していた。彼らの言った通り、一人の犯人は落ち着きがなく、緊張しているのか体が震えており、もう一人の犯人は感情的になるのが見受けられ、総合すると素人同然であった。カリンたちもそれに気づき犯人を押さえようとしていた。

「...よし、合図を出したら一斉に立って取り押さえよう...」

男性乗客数人は、こっそりと作戦を立ててハイジャック犯を捕らえようとしていた。また、カリンは前方で見張っている犯人を、レイコは後方で見張っている犯人を捕らえようとしていた。

「...今だ!!!」

一人の若い男性客が合図を出すと、前方後方の座席に座っている男性乗客数人が一斉立ち上がり、ハイジャック犯に襲い掛かろうとした。（カリンたちもさりげなく参戦した）乗客の奇襲に愕然とするハイジャック犯であったが、ここで予想外のことが起ころうとした。

「ドンドン！ドンド...」

その時、キャビン内で銃声が出て、乗客たちの体は驚きのあまり一時固まってしまっていた。体が正常に動いた時、乗客は発砲した人物と目が合い、ただただ怖気づいていた。

「...え.....！」

特に、カリンたちは発砲した人物の顔を見た瞬間に衝撃を受けて目が点になっていた。

「.....浅知恵を働かせてヒーローの真似事をしないことだ...今のは空包だったが、今度同じことをすれば実弾を使うぞ...」

発砲した人物は、猪本であった。

「.....あれ？彼が居ない...！」

カリンたちは、猪本がハイジャック犯の一味だと分かったのと同時に御手洗を見失っていた。彼は既に別の場所に居た。

「.....コツコツ」

キャビン内で騒ぎが起きている中、コックピットに近づく人影があり、さらなる脅威が迫ろうとしていた。

「ス...」

謎の人影は、ロックされたコックピットの扉に何か仕掛けて一旦離れた。

「.....ボフ！」

その時、ロックされた扉に仕掛けられた物は小さな爆発を起こした。

「...？」

コックピットクルーたちは謎の爆発に気づき、扉の方に振り向いた。扉のロックは謎の爆発の影響で解除されて、強引にコックピットに入室しようとする者が居た。

「.....無駄な対策だったな、言う通りに操縦していれば危害は加えない...こっちは一瞬でおたくら四人を倒せる力があるんでな...それにこんな物もある...」

コックピットを制圧したのは御手洗であり、彼も猪本と同じ銃を所持していた。

「...どれどれ」

御手洗は、銃を構えながらコックピット内を見渡していた。

「...あの、計器には絶対触れないで下さい」

「ああ？そんなことぐらい馬鹿な俺でも分かることだ...キャビンに居る仲間と連絡が取りたい、どれで話せるんだ？」

航空通信士は、御手洗にキャビンに居る人間と会話出来る通信装置の場所を教えた。

「...俺に代われ」

キャビン内のインターホンの呼び出し音が鳴ると、猪本は御手洗からの連絡だと分かり、C A から受話器を受け取った。

「コックピットは制圧した、そっちの方は順調か？」

「ああ、勿論だよ、御手洗の旦那、予定通り次に移るぞ...」

猪本、御手洗は完璧なハイジャックを起こすために色々と作戦を練っているようであった。ま

ず始めに冷静さに欠けるハイジャック犯を登場させたのは作戦のうちであった。彼らは織藤のオフィスの若手社員で素人同然のハイジャック犯を装っていた。これは乗客を油断させて恐怖心を植え付けるためであり、乗客が彼らの猿芝居に引っ掛かっている間、猪本、御手洗は本格的に機内を制圧する準備に移るわけであった。カリンたちもまんまと彼らの罠にはまったのであった。次に武器の持ち込みについてだが、テロやハイジャック防止のために手荷物検査が強化されている中、彼らは難なくパスしていた。小型ナイフは靴底内部に仕込まれており、使用されている銃はワンタッチ組み立て式のライターであった。弾は特殊な布で出来た上着に仕込まれていた。彼らは迅速にハイジャックを成功させていくわけだが、事件を起こした真意はまだ謎に包まれていた。

「...よし、今から諸君が所持している電子機器を回収する...スマートフォン、タブレット端末、パソコン、ゲーム機、全てを我々が預かる...隠さずに出すんだ...」

猪本がそう命じると、ハイジャック犯若手組（A、B）は二手に分かれて、乗客が所持している電子機器を集めようとした。

「電源を切って、この中に入れろ...」

乗客は、素直にハイジャック犯が用意した布袋に電子機器を入れていった。しかし、密かに一人だけスマートフォンを操作する者が居た。それはレイコであった。彼女は、キャビン内の状況を事細かに文章にしてマミコたちに知らせようとした。

「.....おい！」

「.....！！！！！！！！？」

その時、文章を打つことに集中していたレイコは接近するハイジャック犯Aの気配に気づかず、彼の声で軽く痙攣を起こしていた。

「お前、何をしている？」

「...あの...私は何もしていません！」

「...そうかな？何か懸命に作業しているように見えたが...そのスマホをよこせ、確かめさせてもらう...！」

「.....ちょっと止めて下さい！！きや！」

ハイジャック犯Aは、強引にレイコからスマートフォンを取り上げようとして、抵抗した彼女は通路に放り出されて倒れ込んだ。

「……ちっ、こんな非常時に…緊張感がないのか？」

ハイジャック犯Aは、レイコから奪ったスマートフォンの画面を見て呆れ顔を浮かべた。レイコは、自分のスマートフォンを奪われる直前に文章を送信してゲームアプリに切り替えていた。

「どうした…何か問題か？」

「いえ、大丈夫です…」

ハイジャック犯Aは、猪本に心配されて声を掛けられるが、異常がなかったことを知らせてレイコのスマートフォンを回収しようとした。

「すみません、電源を切りました…」

「全く…紛らわしい真似をするな、てっきり誰かに現状を知らせているのかと思ったぞ…」

ハイジャック犯Aの勘は鋭かったが、レイコはどうにか窮地を切り抜けたのであった。前方に座るカリンもほっと胸を撫で下ろしていた。そして、乗客の電子機器が回収されると、猪本はハイジャック犯若手組（A、B）に歩み寄って何か指示しようとした。

「…俺はこれからコックピットに行く、じきに御手洗の旦那が交代でやって来るから三人でここを見張っておいてくれ…」

「了解しました」

猪本は、キャビン内での見張りを部下に任せてコックピットに向かおうとするが、その最中、彼は乗客に何か言い残そうとしていた。

「……ここで諸君に改めて忠告しておくが、勝手なことはしないことだ、我々は武器を持ってなくても諸君を簡単に殺せる力を備えているんでね…まして、ここは一万メートル上空だ、命が惜しければ黙って座っている方が良い…トイレに行きたいのなら、そこの二人に行ってくれ、空腹ならCAに頼めばいい、それ以外のことはするな、以上…」

猪本は、余裕ぶった滑らかな口調で乗客たちに忠告して去って行った。

「……………！」

カリンたちは猪本たちに手も足もせず、悔しさを滲ませていた。

「…コンコン」

「…入りな」

猪本がコックピットの扉をノックすると、御手洗が応答して入室させた。

「ちゃんと言うことを聞いているか？」

「まあな…速度を落とすよう命じた…それで丁度良かった、交渉担当の捜査員と話していたところだ…代わってくれないか？」

「…何だ？元同僚と話すのがそんなに嫌か？」

猪本が皮肉った発言をすると、御手洗は思い切り彼を睨み付けた。

「…そんなんじゃねえよ、交渉とか苦手なだけだ…すぐ感情的になっちまう…どうせ交代だろ？」

「仕方ないな…それじゃあキャビンの方を頼む…今のところ落ち着いている…暴れたりするなよ…」

「ふん、分かってるよ…口調が社長と似てきたな…」

御手洗は、不機嫌なままコックピットを後にした。

「…さて、話は何処まで進んでいるのかな？」

猪本は、インカムヘッドフォンを装着して管制塔に居る交渉担当の捜査員に應對した。

「……ん？さっきの者と違うな、仲間か？」

「ああ、口調で分かると思うが、俺の方が冷静で賢いよ…」

「...そうか、それは助かる...君のことを何と呼べばいい？」

「何とでも呼んでくれ、ちなみに声紋を調べても無駄だ...前科リストには登録されていないはずだ...」

「君たちの犯行はプロだ...目的は一体何だ？」

「.....金ではないことを言える...じき分かるさ...ふふ」

猪本は、ハイジャックを起こした目的をまだ明かそうとせず、不敵な笑みを浮かべていた。そして、一連の事件は意外な方面に進展しようとしていた。

「.....チーフ！航空総隊司令部から緊急通信が...こちらの責任者に代わってほしいとのことです...」

管制官は、周りの捜査員たちと目を合わせて許可を得た後、緊急通信に応じようとした。

「...航空交通管理部の佐原です、用件をお伝え下さい...」

「こちら、航空総隊司令部...航空総隊・管制官の津々浦です、突然申し訳ない...実は至急お伝えしなければいけないことがあって通信を行った次第です...」

「伝えたいこととは？」

「...直ちに運航中の航空機のコースを変更して下さい！近くの空港に戻った方が良い...」

「え？どういうことですか？」

佐原は津々浦の言っていることが理解出来ず、周りの関係者も呆然と立っていた。

「...実は現在、国籍所属不明の侵犯機が...本国の領空...飛行していま...て...ザ...問題の侵犯は...
...ザザ.....ザザザ...」

「...あの、よく聴こえないんですが...もし？」

「...どうした？」

「突然、通信障害が起こり、通信不能です...追尾中の戦闘機とも通信が出来ません...！」

「早く原因を探れ！...まさか奴らの仕業か？」

航空総隊司令部が次々と巻き起こる不運に翻弄される中、管制機関に凶報が舞い込もうとしていた。

「.....この辺りで左に旋回しろ」

「え...旋回ですか？何故...？」

「いいから言う通りにしろ、キャビンに居る連中にも知らせるんだ...早く！」

猪本は、特注の銃を機長に突きつけてコックピットクルーに命じた。

「...乗客の皆様にお伝えします、航路を一時変更いたしますので、衝撃に備えるため決して席からお立ちにならず、シートベルト着用の確認をお願い致します...」

人質となった乗客は、機長の言われるがまま動いた。

「やっとお出ましか...」

「！？」

その時、カリンは御手洗の意味深な眩きを耳にした。

乗客が見えない恐怖に怯える中、ハイジャック機が飛行する空域で異変が起きようとした。雲に大きな影が浮かび、ハイジャック機の前で姿を現そうとした。

「.....！！？」

ハイジャック機の乗員、乗客は機体の揺れに耐えながら信じられない光景を目にしていた。彼らの目には大型輸送機、ムリーヤが映っていた。突如現れたムリーヤは、まるで海面から飛び上がって来た鯨であった。ハイジャック犯はムリーヤが現れるのを待っていたかのようにであった。

「ついに接触してしまった...民間機はどうなった？情報が知りたいというのに...何も分からないのか？」

「...接触した民間機は、ハイジャック機だ...国土交通省から報告があった...官邸では各大臣が集まり、ハイジャックに関しての緊急会議を行っている...」

「...指令！」

航空総隊司令部が錯乱する中、最高責任者である指令官が颯爽と姿を現して、指揮を執ろうとしていた。

「現状報告を...あの侵犯機は何者だ？」

「何度も呼び掛けていますが、応答がなく、スクランブル発進させた部隊での対応は失敗しています...」

「攻撃はしていないのか？」

「...威嚇射撃、本格的な攻撃を行おうとしましたが、何故かトラブルが続いて標的の攻撃まで至っていません...」

航空総隊・司令官は、津々浦の報告にずっと首を傾げていた。

「ちゃんと説明してくれ、攻撃出来ない原因とは？」

「残念ながら未だ不明です、出撃した戦闘機は謎の電波障害で機能が停止してしまうのです...現時点で迎え撃つ術はありません...！」

「...謎の電波障害...」

航空総隊・司令官は、津々浦の報告に心当たりがあるようであった。

「.....やはり判断を誤ったようです、PAC3（最新地对空誘導弾システム）を使って侵犯機を撃墜することも可能だった...」

その時、航空総隊・司令官は津々浦の発言が気に入らないのか、沈んだ表情で反論しようとした。

「今、君が言ったことが迅速かつ適切な対応だとは限らないぞ...P A C 3 を使用して喜ぶ人間は限られる...面倒事を我々に任せて知らん顔が出来るからな...」

「はあ...そうかもしれませんが、何もしないよりましかと思われます...」

「...では使用したとして撃墜出来なかった場合どうする？その後の対処は？国民から安全性を問われることは間違いない...私を処刑台に立たせる気か？」

「...いえ、そういうつもりは...！」

航空総隊・司令官は、冗談を混ぜ合わせて、津々浦の反応を見ていた。

「...P A C 3 は本国を守るための最後の切り札だ、無闇に使える代物じゃない...君が行ったことは間違いではないし、済んでしまったことを悔やんでいる場合ではない...我々だけで手に負えないなら陸・海の自衛隊と連携して対処するしかないさ...」

「了解です、対策を立て直します」

「前例がないから慎重に行動しよう、何故、ハイジャック機と接触したのか探った方が良い、直ちに管制機関から情報を聴き出すんだ...」

航空総隊司令部は、改めて侵犯機の猛威に立ち向かおうとするが、日本の安全を蝕む菌は驚くべき速さで増殖していたのであった。

アスカが自宅で休養している間、様々な問題が起き、彼女は取り残された気分になっていた。

「...一瞬の油断が命取りとなる、私たちの知らない場所で何かが蠢いている...私も捜査に参加するわ...ユリカ、あなたは今何処に...？」

「先輩と連絡が取れてから出るつもりでした...一緒に行きますか？」

「そうね...急いで用意して迎えに行くわ」

アスカは気持ちを切り替えて戦地に乗り込む準備をした。彼女は十分に体を休めたせいか目が生き生きとしていた。

かくして、事態は進展していき、これから起こる紛争に参加する役者は、大阪に集まろうとしていた。

ミッション10 陰謀の行方

アスカは、突如起きたハイジャック事件に猪本たちが関わっていることを知り、改めて捜査に参加しようとしていた。

「.....大阪府警は熊本空港行き四〇一便でハイジャックを起こした犯人と交渉を続け.....」

アスカは、ハイジャック関連の情報が流れている報道番組を気にしながら出掛ける準備をしていた。彼女は、顔を洗って身を引き締めた後、クローゼットから新調したダークグレーのスーツを取り出した。寝室のベッドにはスーツの横に新たに使用する銃、グロック17、シグサウアーP226が置かれ、その他にセシルから譲り受けた秘密警察の備品が置かれていった。

「あ～忙し、忙し～...」

アスカは、忙しく準備して自宅を後にして、マンション駐車場に向かい、愛車であるアウディシリーズからSUVタイプのQ5を選んで発車した。彼女は、スマートフォンをテレビモードに切り替えて運転していた。勿論、テレビを視聴するのは信号待ちの時だけで、運転中は音声だけでハイジャックに関する情報を確認していた。

「.....ここでハイジャック事件に関して新たな情報が入ったようです...！お伝えします...」

「.....！！」

アスカは、ハイジャック事件に進展があったことで神経が高ぶってしまい、脇見運転しそうになっていた。

「国土交通省からの発表によりますと、航空自衛隊、航空総隊司令部が追尾していた国籍所属不明機がハイジャック機の航行コースに接近してきたとのことです...詳しいことは情報が入り次第お伝えします...ここで一旦CMをお送りします...」

「...全く状況が読めない、空で何が起きているの？.....あ！」

アスカは、前方で手を振っているユリカに気づき、彼女を拾っていった。

「どうも...今、空で何が起きているか知っていますか？」

「...ええ、予想を遥かに超えたことが起きているようね...ハイジャック機と接触したのは何者かな？」

「その件も気になりますが...先ほど、マミコさんから連絡がありまして...」

「マミコさんから...彼女は何と？」

ユリカは、一度深呼吸してからアスカにある事実を明かそうとした。

「...偶然、ハイジャック機に搭乗した仲間から機内の状況を知らされたみたいで...ハイジャック犯は...猪本と御手洗のようです！」

「...！！！！」

その時、アスカはユリカの衝撃的な発言により、まともに運転出来ず、直ちに急ブレーキを掛けた。

「...目覚めてから驚くことばかりだわ、何故、彼らがハイジャックを...？」

「分かりません、ハイジャック機に搭乗している歌劇団の仲間からの返事を待っていますが...一切来ない状態のようで...」

「それだけ危険な状態に陥っているってことね...彼らの要求は何なんだろう？」

アスカたちは、車中で標的の動きを解き明かそうとするが、何も浮かばず、そのまま待っている仲間の場所まで向かうのであった。

一方、航空総隊司令部は謎の侵犯機とハイジャック機の接触に対して悪戦苦闘していた。

「...ハイジャック機の現状は分かったか？」

「はい、管制機関からの情報によると、現時点では乗員、乗客に死亡者、怪我人はおらず、ハイジャック犯の要求は不明とのことですが...犯人の人数は二人以上...銃器などを所持しています...」

「そうか...侵犯機による被害は受けていないんだな？」

「はい、そういった情報は入っていません」

航空総隊・司令官は、部下の報告を耳にして、ひとまず安堵の表情を浮かべた。

「...二機の接触が偶然でないとすれば目的が気になりますね...」

航空総隊・副司令官は、難しい顔で航空総隊・司令官に歩み寄った。

「とにかく不利な状況に変わりはない...よく考えて行動せねば乗員、乗客の命に危険が伴う...」

「...追尾中の機はどうしますか？」

「...監視は続けさせろ、どちらにしろ、今のままでは攻撃出来ないんだ.....それに...」

「...司令官、どうされました？」

その時、航空総隊・司令官の様子が一変して、航空総隊司令部の関係者は一旦作業を止めて、彼に注目していた。

「...電波障害のことだよ、戦闘機が誤作動を起こして停止してしまうとのことだが...心当たりがある...」

「それは本当ですか!？」

「推測にすぎないが.....電磁パルスが原因だと思う...」

「...電磁パルス!」

「ああ、電磁パルスは半導体や電子回路に損傷を与えたり、一時的に誤作動を起こす...電磁パルスは軍事的に実用化されつつあり、米国は開発を進めているようだ...」

「...あの侵犯機が電磁パルスを放っているということですか？」

「ああ、恐らくな...目に見えない攻撃のため、気づかれることはなく、電子機器が備わった武器は通用しないからな...」

「...対処法はあるのでしょうか？」

「...残念ながら外部からの攻撃が無効になる以上、打つ手はないだろう...標的が空なら尚更だ...」

「...そうですか、これは厄介ですね.....」

「.....ヴオオオオン.....！！！」

突如、航空総隊司令部内で停電が起きて、その場に居る者たちは慌てふためく状態となった。

「.....早く予備電源に切り替えろ！」

航空総隊・管制官の津々浦は、迅速かつ的確な指示を部下にするが、事態は予想以上に深刻であった。

「...駄目です、電力が回復してもシステムダウンのままです...通信網も誤作動が起きています...何者かに乗っ取られた模様です...！！」

「...こんな時に.....サイバー攻撃か？」

航空総隊司令部の人間たちは冷静に対応出来ず、焦りの表情はしばらく消えそうになかった。

「今日は色々面倒なことが起こるな...」

司令官たちは呆れ顔を浮かべ、対処法を見出すまで立ちすくんだままであった。そして、日本各地が未知なる脅威に晒されている中、その中心に立っている人物が存在感を示そうとしていた。

場所は変わり、大阪北区大型商業施設。これまでの傷ましい事件の原因を作った張本人がそこに居た。その人物の名は織藤尚也、表向きは民間軍事サポート会社の代表であるが、裏では「闇の仲介人」として君臨していた。彼はずっと自分のオフィスに閉じ籠り、野望の具現化に夢中であった。

「...パパパパパ」

織藤は、専用のタブレットを神業ともいえる速さでタッチ操作していた。どうやら複数の人物にメッセージを送って連絡を取り合っているようであった。

織藤「そちらは順調か？」

？「今のところ、問題はない、貰ったギャラの分はちゃんと仕事しているつもりだ」

織藤「分かっているよ、あんたたちの腕を見込んで頼んでいる、さすがペンタゴン（米国国防総省）やNSA（米国国家安全保障局）のセキュリティを何度も攻略しただけのことはあるな、こちらも予定通りだ、お膳立ては整った、これからが本番だ」

？「面白くなりそうだな、陸と海も抑えた、次のプランに移っても構わないんだな？」

織藤「ああ、いかに無力であるか知らしめたい、もう少し付き合ってくれ」

？「了解」

織藤と謎の通信相手は、現状を報告し合い一旦通信を中断した。謎の通信相手の正体は、織藤が雇った日本国籍の悪徳ハッカー集団（クラッカー）であった。彼らはその世界では、危険かつ優秀な人材で、各国の厳重なセキュリティが破られていき政府の機密情報の漏えい、強奪を日々行っている。織藤は、彼らに自衛隊組織の機能を麻痺させるよう依頼していた。彼の依頼を受けた悪徳ハッカー集団（クラッカー）は、大阪北区内に位置する古びたオフィスビルの一室を借りて、会話をほとんどせず黙々とハッキング作業を行っていた。

「.....」

誰も悪徳ハッカー集団（クラッカー）の存在に気づいていないと思われたが、一人、彼らが潜むビルを見る者が居て、その者の目は獲物を狙う獣のようで一切目を離そうとしなかった。ここでも何やら波乱が巻き起ころうとしていた。

一方、織藤はタッチ操作を続けて、別の相手とコンタクトを取ろうとしていた。

織藤「そろそろ時間だ、予定通り頼む」

大阪上空 熊本空港行き四〇一便（ハイジャック機）コックピットルーム

コックピットクルーは張り詰めた空気の中、ハイジャック犯メンバーである猪本の言う通りに操縦していた。

「...！」

その時、機長は後方で見張る猪本に注目した。

「...どうした？」

「.....いや、衛星通信機能搭載のスマートフォンを持っているとは...何から何まで用意周到だなと思って...」

「ああ、どんな些細なミスも許せないんでね、俺たちは駒に過ぎない...命じているのは地上に居るんだよ...勝手な行動は慎むよう言われていてね...」

「成程、乗員、乗客に危害を加えていないことは感謝する...しかし、このまま飛び続けるのは不可能だ...いずれ燃料が尽きるぞ...」

「そのことは心配するな、コース変更だ、大阪に引き返せ...」

「...何だって!？」

コックピット内が騒然とする中、猪本は淡々と着陸場所をクルーに発表しようとした。

「場所は大阪北区...第二期開発地域だ...」

「...!!!!？」

クルーは、猪本の発表で冷静さを失いつつあった。

「.....ちょっと待ってくれ！確かそこはただの空き地じゃないのか？着陸なんて不可能だ！何を考えている？」

副操縦士は、慌てて猪本に反論した。

「心配するな...操縦は出来ないが、機体の構造については調べ尽くした...今、引き返せば燃料は持つ...」

「...待ってくれ、燃料のことはともかく、彼の言った通り無理なんだ...滑走路以外の整備されていない陸地に着陸することは非常に危険だ...！」

「そうか、おたくらのようなプロでも無理なのか？」

「ああ...凹凸があつたり、水分を含んだ柔らかい地面なら尚更だ、その場合、機体は着陸時に掛かる重量に耐えられず大事故に繋がってしまう...」

「...我々や人質たちは助からないということか？」

「ああ、その通りだ、従うことは出来ない、何を企んでいるか知らんが無謀だ...！」

機長が反論すると、猪本の穏やか表情が一変した。彼は冷たい目つきのまま、機長に特殊銃を突き付けて脅そうとした。

「.....再確認しておくが、お前たちはこの件の人質であるのと同時に乗員、乗客の命を預かっている立場だ...そっちが操縦を放棄すれば我々も死ぬが、人質全員も死ぬこととなる...選択肢は二つしかない...従うか、従わないかだ...さてどうする？」

機長は、猪本に重大な決断を迫られて大量の汗を掻いていた。彼に考える時間はあまりなかった。

「.....分かった、やれるだけやってみよう.....」

「...俺たちの命運はおたくらの腕に懸かっている...」

機長は弱々しい声を発して、苦渋の決断で猪本に従おうとした。その他クルーたちも仕方なく

着陸の準備に取り掛かることとなった。管制機関はハイジャック機の不穏な動きに気づき、その場に居た関係者は混迷を極めていた。

「.....機の高度が下がっている...まさか着陸する気では?...今、飛んでいるコースの先に空港はありません！」

「...何処に降りる気だ?このままだと街中に突っ込むことになるぞ...！」

「...どうにか出来ないんですか？」

交渉担当の捜査員は、管制官チーフの佐原に何か解決策がないか訊いてみたが、彼は俯いたままで口を開くのに時間が掛かった。

「.....通信が切られ、正規のコースを飛んでいない以上、こちらからナビゲートすることは不可能だ...残念ながらコックピットクルーに任せるしかないです...」

「.....とにかく計り知れない被害を受けることは間違いない...本部に知らせて現場付近に警官隊を派遣させます...S A T部隊も出動も必要になるかと思えます...！」

佐原の弱気な発言で管制塔内は絶望感に満ちて静まり返ったが、落ち込む暇もなく、すぐに慌ただしさが戻り、彼らは緊急事態に対応するのに必死であった。

一方、機長は乗員、乗客に緊急着陸のことについて伝えようと機内アナウンスを行おうとした。

「.....乗客の皆様、現在、緊急事態により航路を変更しており...突然のことで申し訳ありませんが、まもなく着陸態勢に入りますので絶対に立ち上がりず、シートベルトを着用して下さい...」

機長のアナウンスが終わった後、乗客は不安げな表情を浮かべながら指示に従おうとした。その場に居る御手洗やハイジャック犯メンバーも緊急着陸に備えようとした。

「.....あのすみません...」

その時、謎の女性客がそっと挙手して御手洗たちに話し掛けようとした。

「...ん？どうした？」

「.....あの...さっきから我慢していたんですが、お手洗い行かせてもらってもいいですか？」

「...駄目だ、もう着陸態勢に入っている、トイレは着陸した後に行かせてやる、それまで我慢しろ！」

謎の女性客は、要求をあっさり拒否されて黙って座り込んだ。

「.....」

ハイジャック機に居合わせた歌劇団メンバーのカリン、レイコは反撃する機会を待つ静かに着席するのであった。また、謎の侵犯機ムリーヤは、ハイジャック機に先導されるかのように飛行を続けていた。

「.....速報が入りました、現在、ハイジャック機と国籍所属不明機は高度を下げて大阪北区のオフィス街上空を飛行しているとのことです...」

「...先輩」

「...まさか目的地が一緒とはね...」

ハイジャックの現状が報道され、アスカたちの耳に入っていた。

「...何となく織藤の企みが読めてきました...先輩はどうですか？」

「私も分かって来たわ、大胆なことを考えるわね、でも、これ以上好きにさせないわ...そろそろ反撃しないとね...」

アスカは闘志に燃えており、ユリカと共に決戦場へと急いだ。

同じ頃、ハイジャック機、謎の侵犯機ムリーヤが降下して行くと、大阪の高層ビル群が見え始め、さらには猪本が険しい顔で特殊銃を向けて見張っていることから、コックピットクルーは一層緊張感を持って、慎重に計器に触れて的確に操作をしていた。ハイジャック機内はまさに天

国と地獄の狭間を進んでいた。

「.....着陸地点捕捉、機体は安定しています...」

「了解...」

機長は若干手が震えているため、気持ちを落ち着かせてから操縦桿を握った。こうして乗員、乗客の命運は彼に委ねられた。「...ボブオオオオオオオオオオ！！...」

ハイジャック機は轟音を立てて、着陸地点である第二期開発地域に向かっていった。

「.....あれ?.....随分低く飛んでいるな.....ママ～飛行機～♪.....おい...何かおかしくないか?.....」

ハイジャック機と謎の侵犯機ムリーヤは、地上に居る人間の視界に入り不安感を煽っていた。彼らの頭に過ったのは二〇〇一年に米国で起きた同時多発テロ事件であった。その事件ではテロリストにハイジャックされた旅客機がマンハッタン高層ビルに衝突するという極めて凄惨なことが起こり、それを連想していたのであった。衝撃の現場を目撃した一般市民たちは、自然と専用のタブレット端末を手に取り、カメラ機能を利用して接近してくる飛行機二機を撮影していた。やがて、撮影された静止画、動画はネット上に流れて国内のみならず、全世界の注目の的となるのであった。

「...ファン、ファン、ファン.....」

出動要請を受けた警官隊は、パトカーのサイレンを鳴らして姿を現すが、経験したことがないことに遭遇して、本部の指示を待つしかなかった。

大阪北区内複合商業施設ホテルエリア

マミコ班メンバーであるカオリ、サキ、アスミ、ヒトミは二手に分かれて標的の監視を行っていた。指揮代理を任されたカオリは、オペレーター担当のアスミと共に宿泊部屋から指示をしていた。残りのメンバーは外に出て、ホテルと隣接したオフィスビルに潜む織藤の監視を続けていた。

「...標的に変化なし...ただ、問題発生よ...」

カオリは、後輩にハイジャック事件の現状を伝えようとしたが、彼女たちは薄々周りの異変に

気づいていた。

「...そのようですね、立ち止まって驚いた顔でスマートフォンの画面を見ている人が多いですから...うちが扱っている件と何か関係が？」

まず、好奇心旺盛のサキがカオリに問いただした。

「まあ聞いて、今、ハイジャックのことで騒ぎになっているけど...そのハイジャックされた航空機がこっちに向かっているみたいなのよ...」

「えー！！！！？それ本当ですか！！？」

「！！？」

その時、サキとヒトミは思わず大声で叫んでしまい、周りの人間に変な目で見られていた。

「...とにかく落ち着いて...機体にトラブルはないようだから墜落する恐れはないわ、マミコさんたちが到着するまで予定通りに動くこと...絶対に織藤から目を離さないようにするのよ...！」

「了解」

サキとヒトミは、カオリの指示に従って外での監視を続けた。

「...例のハイジャック機、明らかにこっちに向かって来てますよ...嫌な予感しかしませんね...」

「そうだね...あのさ、無人偵察機の方は私が操作するから、アスちゃんには他にやってほしいことがあるんだけど...」

「何ですか？」

アスミが訊ねると、カオリはSNSで流れているハイジャックの映像を静かに指差した。彼女が気になっているのは、ハイジャック機ではなく、後方で飛んでいる謎の侵犯機ムリーヤであった。

「この巨大輸送機がどんなものか調べて...皆が集まる前に...」

「了解しました、すぐ調べます」

カオリは、謎の侵犯機ムリーヤのことを不審に思い、織藤の野望を解き明かそうとした。その一方で、大阪北区上空を飛んでいるハイジャック機と謎の侵犯機ムリーヤは旋回して、第二期開発地域に緊急着陸しようとしていた。その模様は、オフィスビルで仕事をしている人間の目にはっきり映り信じられない光景であった。

「...高度を調整...車輪を降ろします」

「了解...」

機長は乗員、乗客の命と責任を背負って操縦桿を引いた。ハイジャック機と謎の侵犯機ムリーヤは、整備されていない広大な空き地に吸い込まれるように降下して行った。

「...わあああ...きやああああ.....!!!」

機内が衝撃で大きく揺れたことで乗客は錯乱状態となり、悲鳴を上げる中、死を覚悟している者も少なくなかった。CAたちもまた同じ気持ちで涙を浮かべていた。

「...ギュオオ.....ンンンン...!!!」

ついに、ハイジャック機の手輪が地に着き、運命の時が訪れた。機体は着陸時の重力にどうにか耐えて、エンジンにトラブルなし、損壊は一切なく奇跡的に分解事故は免れた。第二期開発地域の敷地面積は、十七ヘクタール(十七万平方キロメートル)、機体前方に障害物はなく、十分に地上滑走を行える状況であった。

「.....ぐぐ...停まってくれ...!!!」

機長は、長年の経験と勘を頼りにして無事に自ら操縦する機が停止をすることを願った。コックピットクルーも着陸の成功を信じていた。

「.....イイイイイイイン!!!!」

ハイジャック機は、千数メートルほど地上滑走して耳が痛くなるくらいのエンジン音を鳴り響かせていたが、それも徐々に収まっていった。

「.....と.....停まった.....」

ハイジャック機は、砂煙を立てて停止した。着陸した時間は、一二時四分三七秒。飛行時間は

半時間ほどであるが、人質となった乗員、乗客はその時間がとても長く感じて、一生忘れられないほどの苦痛と恐怖を味わうのであった。

「...ふ」

ハイジャック機と謎の侵犯機ムリーヤが無事に着陸した途端、猪本は不敵な笑みを浮かべた。それはさらなる絶望を呼び寄せることを予兆していた。二機が第二期開発地域に降りたことは、管制機関ならびハイジャック対策に関わっている各方面に伝わり迅速に動こうとした。

大阪府警 会議室

「.....ようやく出番だ、頼んだぞ」

「はい、お任せ下さい、直ちに現場に向かわせます」

大阪府警本部長は、警備部長の檜橋にSAT（特殊急襲部隊）の指揮をするよう命じた。

航空自衛隊横田基地航空総隊司令部

司令部は、謎の侵犯機ムリーヤの対処と織藤が雇った悪徳ハッカー集団（クラッカー）の攻撃で疲れ果てていたが、ようやく騒ぎが収まり安息の時間を得ていた。

「現在、システムは回復して正常です、通信障害もなくなり、全国の基地と連絡を取り合えてスクランブル機にも命令が出せます...」

津々浦は、航空総隊・司令官に現状報告をしていた。

「一時はどうなるかと思ったが...管制機関には繋がったのか？」

「はい、一つ気になる報告が入りまして...ハイジャック機と例の侵犯機は緊急着陸したようです、場所は大阪北区の第二期開発地域です...」

「...何故そのような場所に.....ただ、あの二機が接触した理由が分かってきた...」「それは本当ですか？」

津々浦は、航空総隊・司令官の発言に興味を持ち、副司令官や手が空いた職員たちも黙って彼の話を聞こうとしていた。

「.....話のカギになるのは、さっき話した電磁パルスだ...ムリーヤには目に見えない武器が備わっている、我々は苦戦を強いられていたわけだが、反撃する機会もあったのだ...」

「...え？それって何時ですか？」

「...ハイジャック機と接触した時だよ、あの時だけ電磁パルスを使用することは不可能だったんだ...」

「...何故ですか？」

「使用すればハイジャック機にも被害が及ぶ...計器は誤作動を起こして墜落してしまう恐れがある...」

「...ちょっと待って下さい、侵犯機はハイジャック機を盾代わりにしたのではないんですか？」

津々浦や司令部の関係者の多くは大きな勘違いをしており、航空総隊・司令官は一つの謎を解き明かそうとした。

「侵犯機は...守ろうとしたのと同時に守られていたとすれば...二機の接触は偶然ではなく必然だった...ハイジャック機に共謀者が居るとすれば簡単なことだ...」

「まさか...その共謀者はハイジャック犯ですか？」

航空総隊・司令官は津々浦の名答に対して、うっすらと笑みを浮かべた。

「間違いないだろう、二機が接触するのは予定通りだった...さらには完全に障害を無くそうと次なる作戦を実行した...」

「あ...そういえば、二機が接触してすぐ司令部は大規模なサイバー攻撃を受けた...！」

「そうだ、通信網は麻痺してスクランブル機に命令が出せなくなる、そして、二機が着陸したことで騒動は収まった、我々はまんまと奴らの罠にはまったわけだ...」

「...そんな.....何てことだ.....」

「つまり、ハイジャック機がもてなし役、ムリーヤがゲストということになる...」

航空総隊・司令官の推理は見事に的中していた。ハイジャック機は先導するために謎の侵犯機ムリーヤを待っていた。そして、見えない防壁を幾つも造り、一切、攻撃を受けず目的地に辿り

着いたのであった。

「.....あの二機は着陸しましたが、まだ解決には至っていません...真の目的は何でしょうか？」

「...さてな.....主謀者は何者か分からないか、巧妙かつ卑劣な犯行から大規模なテロ行為と断定される...ここからが正念場かもしれない...！」

司令部に居る職員たちは、航空総隊・司令官の衝撃的な発言に返答出来ず、しばし茫然としていた。

一方、場所を変わり、東京秘密警察都内エリア第二支部。最高責任者の白林は、パソコン画面に映っている無料動画に集中していた。映っているのは、大阪上空を飛んでいるハイジャック機と謎の侵犯機ムリーヤであった。彼は気になることがあり視聴中の動画を停止させた後、部下のアカネを呼び出した。

「この動画観たか？」

「はい、うちが追っている件と関係ありそうなので...リサーチ済みですが...」

「相変わらず仕事が早いな、怪しいと思ったのは何時からだ？」

「...例のハイジャックが起きてから胸騒ぎがしました、犯人グループは織藤の仲間だと分かり、その後、この侵犯機が現れた...大阪に派遣されたマミコ班から送られた報告メールで全ての一本の線に繋がりました...」

アカネは、専用のタブレット端末を取り出して白林にマミコ班のメンバーから送信されたメールを見せた。それにはある資料が添付されていた。

「...この侵犯機、見たことがあると思ったら、やはりロシアの輸送機か...」

「正確にはウクライナと共同開発...ソ連時代に完成した大型輸送機です、当時、`コサック、'というコードネームがありました...」

「元々は宇宙事業で利用するのを目的に開発されましたが、ソ連崩壊によって長い間、工場に放置されました...二機製造されましたが、二号機は未完成のまま放棄されています」

「...何か機体の色が違うような...本物なのか？」

「...不明です、運用されているのは一期だけのはずですが...」

「...もし、改造されたり強奪されたのなら騒ぎになるはずだが...そんなことをするのは碌な連中じゃない...これで侵犯機の搭乗者の正体が分かったな...何とも大胆な来日の仕方だ...取引場所は随分と殺風景だな...」

「マミコ班全メンバーはじき、現場に集結します...このまま任務を続行させますか？」

「勿論だ、何としても彼女たちに標的の野望を阻止してもらおう！」

「了解しました...それではまた進展があれば報告します...」

アカネは、密かにアスカが参戦していることを隠して、白林の部屋を後にした。

ハイジャック機内コックピット

「...ふう.....はあ...はあはあ...」

コックピットクルーは、乗員乗客人数二百七十二名を乗せた航空機の着陸に全力を注ぎ疲労困憊していた。

「よく頑張ったな、そのまま休んでおくといい...」

猪本は、命懸けの操縦を終えたコックピットクルーに優しく接していた。また、キャビン内もひとまず落ち着きを取り戻して休憩時間を設けていた。

「...トイレは順番に並んで使え、余計なことはするなよ、ちゃんと扉の前で見張っておくからな...」

化粧室（トイレ）を利用する乗客たちは、前方後方と二手に分かれて並び、ハイジャック犯A、B（織藤の部下）が立って彼らを見張っていた。

「.....」

カリンとレイコは、自分たちが置かれた状況をどう切り抜けるか、どうやって乗員、乗客を助けるかを考えて、ひとまず化粧室（トイレ）に行く振りをした。

「...ドデ！！」

その時、レイコは化粧室（トイレ）の列に並ぶ乗客とぶつかった。ぶつかった乗客はレイコの近くで躓いた。

「あの...大丈夫ですか？」

「ごめんなさい、私ったらドジで...」

レイコとぶつかったのは、謎の女性客であった。

「...私こそ、ぼけっとしていたんで...」

レイコはそう言って、謎の女性客に手を差し出して、彼女の体を起き上がらせようとした。

「.....あなたは...後ろのトイレに行って...」

「...え？」

その時、謎の女性客はレイコの耳元で囁きはじめた。

「...私の言う通りに動いて.....トイレに入った後.....」

謎の女性客は、早口でレイコにあることを伝えた。そして、レイコはハイジャック犯に気づかれないよう頷いて承諾した。

「あの人、まさか...！」

レイコは、謎の女性客の正体に気づいたようであったが、表情に出さないまま後方の化粧室（トイレ）の方に並んだ。謎の女性客は、そのまま前方の化粧室（トイレ）の方に向かおうとした。ただ、様子がおかしく、彼女はカリンの後をついて行くようにして並んだ。

「...後ろを振り向かず黙って話を聞いて.....」

「...！？」

謎の女性客は、レイコの時と同じようにカリンの耳元で囁いて何かを伝えていた。カリンもまた用件を聞いた後、静かに頷いて平然とした表情を浮かべていた。カリン、レイコは予期せぬことで動揺する中、反撃の時を狙っているのであった。

一方、外は着陸したハイジャック機と謎の侵犯機ムリーヤのことで騒ぎになっていた。警官隊は、現場付近に集う野次馬の対応に追われて揉み合うほど荒れていた。

「...突入班、狙撃班、いつでも配置に就けます...」

「...了解、指示があるまで待て」

SAT（特殊急襲部隊）の隊長は、指揮官の檣橋に報告して次の指示を待った。第二期開発地域の周囲は、瞬く間に何十台ものパトカーの赤色灯の光に包まれていた。

同じ頃、アスカとユリカは大阪北区のオフィス街に辿り着いた。そこは群衆や車で混雑していた。

「...随分と騒がしいですね、警官の数も数えきれません」

「そりゃ、そうでしょ...悪いけど、運転代わってくれる？」

「どうするんですか？」

「奴に会いに行くわ...まだ自分のオフィスに居るはずよ...ここからだとは走った方が早い...」

「...分かりました、また後でお会いしましょう...」

アスカは、愛車の運転をユリカに任せて単独で織藤に会おうとした。

「...よし、次、入れ」

ハイジャック犯Aは、並んでいるレイコに声を掛けた。

「.....」

レイコは、黙って化粧室（トイレ）に入って、何かを始めようとした。

一方、謎の女性客はハイジャック犯の目を盗んでコックピットルームへと向かっていた。彼女は姿を消した御手洗がそこに居ると確信してコックピットクルーの安否が気になって仕方ない様子であった。

「...！」

コックピットルームの扉の鍵は、御手洗に破壊されたため開いていた。謎の女性客はそっと扉を開けて入室を試みた。室内はやけに静かで、彼女は不穏な空気が漂った空間に一気に踏み込もうとした。

「...！！！！！！？」

その時、謎の女性客は思いがけない光景を目にして顔色を一変させていた。コックピットルームには、血まみれのコックピットクルーたちが倒れ込んでおり、既に手遅れの状態であった。

「急所に銃弾一発.....ごめんなさい...助けられなくて...！」

謎の女性客は、コックピットクルーの変わり果てた姿の前で驚愕しているようだが、悲鳴を上げたり動揺する様子はなかった。彼女は意外と冷静で殺害されたコックピットクルーに合掌した後、まるでドラマに出てくる刑事のように殺害現場を確認していた。

謎の女性客の正体は歌劇団ベテランスター兼秘密警察メンバーの一人であった。名はトモコ。彼女は、歌劇団のスペシャリスト集団の班のトップスターに就任、さらには同劇団での長年の功績が認められて歌劇団理事も兼任している。また、多才な人物であり、幼少時代から絵画や日本舞踊の習い事をして、経験が将来の仕事に活かされている。絵画については個展に出品するほどの実力。裏稼業でも優秀な人材で多くの難解な事件を解決してきたエキスパートである。

今回、彼女は震災被害を受けた故郷に里帰りするために熊本空港行き四〇一便に搭乗したが、不運にもハイジャック事件に巻き込まれることとなった。そして、カリンとレイコが同業者と分かり、後輩の彼女たちに乗員、乗客救出のための的確な指示を出したのであった。

「.....ち！」

トモコは、パイロット脱出用のハッチを目にして御手洗と猪本を逃がしたことを悔やんだ。

一方、キャビン内にも変化が起きようとしていた。まず、動き出したのはレイコであった。

「...おい！何時まで入ってんだ？早く出て来い！聞いてんのか？...」

ハイジャック犯Aはなかなか出てこないレイコに苛立ち、扉を何度も叩きながら彼女に呼び掛けた。

「...ガチャ」

ハイジャック犯Aがレイコの応答を待つと、化粧室（トイレ）の扉の鍵が急に開いた。

「.....！！？」

ハイジャック犯Aは、レイコが居る室内を確認しようとしたが異変が起きた。彼は右腕を掴まれ、そのまま引っ張られた。

「??」

周りの乗客は、室内で何が起きているか分からないまま呆然と立っていた。

「...ガチャ」

それから数分経つと、化粧室（トイレ）の扉が開き、中から平然とした顔のレイコが出てきたのであった。

「...皆さん、もう大丈夫です、安心して下さい！」

レイコはそう言って、周りの乗客の不安な気持ちを吹き飛ばそうとした。キャビン内はレイコの謎の行動でどよめき始めていた。ハイジャック犯Aは、閉じ込められた室内で気絶していた。

「...ん？何だ？」

ハイジャック犯Bは、キャビン内の異変の原因を探ろうと、仲間が居る後方の化粧室（トイレ）に向かおうとした。

「.....ぐ.....え...！」

その時、ハイジャック犯Bは苦しむ暇もなく人形のように倒れ込んだ。

「きゃー!!!」

周りの乗客は、突然のことで愕然として悲鳴を上げる者も居た。

「.....すみません、どうか落ち着いて下さい...私と後ろに居る女性は味方です!あなた方を救出します!...客室乗務員の方は力を貸して下さい!!」

カリン、レイコは、ハイジャック犯Bにダメージを与えて気絶させた後、乗員、乗客の救出に専念しようとした。

「...それではお一人ずつ順番に...ここから脱出して下さい!」

CAは、乗客を脱出させようと非常口の緊急脱出スライド（滑り台）を展開させた。

乗客はようやく外の空気が吸えて安堵の表情を浮かべるのであった。かくして、自由を奪われた乗員、乗客は歌劇団兼秘密警察三名に救われたのであった。

そして、アスカと織藤の最終決戦の舞台の準備が整い、幕が開く時間が刻々と迫るのであった

。

戦乱の囀り 翔の章

<http://p.booklog.jp/book/105524>

著者 : iwaiwa01663856

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/iwaiwa01663856/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/105524>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/105524>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ